伊吹町文化財調査報告書第８集

伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ

伊吹町大久保所在　長尾寺遺跡

伊吹町曲谷所在　ムカイラ遺跡（第２次）

伊吹町曲谷所在　石臼生産遺跡

1994. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

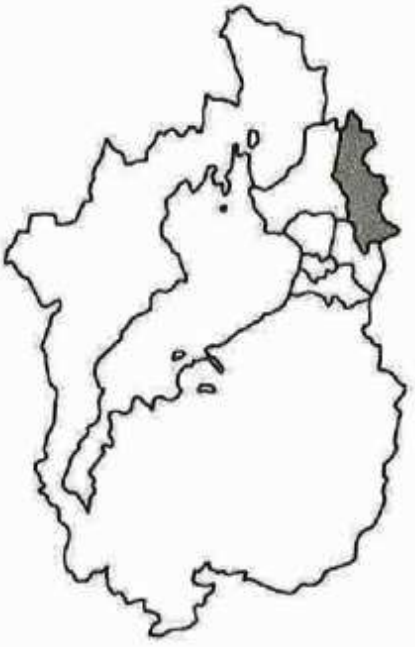
伊吹町文化財調査報告書第８集

伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ

伊吹町大久保所在　長尾寺遺跡（ながおじいせき）

伊吹町曲谷所在　ムカイラ遺跡（第２次）

伊吹町曲谷所在　石臼生産遺跡（いしうすせいさんいせき）



1994. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

冬になると、毎年のように交通情報で耳にする言葉が、“関ケ原付近の積雪のため、東海道新幹線は只今徐行運転をしています。”というアナウンスです。これは、大陸から吹く西の風が、日本海の湿気を吸って、本州を南北に貫く山脈にあたり雪をもたらすためです。

伊吹町は、まさにそのまっ只中にあり、新幹線の車窓から雄大な姿を見せる伊吹山が、ときには日本の東西の動脈である新幹線の徐行運転を余儀なくさせているのです。しかし、ちょっと日本地図を見てください。国土の七割を占める山脈列島の中で、唯一山脈が切れているのが、岐阜県関ケ原町と滋賀県坂田郡伊吹町および山東町を結ぶ地域なのです。これは日本海の若狭湾と太平洋の伊勢湾を平地で結ぶ南北の軸であり、現在では、本町内を通過する国道365号線がそれにあたります。

近江は日本列島の東西軸と南北軸の十字路といわれています。その中にあって、まさにその中心に位置する坂田郡の役割を、あらためて認識し、生かしていこうとする動きが、いま盛んにおこなわれています。

本報告書は、開発や山間部の荒廃にともなっておこなった発掘調査の記録です。縄文遺跡の可能性を確認した調査、山岳寺院の調査などは、本町の歴史的特徴を代表するものであり、石臼生産遺跡での調査は、石材産地に立地するとはいえ、その広範囲な流通は、やはり十字路の中心に位置していた結果であろうと思います。とくに後半の石臼関連の調査は、現在県内で盛んにおこなわれている中世遺跡、とくに城館跡調査にも有効な資料になるものと考えています。

本町では「薬草の里」としての位置付けのもと、５月の文化センター開館をはじめ、今後、薬草に関する多彩な事業や研究がおこなわれます。例えば文化文政の時代から、町内では石臼を使ったもぐさ製造が盛んにおこなわれていますが、今回の石臼調査は、その技術的な部分を解明する資料提供になったものと思います。

末筆になりましたが、調査に際しまして、ご指導・ご協力を賜りました関係諸氏、関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

１９９４．３

伊吹町教育委員会
教育長　石河竹二郎

例　　言

1．本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、平成５年度国庫補助事業として実施した町内遺跡の調査報告書である。

2．本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、伊吹町教育委員会が主体となって実施した。このうち長尾寺遺跡は平成４年11月から12月にかけて現地調査をおこない、平成５年度に整理調査を実施した。

現地調査は伊吹町教育委員会社会教育課技師・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体　伊吹町教育委員会　　教育長　石河竹二郎

調査事務局　伊吹町教育委員会　社会教育課

課　　長　堀内安夫　　課長補佐　篠原　渡

主　　任　的場文男　　主　　事　甲斐沼和弥

調査作業員　森下豊一　坪井留義　柏　　学　宮川満子　瀧澤康仁

柏　隆一　森　幸子　山田ゆかり　福永　卓　山田　卓

横田泰規　山田真理香　山崎あかね

3．遺物の整理・復元・実測に関しては上記作業員のうち、宮川、瀧澤、柏隆、森、山田ゆ、福永、山田卓、横田、山田真、山崎でおこなった。

4．本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表す次第である

大久保区長・惣持寺・曲谷区長・曲谷地区ほ場整備組合・世一政行・表地武一・水長修・三輪茂雄（同志社大学）・兼康保明（滋賀県教育委員会）・木戸雅寿、小竹森直子、勝見孝彦（安土城郭調査研究所）・福永円澄（伊吹町史編さん室長）・菅沼晃次郎（滋賀民俗学会）・高橋俊示（岐阜県地理学会名誉会長）・河内美代子（米原町文化財専門委員）・山崎清和（湖北町教育委員会）・宮崎幹也（近江町教育委員会）・桂田峰男（山東町教育委員会）・中井　均、土井一行（米原町教育委員会）・垂井町史編さん室・中村廣思、北村茂八（垂井町菅菰記念館）・日下徳重（大安町郷土資料館）・古賀真木子（山口市教育委員会）・段上達雄（宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）　〔敬称略〕

5．長尾寺遺跡出土遺物の写真撮影については寿福写房（寿福　滋氏）にお願いした。

6．遺物の番号は本文中・挿図・図版ともに対応する。

7．本書の執筆、編集は高橋がおこなった。

目　次

長尾寺遺跡

第1章　調査の経過 …… 2
第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
第3章　調査の結果 …… 3
第4章　出土遺物 …… 9
第5章　まとめ …… 15

ムカイラ遺跡（第2次）

第1章　調査の経過 …… 25
第2章　遺跡の位置と環境 …… 25
第3章　調査の概要 …… 25
第4章　まとめ …… 26

石臼生産遺跡

第1章　調査の経過 …… 30
第2章　遺跡の位置と環境 …… 31
　第1節　遺跡の位置 …… 31
　第2節　自然環境 …… 31
　第3節　歴史的環境 …… 33
　　1　東草野地域の歴史　2　曲谷における石材加工の系譜
第3章　調査の成果 …… 37
　第1節　曲谷臼の形態 …… 37
　第2節　製作工程の復元 …… 46
　　1　製作工程の復元　2　破損状況の分析　3　道具
　第3節　遺跡出土の曲谷臼 …… 72
　　1　小谷城跡（湖北町）　2　菩提山城跡（垂井町）
第4章　まとめ …… 78
付　章　滋賀県下出土の石臼 …… 81

挿図目次

（長尾寺遺跡）
第 1図　長尾寺遺跡位置図 …… 1
第 2図　トレンチ位置図 …… 4
第 3図　トレンチ１平面図 …… 5
第 4図　トレンチ１土層断面図 …… 5
第 5図　トレンチ２平面図 …… 7
第 6図　トレンチ２土層断面図 …… 7
第 7図　トレンチ１遺物出土状況 …… 8
第 8図　トレンチ２遺物出土状況 …… 8
第 9図　トレンチ１出土土器 …… 10
第10図　トレンチ１・２出土土器 …… 18
第11図　トレンチ１出土土器 …… 19
第12図　トレンチ１・２出土土器、表採土器、トレンチ２出土金属製品 …… 20
第13図　出土石製品（宝珠請花） …… 21
第14図　出土石製品（笠・塔身・一石五輪塔） …… 22
第15図　出土石製品（基礎・石仏） …… 23
（ムカイラ遺跡）
第16図　ムカイラ遺跡位置図 …… 24
第17図　試掘トレンチ配置図 …… 27
第18図　試掘トレンチ土層柱状図 …… 28
（石臼生産遺跡）
第19図　石臼生産遺跡位置図 …… 29
第20図　伊吹町地形区分 …… 32
第21図　伊吹町地質図 …… 32
第22図　出土遺物実測図 …… 39
第23図　石臼実測図 …… 40
第24図　石臼実測図 …… 41
第25図　石臼実測図 …… 43
第26図　出土遺物実測図 …… 45
第27図　出土遺物実測図 …… 48

第28図　出土遺物実測図 …… 50
第29図　出土遺物実測図 …… 52
第30図　出土遺物実測図 …… 54
第31図　出土遺物実測図 …… 55
第32図　出土遺物実測図 …… 57
第33図　出土遺物実測図 …… 58
第34図　出土遺物実測図 …… 60
第35図　出土遺物実測図 …… 61
第36図　出土遺物実測図 …… 62
第37図　遺跡位置図 …… 72
第38図　出土遺物実測図 …… 74
第39図　菩提山城跡縄張図 …… 77
第40図　掲載遺跡位置図 …… 82
第41図　出土遺物実測図 …… 87
第42図　出土遺物実測図 …… 88

写真目次

（ムカイラ遺跡）
写真 1　出土縄文土器 …… 27
（石臼生産遺跡）
写真 2　白山神社板碑 …… 36
写真 3　宝篋印塔台座未製品 …… 36
写真 4　秋葉神社石室 …… 36
写真 5　秋葉神社石室銘 …… 36
写真 6　石を運ぶ道具 …… 67
写真 7　大形ハンマー・こやすけ …… 67
写真 8　小形ハンマー …… 68
写真 9　目立てをする道具 …… 68
写真10　ノミ類 …… 68

図表目次

（石臼生産遺跡）

表 1　上臼計測値グラフ …… 44
表 2　下臼計測値グラフ …… 44
表 3　放棄臼工程別構成グラフ（上臼） …… 64
表 4　放棄臼工程別構成グラフ（下臼） …… 64
表 5　上臼工程別放棄原因 …… 65
表 6　下臼工程別放棄原因 …… 65
表 7　世一家資料計測値一覧（本文記載分） …… 69
表 8　世一家資料計測値一覧（本文記載以外） …… 69
表 9　滋賀県内における出土石臼一覧表 …… 89

図版目次

（長尾寺遺跡）

図版 1　（上）長尾寺遺跡周辺空撮　（下）後谷墓地
図版 2　（上）作業風景　（下）トレンチ１全景
図版 3　（上）遺構出土状況　（下）遺物出土状況
図版 4　トレンチ１出土遺物
図版 5　トレンチ１出土遺物
図版 6　（上）トレンチ２出土遺物・表採遺物　（下）金属製品
図版 7　出土石製品
図版 8　（上）石臼生産遺跡周辺空撮　（下）出土した石臼未製品
図版 9　出土遺物等
図版10　出土遺物
図版11　出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物
図版14　出土遺物
図版15　出土遺物

長尾寺遺跡

－伊吹町大久保（おおくぼ）－

俗に伊吹山四ヵ寺と呼ばれる山岳寺院の一つで、尾根上にある古墓の調査をおこないました。盗掘をうけており、墓地としての遺構は確認できませんでしたが、13～14世紀を中心とする陶器や五輪塔などの石造品が出土しました。

五輪塔

第1図　長尾寺遺跡位置図

(1.長尾寺跡 2.観音寺跡推定地 3.太平寺跡推定地 4.弥高寺跡)

第1章 調査の経過

長尾寺遺跡は、伊吹町大字大久保字上ノ山、中森、東川原にまたがって所在する山岳寺院跡である。

長尾護国寺は、伊吹山の西および南の山腹尾根上にある弥高護国寺・太平護国寺・観音護国寺とともに俗に伊吹四ヵ寺と呼ばれる。このうち弥高寺遺跡は昭和60年を中心に測量ならびに試掘調査がおこなわれ、その全貌の一端が明らかとなった[1]。その結果をうけて、昭和61年に滋賀県指定史跡となった。引き続き町では、伊吹山寺の考古学的調査を継続しておこない、伊吹山を中心とする山岳仏教遺跡を少しでも明らかにすることを目的に、弥高寺についで遺跡ののこりの良好な長尾寺跡について、現状把握するための調査をおこなった。平成元年度から3年度にかけて、遺跡の中心部分とその周辺の測量調査をおこない、60以上の大小の坊跡を確認し[2]、この結果を受けて、平成4年9月1日に伊吹町指定史跡とした。平成4年度には、遺跡の年代を決定づける資料を得るために、通称「後谷墓地」の発掘調査を実施した。昨年度その概要を報告したが[3]、今回は主に出土遺物を中心に報告したい。これらの調査で、今後の史跡保存や町づくりに役立てる基礎資料が得られたものと考える。今後の継続した調査と、保存計画の策定が必要である。

後谷古墓を調査対象としたのは、馬の背状の尾根上に立地しており、過去に自然災害を受けていて現状も危険なことと、昭和56年を中心に陶磁器目当ての盗掘があり、その後の遺跡の状況、とくに地中の状況を確認する必要があったからである。

調査は、文化庁と滋賀県教育委員会の指導と補助を受け、地元大久保区と土地所有者である惣持寺のご協力を得て実施した。現地調査を平成4年11月から平成5年3月にかけておこない、平成5年度に出土遺物の整理・実測・復元等をおこなった。

第2章 遺跡の位置と環境

伊吹町は滋賀県の北東端に位置する。町域は北中部が伊吹山地と七尾山系にはさまれた姉川の河谷部で、南部は伊吹山から派生する川が形成する扇状地からなっている。大久保は、町の中部姉川左岸の河岸段丘上に立地している。背後に伊吹山が迫り、長尾寺遺跡は背後の尾根上の標高約240～325mに所在している。中心となる尾根には扇状に坊跡群が展開しており、「大進坊」、「北の坊」、「池の坊」などの伝承を持つ平坦地がある。遺跡の現状はほとんどが山林で、集落に近いところは畑地や宅地になっている。

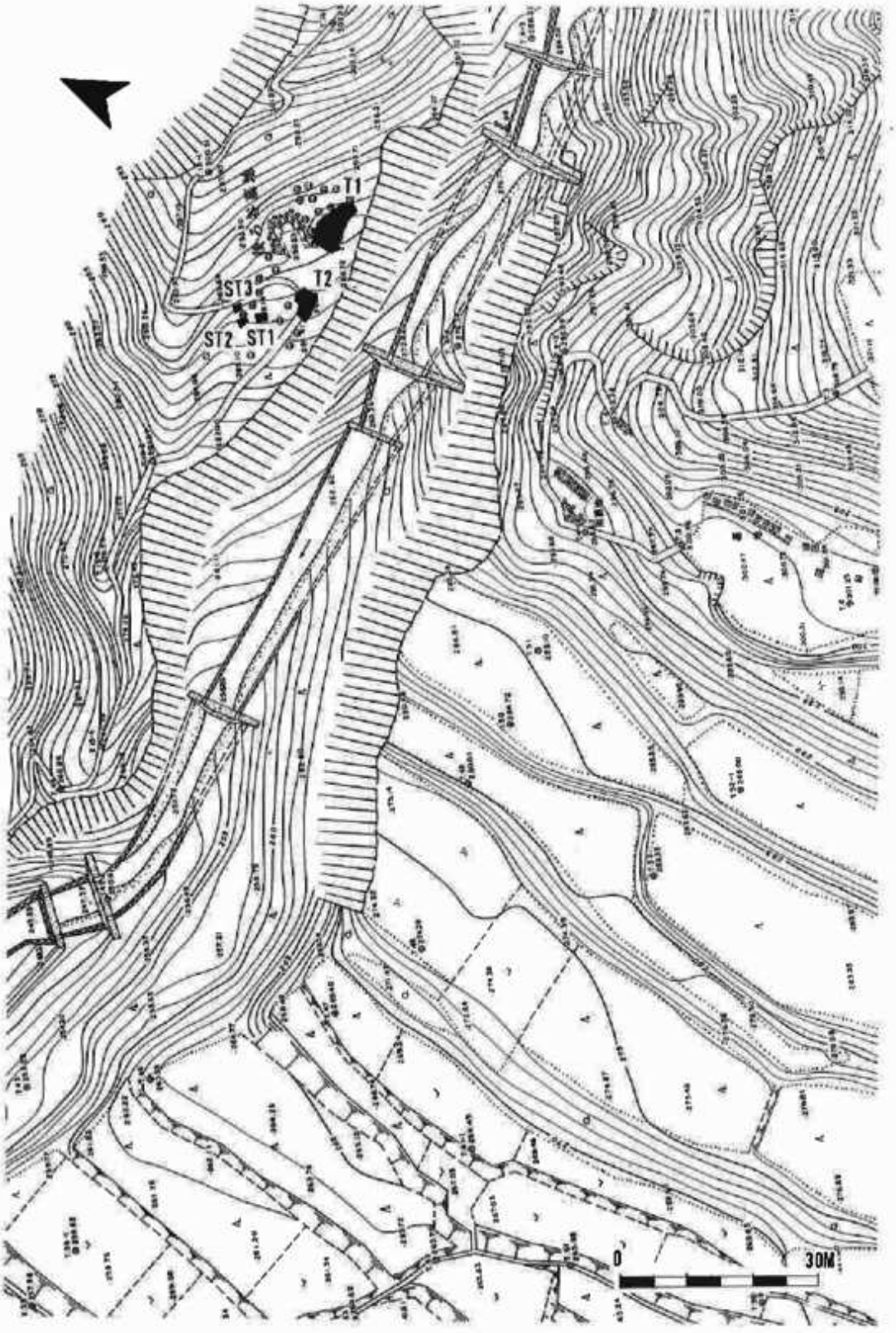
第3章　調 査 の 結 果

今回調査した古墓は、旧毘沙門堂や唯一法灯を守っている惣持寺などの中心施設がある尾根の北側の尾根上に位置している。この尾根には、この古墓と鐘楼跡、千枚畑などと呼ばれている遺構がある。両尾根間は伊勢湾台風で壊滅的な崩壊をおこし、現在では切り立った壁面になっている。調査区の設定は、この谷に沿って２ヵ所設定した。墓域全体に約40ヵ所の盗掘穴があり、組合せ式五輪塔の宝珠請花や基礎などがのぞいていた。調査はこれらを中心に広げていく方針で進めていった。調査は人力で遺構面まで掘り下げ、遺構・遺物の検出をおこない、順次図化と写真撮影を進めていった。

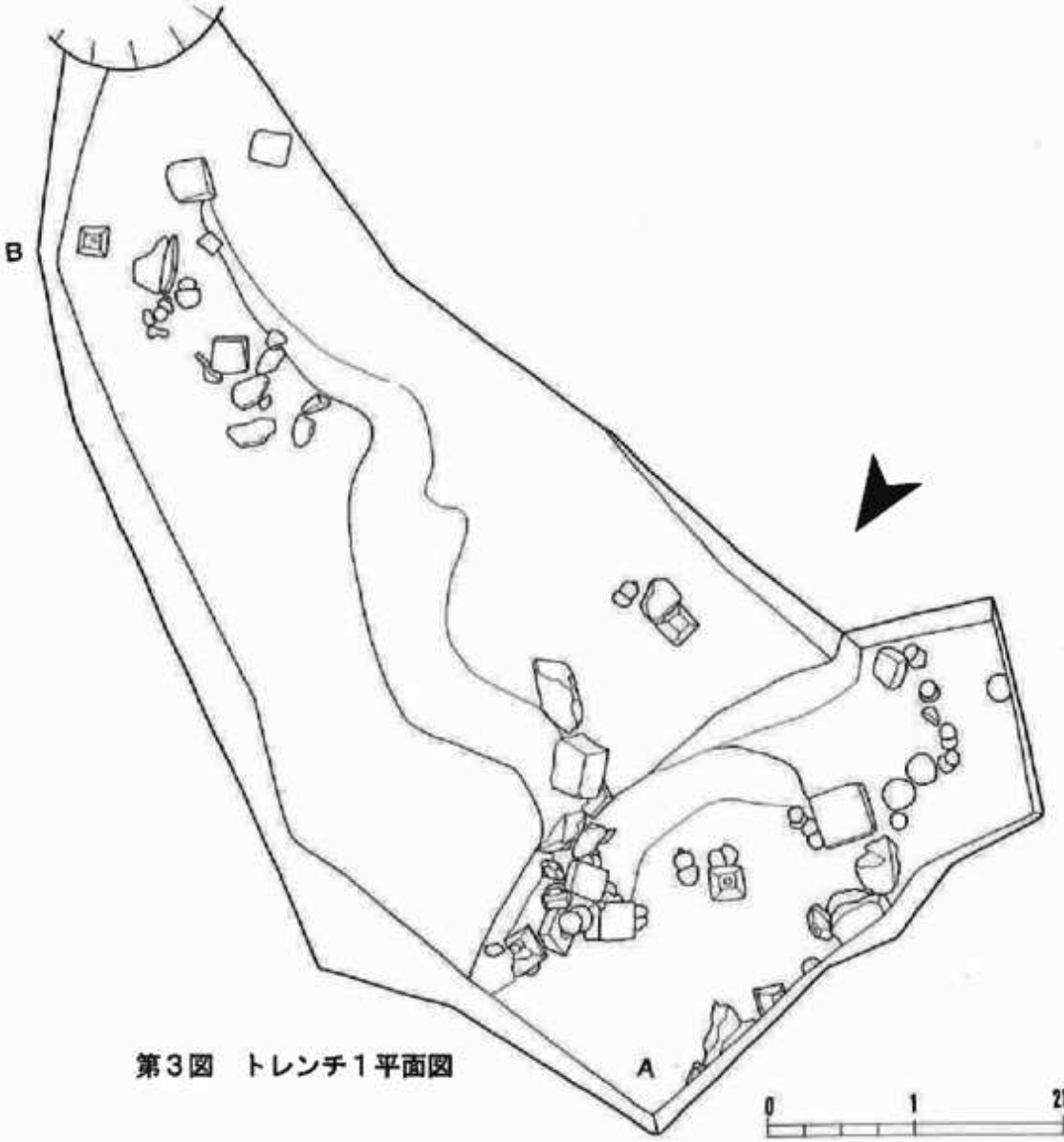
調査区１（トレンチ１）

山側に設定した東西約 7.8m×南北約 4.5mの調査区で、地形の制約で不定形をしている。厚さ約５cmの表土（腐植土）をはがすと、約15～55cmの第１層が堆積している。これは上方からの流土と、盗掘による撹乱土である。東側に位置する山手では、この層をめくると固い茶色の粘質土層が現われる。これは元の地表面と考えられ緩やかに傾斜している。ここからは組合せ式五輪塔の基礎３基と宝珠請花２点、笠２点が出土した。笠のうち１点は青味がかった石材でできており、のこりはすべて花崗岩製のものである。３基の基礎は一辺が約21～25cmのもので、高さも約10cm前後と低く、今回出土した基礎の中では小型の部類に入るものである。３基は崩落した谷に向かってほぼ同じ方角で並んでおり、高い位置にある２基は、約１m離れているものの、ほぼおなじ高さを示していて、おそらく意図的に並べられていたものであろう。のこる１基は約６cm下に位置する。３基の真下を掘ってみたが下部施設はなかった。周辺から出土した宝珠請花や笠が、おそらく組になるものと考えられるが、他の部分は何らかの原因で谷に転落したものと考えられる。注目すべき点がみられるのは西側の１基で、基礎の前面と考えられる谷側に５個の河原石が一列に並べて置かれていることである。また、周辺にも３点の石がある。小さいものは約10cm、大きいものは40cmを測り、１点を除いて、角の丸いたいらな石である。石はほとんど同じ高さにおかれていて、石の頂部の高低差は約 4cmしかない。このことはこの遺構が、ほぼ原位置を保っているといえるのではないだろうか。

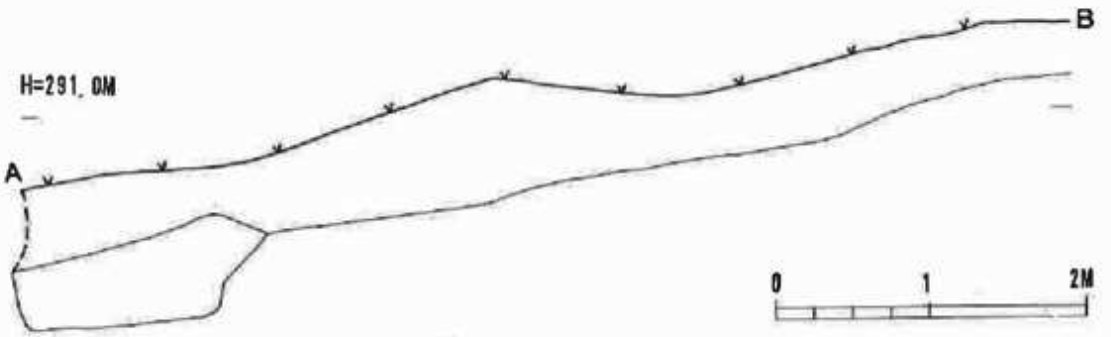
おそらく、この基礎と８点の河原石は一連のものと考えられ、ゆるやかな斜面の上に、基礎を取り囲むように方形に置かれたものと思われる。これは、五輪塔が安置された当初のやり方を知ることができる資料となる。河原石は、山麓の板名古川か姉川から運び上げ



第２図　トレンチ位置図



第３図　トレンチ１平面図



第４図　トレンチ１土層断面図

られたものであろう。今回の調査では、わずかな調査区のほとんどが撹乱をうけていたので、期待していた中世墓の構造などを明らかにすることはできなかった。わずかにこの東側山手のみが墓地遺構としてとらえることが可能な部分であつた。また、この基礎から約１ｍ下に人骨の集積が認められた。

調査区中央西側の第１層から出土した陶器片の中には、昭和56年頃の盗掘の際に放棄されていた陶器片と接合できるものがあった。このことは、第１層が盗掘で撹乱されていることを物語っている。

下方の調査区西側は、第１層の下に茶褐色砂質土の落ちこみがあり、ここから組合せ式五輪塔の宝珠請花16点、笠11点、塔身８点、基礎６点や陶器片が出土した。陶器のほとんどはこの層から破片になって出土している。これらは、おそらく盗掘よりさらに前に投棄または落ちこんだものと考えられる。

調査区２（トレンチ２）

調査区１から約 6.5ｍ下った谷際に設定したトレンチで、東西約５ｍ×２ｍの長方形をしている。土層は、礫や木炭の混在した第１層を除くと、トレンチ１の茶色粘質土が現れる。

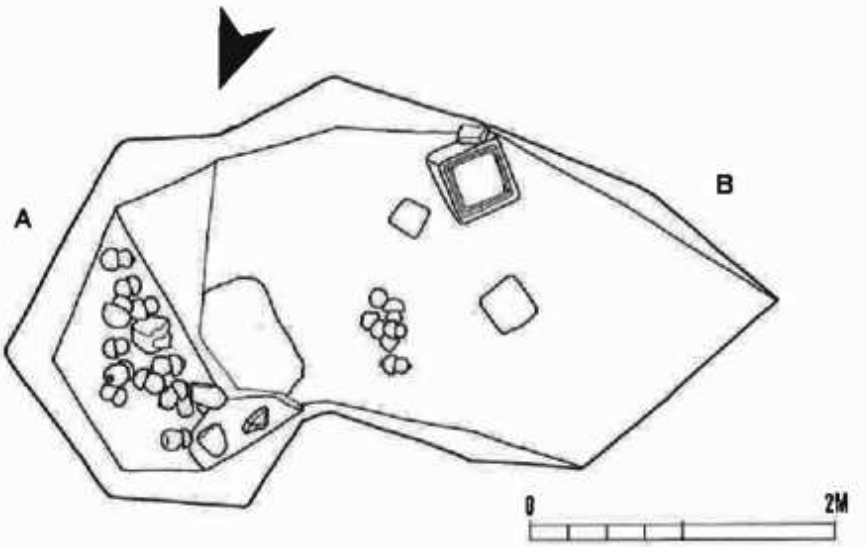
東側上方に幅 1.5ｍほどの盗掘穴が開いていて、宝珠請花が１点のぞいていた。これを広げていくと、さらに宝珠請花11点と笠１点、石仏１点と河原石がまとまって出土した。ここから西に少し掘り下げたところで、３枚の銅銭がまとまって出土した。これらは、昭和56年の盗掘の際、荒らされたものと思われる。約40cm掘り下げたところで岩盤にあたる。

調査区の中央部付近で、組合せ式五輪塔の宝珠請花３点、宝珠の欠けた請花１点、一石五輪塔１点がまとまって出土し、周辺から組合せ式五輪塔基礎２点が、谷に最も近い南端からは宝篋印塔台座１点、笠１点が出土した。撹乱層には礫や木炭が混ざっていた。ここからは、少量の土師質小皿片や陶器片が出土している。墓地の中央部に幅約４ｍ、奥行き約５ｍの炭焼き窯跡がある。出土した木炭は、おそらくこの窯の稼働時に廃棄されたものではないだろうか。この窯の稼働年代や使用者については地元で確認できず、古いものと考えられる。第１層に限らず、墓地の相当部分が窯構築時に撹乱されたものと思われる。現在は、地元の方の手で石塔や石仏がこの窯跡に整然と安置されている。

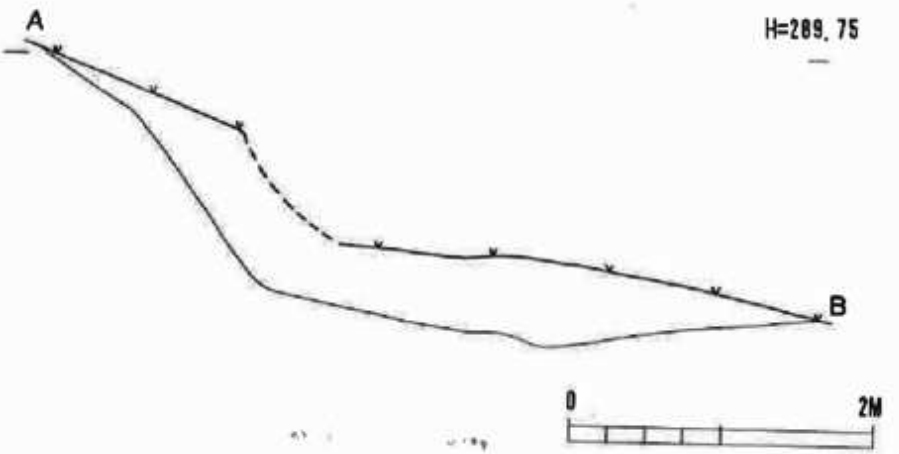
試掘トレンチ（ＳＴ１～３）

窯跡の北西に１ｍ四方の試掘トレンチを３ヵ所設定した。谷側のみの調査だったので、斜面のあり方を把握する目的で掘り下げたが、遺構・遺物とも検出できなかった。土層の

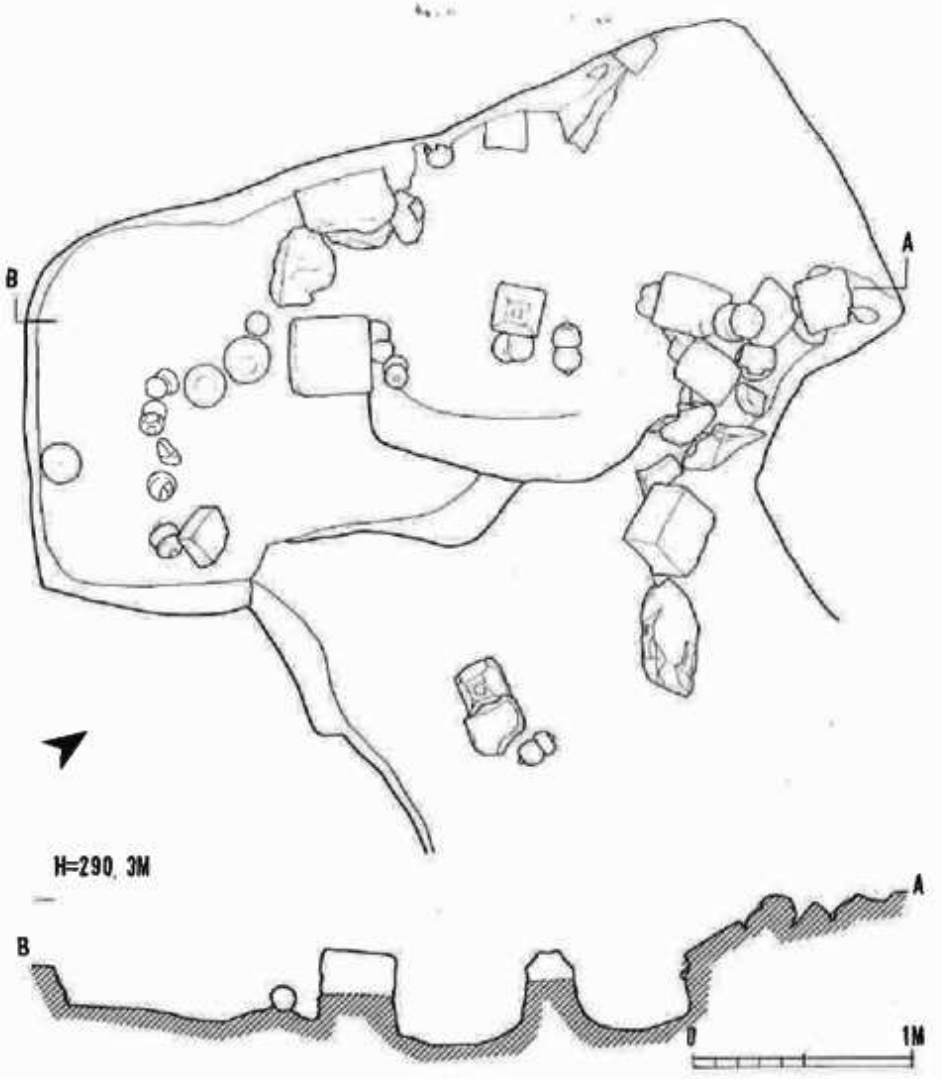
堆積は、ＳＴ１が表土・茶色粘質土、ＳＴ２・３が表土・茶色土の下に約10～20cmの細かい砂利が堆積している。



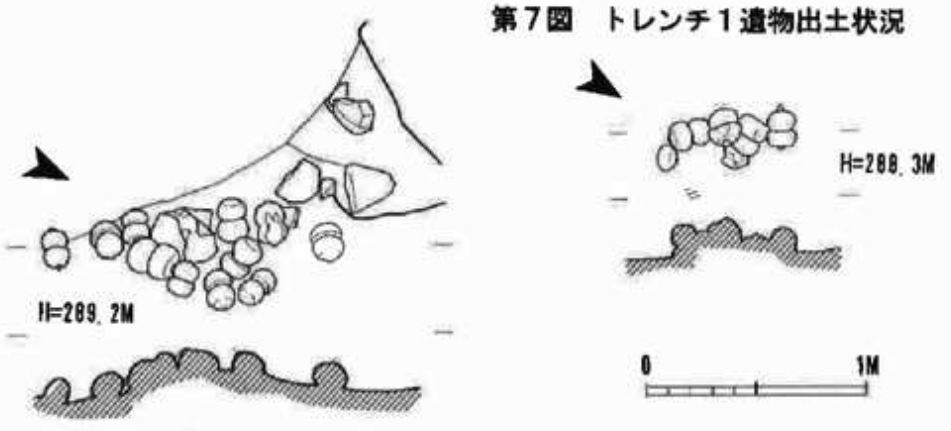
第５図　トレンチ２平面図



第６図　トレンチ２土層断面図



第７図　トレンチ１遺物出土状況



第８図　トレンチ２遺物出土状況

第4章　出　土　遺　物

土　　器

(1)　トレンチ1（第9～12図）

トレンチ1では、土師質小皿と常滑・瀬戸などの中世陶器が出土した。全て撹乱土中から出土したものなので、破片となったものが大半をしめる。陶器は12～14世紀の年代を示すが、土師質小皿については年代が遅い16世紀代のものが中心と考えられる。

土師質土器（1～5）

（1～5）は、いわゆる「かわらけ」と呼ばれる土師質小皿類である。全て手づくねで成形されているものと思われる。体部に指おさえ痕をわずかにのこすものが多い。タール痕のあるものはない。

（1）は口径が 6.6cmの小型の皿で、高さ 1.9cmを測る。小さな底部から、体部が外に開き立ち上がる。体部をヨコナデにより薄くし、口縁部は肉厚になっている。胎土は細かい土で肌色に仕上がっている。（2）は口径 8cm、高さ 2cmで、体部が内弯ぎみに立ち上がる。口縁端部は調整されていない。 1mm大の砂粒を含む。（3）は口径 8.9cm、高さ 1.9cmで、体部が外に開いて立ち上がる。口縁端部は未調整である。胎土は細かい土が使われている。（4）は外に大きく外反した体部で、口径 9.2cmを測る。底部と体部の境に明瞭な段をもつ。体部および口縁部はヨコナデによって仕上げられている。（5）は口径 9.9cm、高さ2 cmで、体部が外に開いて立ち上がる。口縁端部は丸めに仕上げている。

陶　　器　（6～21）

（6）～（9）は、常滑の小型甕である。14世紀代のものであろう。

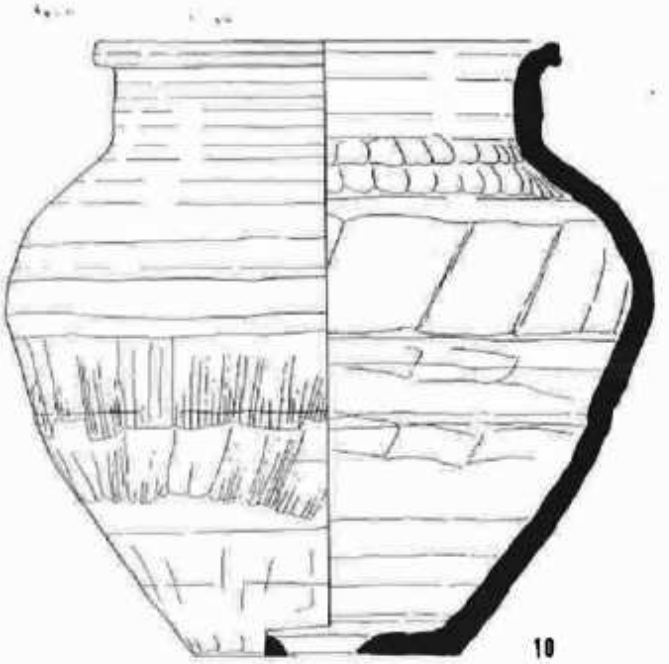
（6）は外面が茶褐色をしている。器形は肩部が張っているソロバン玉形になると思われる。胎土は小石を含んで石ハゼが多くみられる。製作手法は、胴部の肩部すぐ下がハケによるタテナデがみえるほかは、ヘラによる斜め方向のナデツケがされている。肩部はヨコナデが施されている。肩部内面は、指おさえ痕がのこる。胴部内面は、指による横ナデまたは、小幅のヘラで斜め方向にナデている。

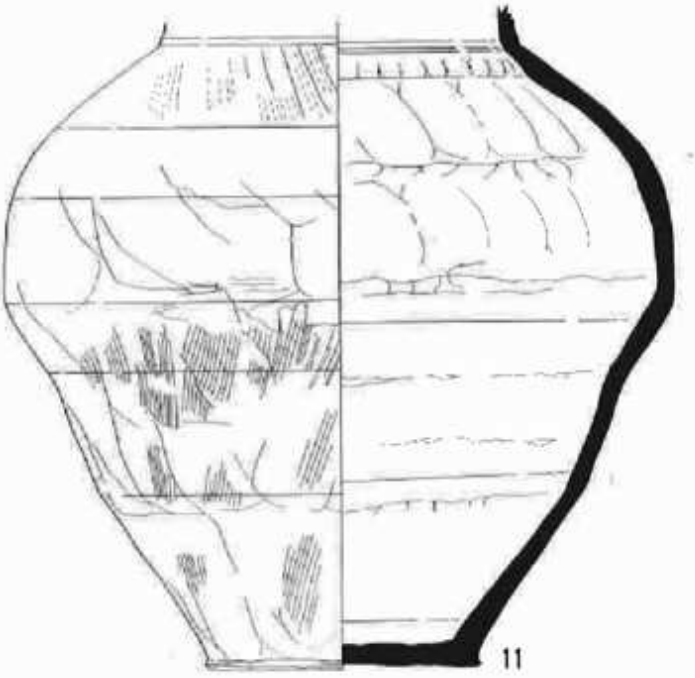
（7）は赤褐色をしている。肩部上半部に三ツ丸の押印がある。器形はやや縦長のソロバン玉形になると思われる。口縁部の縁帯はやや狭く、断面がN字状になって外に張り出している。肩部の張りはあまりきつくなく、肩部から下はヘラにより縦方向に削られる。肩部とその上部は横ナデ。肩部内面は、指おさえ痕が明瞭で、上半部の粘土がナデ下ろしたようにかぶさっている。胎土は小砂粒が混じる。口径は18cmを測る。

(8) も外面が赤褐色で、器形はソロバン玉形をしている。肩は(7) にくらべ張っている。肩部から下はヘラによる斜め方向の削りが施されているが、全体に器壁は粗い。肩部とその上部は横ナデ調整されている。口縁部断面はN字状に外に張り出している。胎土は良質のものを使っている。肩部内面には斜め方向に長い指おさえ痕が明瞭にのこり、肩部を作り出している。口径は19.4cmを測る。

(9) は底部である。外面は赤褐色、内面は灰褐色をしている。外面は縦方向のヘラナデによって調整されている。底部の端は、所々粘土がめくれ上がっている。底径は19.4cmを測る。

(10)は常滑の中型甕である。13世紀後半から14世紀初めのものと考えられる。ほぼ完全な形をしている。色調は茶褐色をしている。全体の３分の２の部分は、昭和56年頃の盗掘により出土していたが、今回、残りの口縁部から肩部までの部分を検出した。体部が丸みがあり、肩部はなで肩で、頸部は直立している。口縁部





第９図　トレンチ１出土土器

の縁帯は狭く発達していない、N字口縁になりかけの時期のものである。上へのつまみ出しはわずかであるが明瞭な段をつくりだしている。胴部はハケまたはヘラで縦方向にナデつけ、肩部との境には、横方向のヘラナデしている。また、頸部の横ナデ痕は顕著である。内面は、頸部と肩部の境は指おさえ、以下は幅広のヘラ、もしくは小幅のヘラで横方向にナデている。底部は薄く、中央に穴が開けられている。器高は31.2cm、口径は24cmを測る。

(11)は常滑の広口壺で、13世紀中頃のものであろう。口縁部を欠いている。色調は茶褐色で、肩部から上は濃い緑色の自然釉がかかる。底部が狭く、胴部が長い縦長の甕である。肩部から頸部までは球形をしている。頸部は小幅のハケで斜めにナデつけられている。肩部にハケの横ナデがされているほかは、ハケによる縦あるいは斜め方向のナデつけによって仕上げられている。内面の調整は、頸部の付け根に丁寧な指おさえがされており、肩部にかけては幅広のヘラによる縦のナデつけ、胴部は横ナデがされている。頸部が砕かれているので、骨蔵器に用いられたと考えられるが、底部に穴は開けられていない。のこっている器高は33.5cmを測る。

(12)は常滑の大平鉢で、13世紀のものであろう。器形はややいびつに仕上がっている。高台は先端部の幅がせまく低い、比較的簡素なものである。体部は、ほぼ直線的に開いている。口縁部端部に面をもち、わずかなくぼみが回る。片口が付くと考えられる。外面下半部はヘラで横方向に削ったままになっている。内面および外面の上半部は横にナデつけている。内底から体部内面中程までは、使用されたためか表面が粗くなっている。おそらく本来の用途に使われたあと、ふたに転用されたものと考えられる。(11)のような骨蔵器のふたとして使われることが多い。色調は灰褐色で、4mm大の石粒を含み石ハゼがみられる。口径は30.8cm、器高は10.5cmである。

(13)は常滑の三筋壺の肩部および胴部である。12世紀後半のものであろう。肩部と胴部に1本単位の沈線がある。肩部はやや怒り肩で、胴部は直線的に立ち上がる。外面は全体にヘラによる粗い縦方向のナデつけがおこなわれている。肩部内面は、強い指おさえ痕がみられ、以下、横ナデ、縦ナデと指おさえ、横ナデの順に調整されている。黒褐色をしており、外面肩部から胴部にかけて暗緑色の釉がながれる。

(14)は常滑の壺の口縁部で、12世紀後半のものであろう。内外面とも黒褐色をしている。口縁部は折り返して玉縁状につくる。内外面とも横ナデ調整を施す。口径は11.7cmである。

(15)～(17)は四耳壺である。

(15)は瀬戸の四耳壺肩部で、13世紀のものであろう。高さ1cm、幅1.5cmで3本の沈線が施された耳が付いている。内面は指おさえのあと横ナデ調整されている。釉がとんでおり、火をかぶった可能性がある。色調は灰褐色をしている。

(16)は肩部および頸部で、わずかに耳の痕跡がのこされている。全体に灰褐色で、外面の頸部立ち上がりの部分と、頸部内面に淡緑色の灰釉がながれている以外は、(15)同様釉がとんでいるものと思われる。器壁は厚く、器形はゆるやかな肩部から頸部が一度立ち上がり、そこからやや外反して開く。内外面とも横ナデ調整が施されている。肩部内面には指おさえ痕がのこる。時期・産地等はわからない。

(17)は瀬戸の四耳壺で、13世紀のものであろう。外面全体に淡緑色の灰釉がかかる。器形はやや寸胴気味である。肩部に４本の沈線が施されている。完全な耳が１つと、耳の痕跡が一部のこっていることから四耳壺であることがわかる。耳は高さ 1.2cm、幅 2cmで４本の沈線が施されている。頸部より上はきれいに打ち欠かれている。内面は、頸部や肩部に指おさえ痕がのこるが、全体に横ナデ調整されている。

(18)は瀬戸の壺で、13世紀初頭のものであろう。緑色の釉が全体に濃くかかる。肩部に４本とその上方に１本の沈線が施されている。内外面とも横ナデ調整されているが、内面の肩部上下には指おさえ痕がのこっている。(19)と同一固体と考えられる。

(19)は瀬戸の壺の底部である。胎土は淡黄褐色であるが、上部に若干淡い緑色の灰釉がのこる。底部は平底で直径 8.2cmを測る。内外面ともナデ調整されているが、底部外面のつくりはやや雑になっている。

(20)は高台の付いた底部で、淡緑色の灰釉が外面にかかっている。内面の底部と体部の境には明瞭なヘラの痕跡がのこっている。底径は11cmである。

(21)は、黒褐色の胎土で肉厚の器壁をもつ。濃い緑色の釉が厚くかけられ、器面には唐草文が描かれている。内面は横ナデが施されている。外来系の陶器の可能性がある。

(2)　トレンチ２（第10、12図）

トレンチ２では、３点の土師質小皿と陶器片が１点出土したのみであった。

土師質土器（22～24）

(22)は口径 8.8cm、器高 1.8cmの土師質の小皿である。体部が外に開いて立ち上がり、口縁内部に沈線を施す。全体に横ナデされており、口縁端部も整っている。細かい土で、肌色に仕上がっている。(23)は口径11.5cmの浅めの皿で、体部は外に立ち上がったあと、もう一度外に開く。全体に横ナデされており、口縁端部も整っている。細かい土で仕上がっている。(24)は口径が13.1cmで、今回出土した土師質小皿類の中では最も大きい。大きく外に開き、口縁部はやや肉厚に仕上がっている。細かい土でできており、白色をしている。内部にすすが付着している。

陶　　器（25）

甕あるいは壺の底部で、茶褐色をしている。わずかに底径が14.6cmであることがわかる。胎土は 1mm大の石粒を含んでいる。器形は大きさ・色調・焼き具合から、トレンチ１で出土しているソロバン玉形の小型甕のものと思われる。14世紀のものであろう。

(3)　表採遺物（第12図）

昭和56年前後に、町内にある伊吹山関連寺院の弥高寺跡と長尾寺跡の墓地が、集団的な盗掘による被害を受けた。(10)の体部の大部分は、この際に採集されたものである。他にも瀬戸の水注や、（ 7)とほとんど同じタイプのソロバン玉形小型甕、渥美の三筋壺などが採集されている。これらは、すでに紹介されている[4]。ここでは、それ以外の図示可能な遺物について報告したい。

陶　　器（26～29）

(26)は常滑の小型甕と思われる胴部で、14世紀のものであろう。色調は茶褐色を呈している。肩部は、ハケによる縦方向のナデつけがされており、胴部はハケナデのあと、ヘラによって斜め方向に粗くナデられている。肩部内面は指おさえ痕がのこり、胴部は小幅のヘラで横方向になでている。胎土は 2mmほどの石粒を含む。

(27)は瀬戸灰釉壺の体部で、肩部に４本の沈線がめぐる。全体に淡緑色の釉がかかり、さらに、肩部から幾条かながれ二重掛けのようになっている。内面は横ナデによって仕上げられている。

(28)は瀬戸の四耳壺で、13世紀のものと考えられる。外面は淡茶色を呈し、上から淡緑色の釉がかかる。幅約 1.7cmの耳が２ヵ所のこっているが、接合部だけなので耳の形態はわからない。両耳の間に粘土ひもの接合部があるほか、胴部には横方向のヘラナデによってできた数条のケズリ痕があり、これが右から左にはいっていることから、反時計回りで製作されたことがわかる。内面肩部は指おさえのあと、横ナデされている。胴部内面は横ナデ調整されているが、一部指おさえ痕ものこる。

(29)は青緑色の釉が施された磁器で、茶褐色の胎土からなる。底部内側は、小幅のヘラによる回転痕が明瞭にのこり、高台外側は幅 5mmのヘラで斜めに規則正しく削られている。

金 属 製 品（第12図）

釘（ 1・ 2）

(1)はT字形の釘で、断面は正方形をしている。全長 7.2cm、幅は 0.5cmを測る。全体に腐食がはげしく、先端部は完結しているのか折れているのかはわからない。頭部は長さ

1.7cm、幅 0.4cm、厚さ 0.5cmを測る。(2)は、(1)より細いT字形の釘で、やはり断面は正方形である。2ヵ所で90度に折れているが、復元すると全長 6cmになる。幅は 0.2cmを測る。頭部は長さ 1cm、幅 0.3cm、厚さ 0.2cmを測る。トレンチ2から出土した。

銅銭（3～5）

トレンチ2の撹乱土中より、3枚まとまって出土した。(3)～(5)はいずれも北宋銭で、「天聖元宝」・「熙寧元宝」・「元豊通宝」である。「天聖元宝」と「熙寧元宝」は貼り付いた状態で出土した。直径はそれぞれ2.4cm・2.3cm・2.4cmである。

石製品（第13～15図）

出土した石製品は、組合せ式五輪塔の部品である宝珠請花、笠、塔身、基礎や一石五輪塔、宝篋印塔台座、石仏である。組合せ式五輪塔の各部は、トレンチ1・2から多量に出土している。一石五輪塔、宝篋印塔台座、石仏は各1点ずつで、いずれもトレンチ2からの出土である。ここでは代表的なものを一括してとりあげる。（中表紙の絵参照）

宝珠請花（1～16）

ほとんどが花崗岩で風化がひどく、おそらく曲谷産のものと考えられる。高さは20cm前後、23cm前後、25～28cmと3種類くらいに分けられる。また宝珠部の形態から、球形のもの、上部が四角く、下部が球形のもの、四角いものの3タイプに分けられる。宝珠部と請花部の幅は、後者の方がやや広いものが多い。

(1)～(6)が球形のタイプにあたる。頂部に円錐形の突起をもつと思われるが、ほとんどが欠けている。(7)～(13)は上面が四角いタイプにあたる。(9)は出土品の中で最も残りが良好なものである。宝珠上部は平らで大きな突起をもつ。石質は他のものに比べ細かい。(12)は出土品の中で最も大きく、欠けている突起を復元すると28cmくらいになるだろう。(14)(15)は共に四角い宝珠をもつ。(16)は青味がかった軟質の石でつくられている。宝珠と請花の間に明瞭な段をもつ。表面は叩いてつくられている。頂部の突起は小さく、下の挿入部と共に縦のノミ跡をのこしている。

笠（17～24）

組合せ式五輪塔の笠部で、一辺が小さいものは19.5cm、大きいものは25cmの平面方形をしている。高さは10～15.5cmである。(17)～(22)は花崗岩製のもので風化がはげしい。そのなかで(18)は良好にのこっており、四隅は鋭角に尖る。他のものも同様の形態をしていたと考えられる。(22)は一辺25cm、高さ15.5cmと最も大きいものであるが、風化がはげしい。(23)(24)は、(16)の宝珠と同じ青味がかった軟質の石でつくられている。(24)は一辺が16.5cmと小さいが、高さは15.5cmと背の高い形態をもつ。宝珠を挿入する穴に明瞭な

縦ノミ跡がのこる。トレンチ１から出土した。

塔身（25・26）

組合せ式五輪塔の塔身で、すべて花崗岩製である。(25)は直径21.5cm、高さは15.5cm。(26)は直径22.5cm、高さは17cmを測る。共に上下端を水平に切った球形をしているが、(25)はふくらみが中央にあり、(26)はふくらみが中央よりやや上にある。両方のタイプが出土している。掲載した２点はトレンチ１からの出土である。

基礎（27～30）

組合せ式五輪塔の基礎で、すべて花崗岩製である。(27)は小さいタイプで、一辺21cm、高さ 9.5cmを測る。トレンチ１の東側上方で出土したものと同じものである。(30)は最も大きいタイプで一辺31cm、高さ18.5cmを測る。(27)(30)はトレンチ２、(28)(29)はトレンチ１からの出土である。

一石五輪塔（31）

出土した唯一の一石五輪塔で、もろい砂岩系の石でつくられている。宝珠の部分が欠けている。のこっている部分の高さは約27cmで、基礎のところで一辺12.3cmを測る。

宝篋印塔

出土した唯一の宝篋印塔で、高さ約35cm、一辺45cmの平面方形をしている。花崗岩製で、四面に格狭間をもっている。同様の基礎が、石材加工をおこっていた町内曲谷の白山神社に３基あり、鎌倉後期から南北朝期のものと考えられる。

石仏（32）

背の丸い舟形をしている。表面の上半分に弥陀定印坐像一体を半肉彫りしている。坐像は高さ約19cmを測る。顔は鼻や口の輪郭がわずかにわかる程度で、体部も輪郭と袈裟と手がわかる。総高40.5cm、幅は下部で21.5cm、顔のあたりで19cm、厚さは下部で13.5cmを測る。像の肉厚は顔の部分で約 2cmである。

第５章　ま　　と　　め

今回の調査では、わずかな調査区のほとんどが撹乱をうけていたので、期待していた中世墓の構造などを明らかにすることはできなかった。わずかにトレンチ1で、五輪塔の安置方法を示しているのではないかと考えられる遺構を検出しただけであったので、本章では、出土した遺物から長尾寺古墓の年代や、性格について、若干考えたいと思う。

陶器類は、そのほとんどが骨蔵器として埋納されていたと考えられる。12世紀後半に属すものが最も古く、13世紀初頭から14世紀代までのものが出土している。大半は常滑産の

もので、瀬戸産のものも多い。これらは、決して日常雑器でないものが使用されている。これらは二次的に骨蔵器として利用されたために、上のような生産地の年代を、そのまま墓地の築造年代とすることはできないので、とりあえず出土品の中心となる年代を13世紀初頭から14世紀前半としたい。13世紀代には瀬戸の四耳壺があり、また常滑の中型壺と大平鉢といった、骨蔵器とふたの関係になる事例の多い遺物も出土している。14世紀はソロバン玉形の常滑産小型甕がほとんどを占める。出土した石製品のうち宝篋印塔台座がこの時期に属すと考えられる。

陶器類が示すこの年代が長尾寺古墓における１つの画期であるといえる。この時期に該当する長尾寺の歴史事項を１つあげると、14世紀中ごろの文和年間（1352～56）に、僧深宥が荒廃していた堂塔に修繕を加え、寺の壮観を復旧したことがある[5]。このため、深宥は地元で中興の祖とよばれている。しかし、出土品からみる限り、13世紀全般および14世紀まで継続してあり、伝えられる長尾寺の荒廃が壊滅的なものでなかったことは確かである。

出土遺物からみたもう１つの画期は、土師質小皿が所属する16世紀の時期である。同時に出土した石仏などがこの年代に属すものと考えられる。この土師質小皿は、御供えや灯明皿のような用途であったと考えられる。また、調査では長期間の土器が出土したため、土師質土器の中には年代の異なっているものが含まれている可能性がある。

トレンチ２の撹乱層中で検出された銅銭は、３枚とも北宋銭である。それぞれ初めて造られた年代は、「天聖元宝」が1023年、「熙寧元宝」が1068年、「元豊通宝」が1078年である。これらの示す年代は、出土した土器の年代と 100年以上のへだたりがある。銅銭は、日宋貿易以降に輸入・流通したもので、伝世品でもあり、墓地の年代決定の資料にはならないだろう。銅銭の長尾寺古墓での用途としては、副葬品としての「六道銭」を意識したものと考えられる。近江八幡市蛇塚遺跡[6]や京都市平安京左京三条三坊十一町の調査[7]で、六道銭をともなった墳墓が出土している．蛇塚遺跡では唐銭 1・北宋銭 2・明銭 1の組合せであり、平安京も20組 111枚のほとんどが北宋銭で、唐銭と明銭がわずかにはいっていた。ともに１点ずつはいっている永楽通宝（明銭1408年）から、墓地の年代の上限を15世紀初頭においている。長尾寺古墓出土銭の年代を考えるうえで参考になるのではないだろうか。

釘については、形態の異なった２点が出土している。釘の出土は、当墓地における火葬墓の外容器が、陶器ばかりとは限らず、遺物としてはのこらないが木製の容器もあったことを示すのではないだろうか。釘は、どちらもＴ字形をしたものであるが、大小の差があり、木製容器の構造に違いがあったことがわかる。

以上、出土遺物の検討をおこなつた。その結果、当墓地が、中世墓の始まりとされている12世紀後半から築造された可能性があり、16世紀以降まで長期間利用されていることが

わかった。15世紀の遺物は確認していないが、これはそれ以前の陶器の骨蔵器をつかった埋葬方法から違う埋葬方法に替わったことを示すのではないだろうか。また今回、廃棄された状況で石塔類が出土したが、長期間の墓地利用で古いものが整理されることもあったのではないだろうか。

さて、それでは長尾寺古墓には誰が葬られていたのだろうか。当墓地内に安置されている石造品を数えると組合せ式五輪塔の宝珠請花80点・笠66点・塔身57点・基礎49点と、一石五輪塔4点、五輪板碑10点、石仏60点であった。先に第1の画期とした骨蔵器を利用した埋葬や、宝篋印塔や五輪塔の建立は、おそらく長尾寺の寺僧や周辺地域の地侍層のものと考えられる。しかし、墓地内で数多くみられる石仏は、これら特定集団の墓地であったものが、上層農民など一般へ開放された結果、建立されたと推測できないだろうか。

次に墓地の立地についてふれてみたい。現在では、狭い範囲の尾根上にあるが、これは伊勢湾台風などの自然災害で崩壊した結果であって、往時は「ホンドウ」などが立地する南側の尾根と浅い谷でつながっていたという。この南側の尾根にも当墓地と向いあう形で墓地があることから、この谷全域に墓地が展開していたと考えられる。ここは、長尾寺跡全体でも展望の開けた所で、北と西をみわたすことができる。おそらく景観を重視した「勝地」として選ばれたものであろう。

長尾寺同様、伊吹山寺の関連寺院であった弥高寺跡においても、昭和60年に墓地の試掘調査がおこなわれている。出土した陶器類の大半はやはり常滑が占めるが、13世紀後半から15世紀末か16世紀初めごろまでの遺物しか出土していない。今回の調査では、さらに約100年さかのぼった12世紀後半（平安時代末期～鎌倉時代初期）の遺物が出土した。仁寿年間（851～854）の僧三修による伊吹山寺創建年代により近い考古資料が得られたことは、今後の伊吹山寺研究にとって大きな成果である。今後さらに継続的な調査をおこなうことによって、長尾寺をはじめ伊吹山寺の全貌が次第に明らかになるだろう。

〈註〉

1 用田政晴　1989　『弥高寺跡調査概報』伊吹町教育委員会

2 拙稿　1992　『長尾寺遺跡測量調査報告書』伊吹町教育委員会

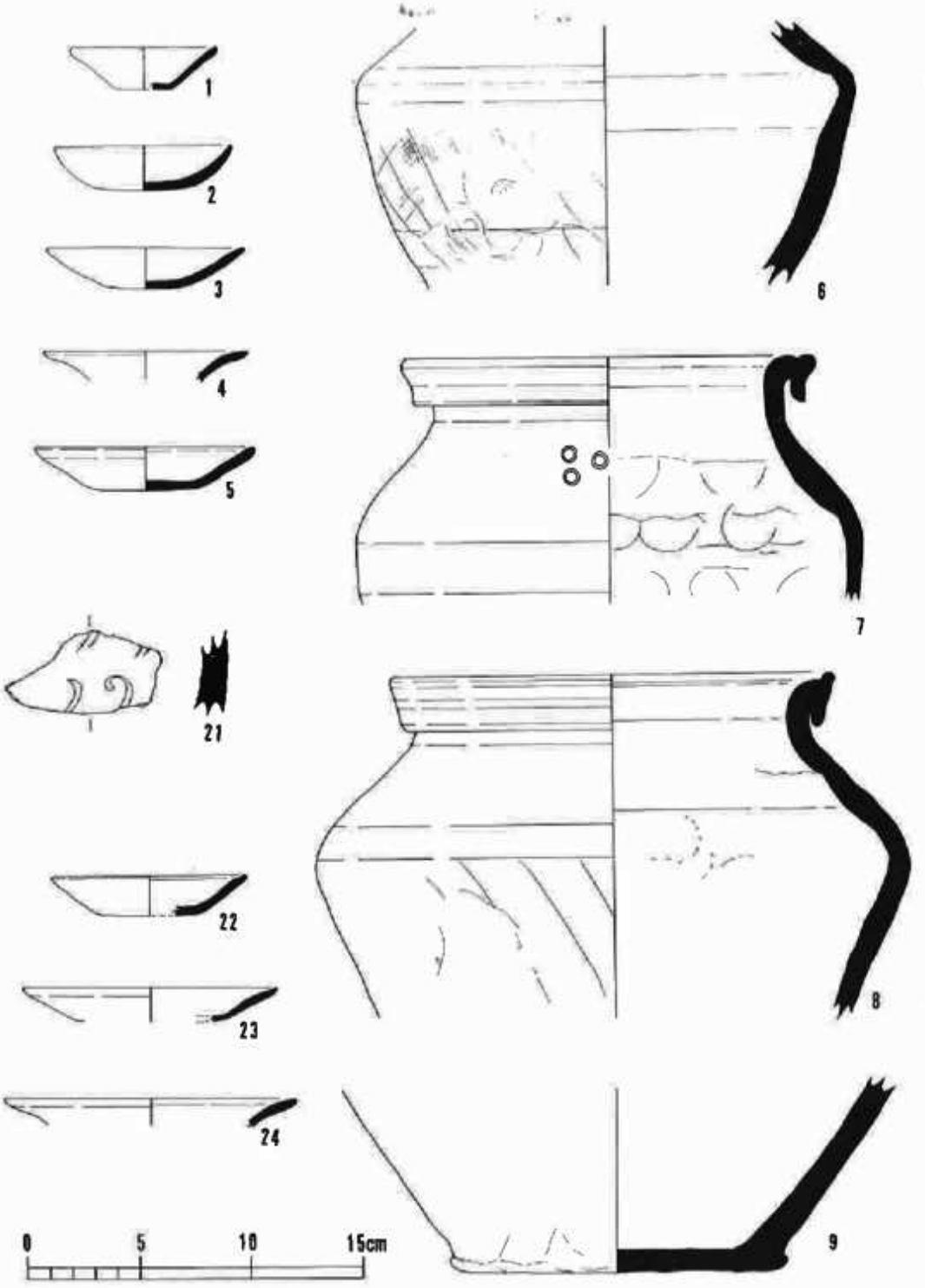
3 拙稿　1993　『伊吹町内遺跡調査概報Ⅰ』伊吹町教育委員会

4 近江風土記の丘資料館　1986　『近江出土の中世陶磁－実測図集成Ⅰ』

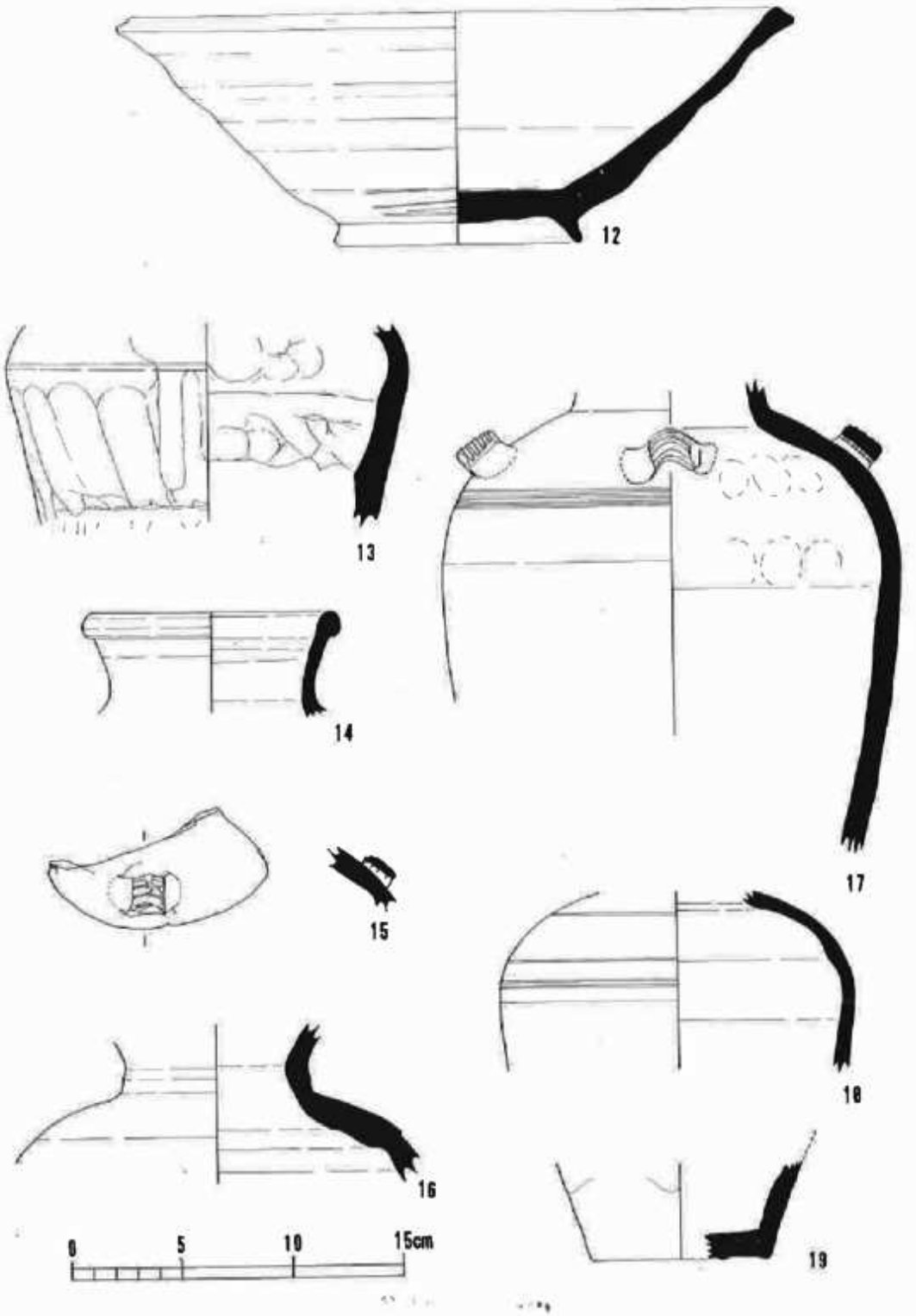
5 江戸時代に成立したと考えられる「長尾寺縁起書」（伊吹町指定文化財）の記載による

6 宮崎幹也　1985　『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　Ⅻ－2』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

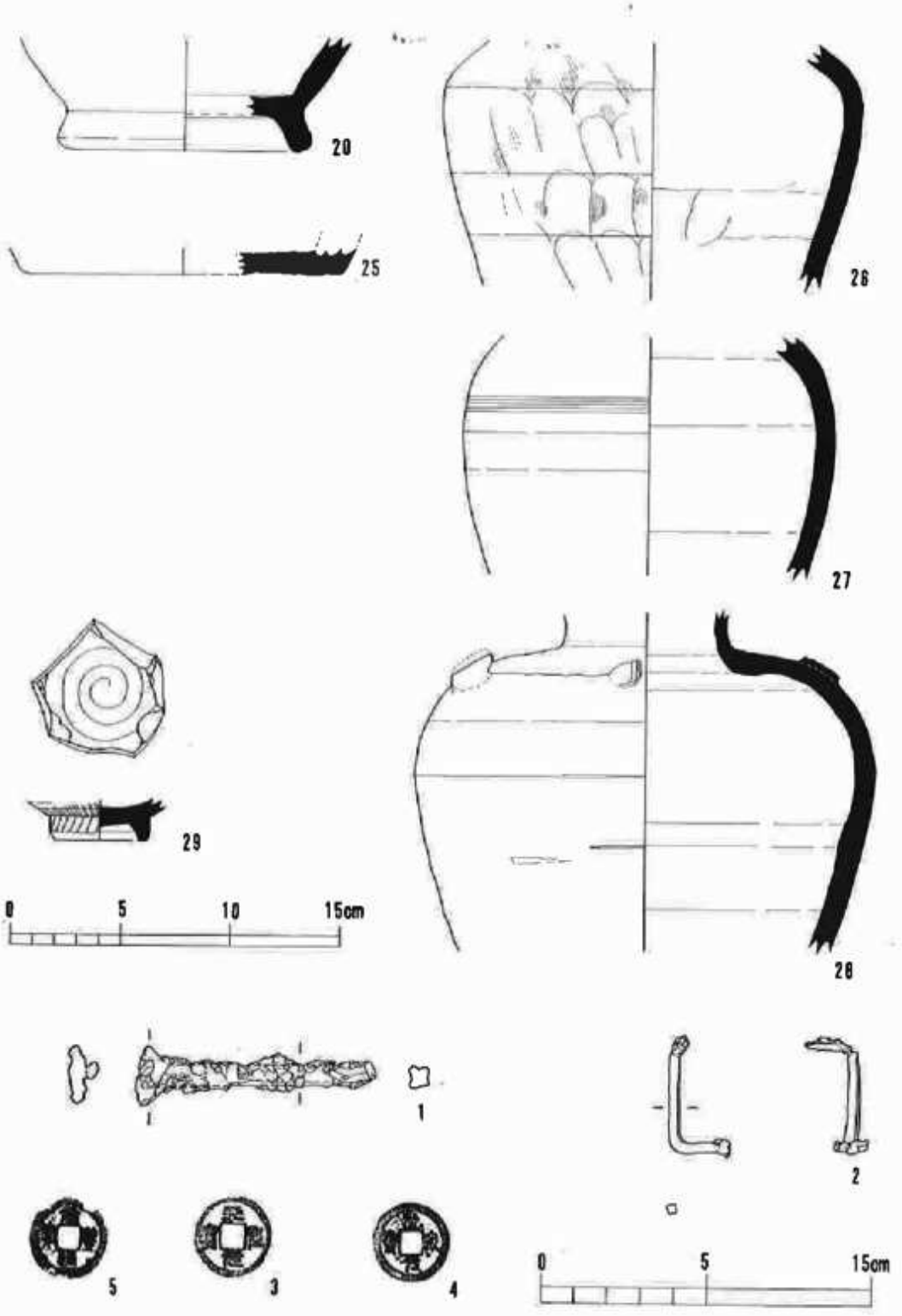
7 寺島孝一編　1984　『平安京左京三条三坊十一町』（平安京跡研究調査報告14）(財)古代学協會



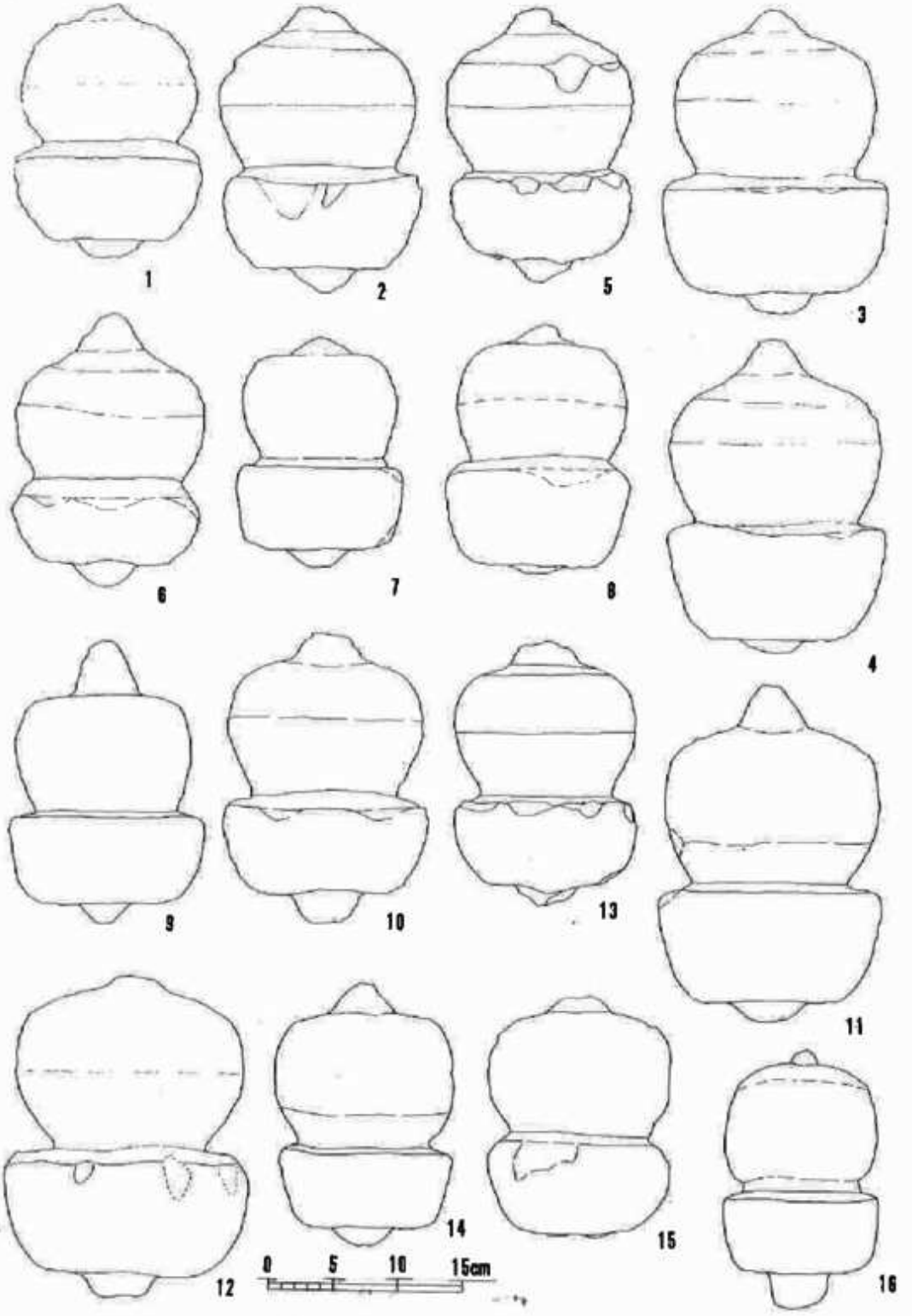
第10図　トレンチ1・2出土土器(1～9・21　トレンチ1、22～24　トレンチ2)



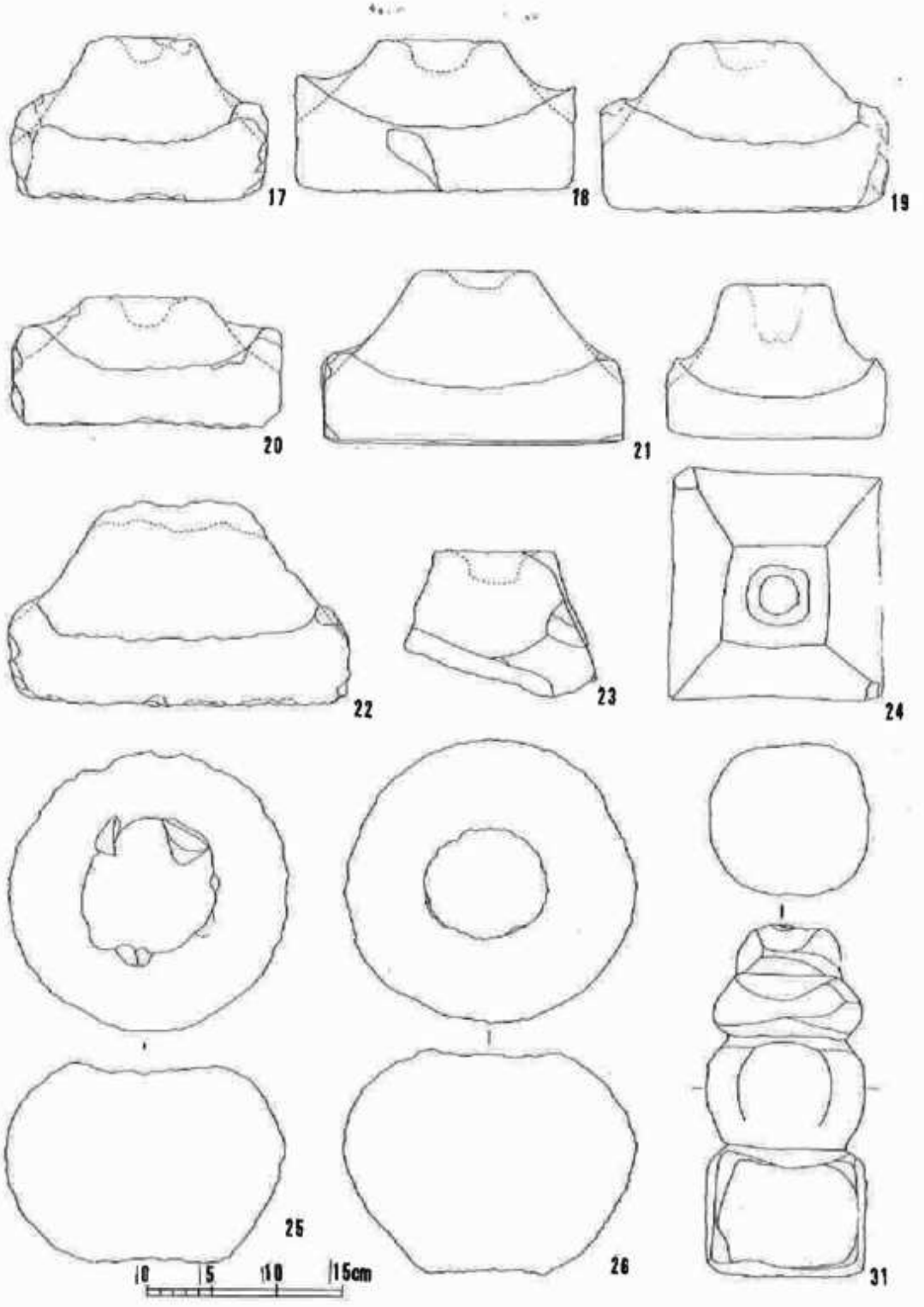
第11図　トレンチ１出土土器



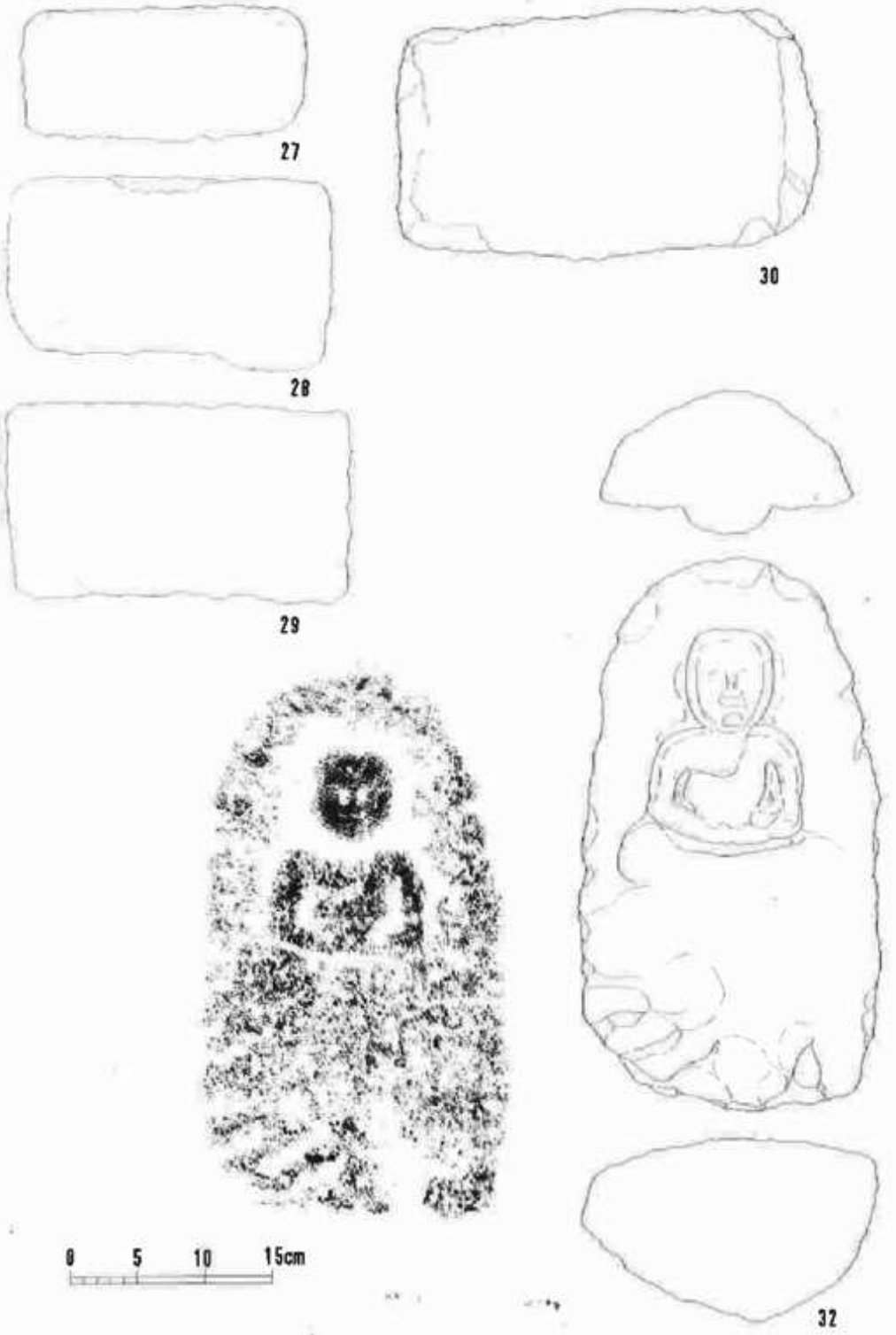
第12図　トレンチ１・２出土土器、表採土器、トレンチ２出土金属製品



第13図　出土石製品（宝珠請花）



第14図　出土石製品（笠・塔身・一石五輪塔）

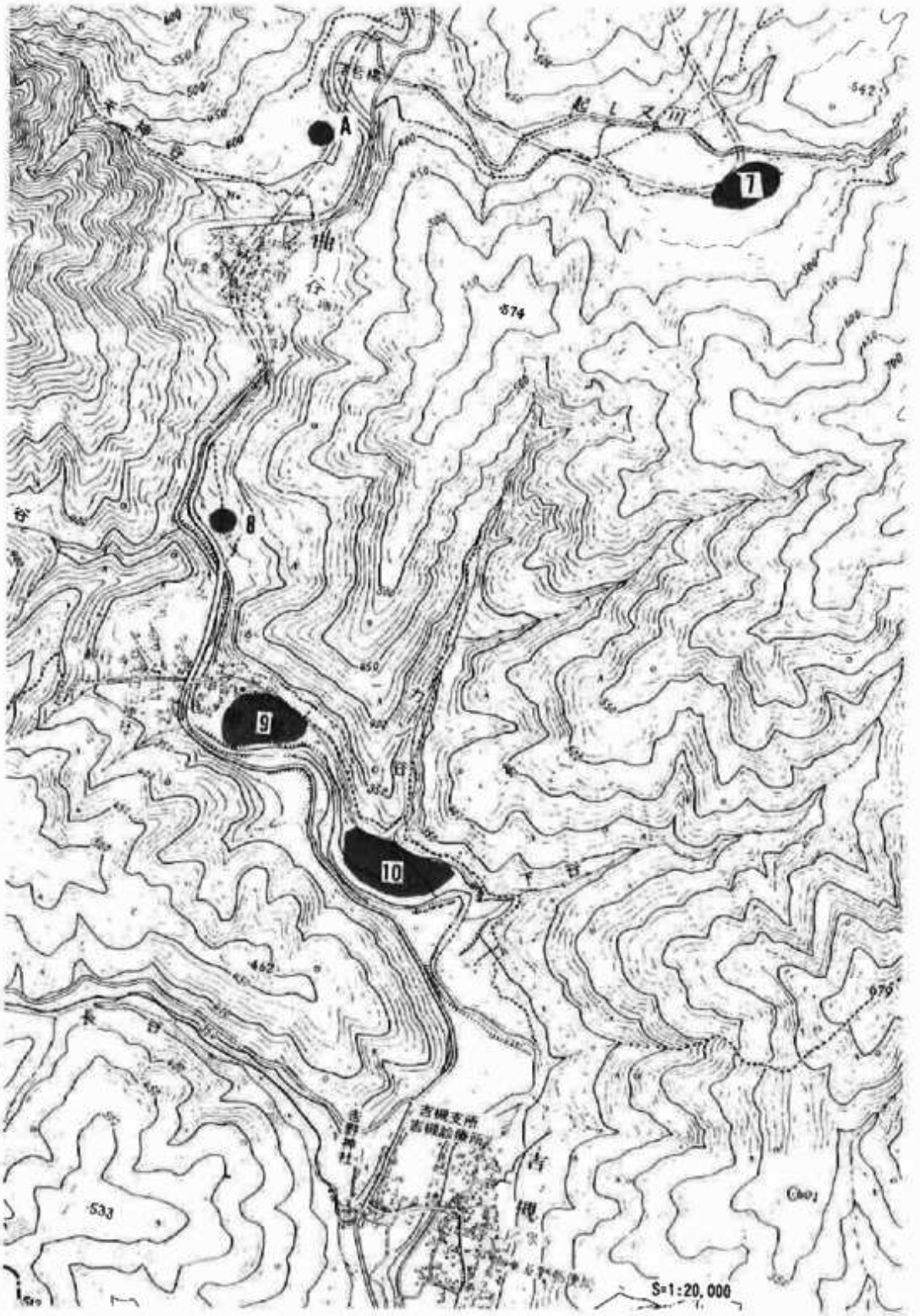


第15図　出土石製品（基礎・石仏）

ムカイラ遺跡

ー伊吹町曲谷（まがたに）ー

姉川沿いの段丘上にあるムカイラ地区で、ほ場整備事業にともなう試掘調査をおこないました。ごくわずかの縄文土器細片が出土しました。本調査にはいたりませんでしたが、姉川上流域に縄文遺跡が分布していることがわかりました。



第16図　ムカイラ遺跡位置図

Aムカイラ遺跡　7.起し又遺跡 8.大平遺跡 9.大カイト遺跡 10.カン谷遺跡

第1章　調 査 の 経 過

ムカイラ遺跡は、伊吹町大字曲谷字ムカイラにある。

平成３年度に、当地が所属する東草野学区で遺跡分布調査をおこなった。これは主に、収穫後に荒おこしされた水田で、土器などの地表面採集をおこなうという調査で、この際、ムカイラ地区で土器の細片を採集した。土器片は素焼きのもので、摩耗しているために時代決定はできなかったが、文化財保護法（昭和25年法律第 214号）第57条の 6第 1項の規定に基づいて、文化庁に「遺跡発見通知」を提出した。

平成４年度におこなった試掘調査では、土器の細片がわずか２点あったのみで、遺構などは検出できなかった。その後、今年度初めに工事中の壁面で縄文土器片を採集した。この結果、ようやく当遺跡が縄文時代に属すものであることがわかった。

今般、団体営土地改良総合整備事業が、ムカイラ地区で計画され、事前に確認調査（試掘）の必要が生じた。　調査は、平成５年10月12日から14日にかけて実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

伊吹町および曲谷地区の自然環境ならびに歴史的環境については、本書に収録した「石臼生産遺跡」の中でかなり詳細に書いたので、ここではムカイラ遺跡の位置と環境について、ごく簡単に述べたい。

遺跡は姉川右岸の河岸段丘上に立地している。この段丘は、南北約 140m×東西約80mで、周辺では比較的広いものである。支流起し又川が本流姉川に合流する位置にあり、標高は 350m前後である。遺跡の現状は、水田および畑地である。

ここから東へ約 750mほど谷合に入ったところに起し又遺跡がある。同じように河岸段丘に立地する遺跡で、平成４年度に実施した発掘調査では、町内で最も古い時期である縄文時代早期の土器や、中期初頭から後期中頃までの土器が出土している。

第３章　調 査 の 概 要

確認調査は、遺跡の範囲がはっきりしていないために、段丘上のほぼ全域を対象におこなった。範囲の確認と遺跡の内容の把握を目的に、40ヵ所の試掘トレンチ（約３m×３m）を設定した。深さは、およそ１mから２m掘り下げて、遺構と遺物の有無を確認した。

調査の結果、姉川に近いところに設定したトレンチ 1～ 5・ 8・ 9・13・14・37・38では、約20～30cmの耕土をめくると、黒色系の粘質土（黒墨土）が、深いところでは1m前後の深さで堆積していた。このうち、トレンチ 9およびトレンチ13で、縄文土器の細片を数点検出した。そこで、トレンチ 9に接して、トレンチ40を設けたが、細片1点が出土したのみで、黒色系の粘質土の下は茶色系の砂質土および砂となり、遺構は検出できなかった。また、同じく川に近いトレンチ10～13では、耕土の下に人頭大から人体大の大きさの礫を含む茶色系砂礫土層があった。

次に、山側に設けたトレンチ15～29のほとんどでは、約10～30の耕土の下に、黒あるいは茶色系の砂利土が堆積していた。その下も砂利土か砂礫土が重なっており、山の崩壊土層と考えられる。このうちトレンチ27・28では、茶色系砂利土の下に黒色系の粘質土（黒墨土）が約15～30cm堆積していた。トレンチ32でも縄文土器の細片を1点検出した。

以上、全体に山側では崩壊土が堆積しており、段丘の中間付近から川に近づくにしたがって、黒色系の粘質土（黒墨土）が厚みを増しながら堆積しているのがわかった。この土層内にわずかに縄文土器片が混じっているが、この土器片にともなう遺構は検出できなかった。

第4章　ま　　と　　め

今回の調査で、ムカイラ地区にも縄文遺跡が存在するということはわかった。しかし、山間部の調査を意識して、出来るだけ深く掘ったが、これらの土器が元々あったと思われる生活の跡は検出できなかった。したがって今回は、出土した土器がわずかで、細片であることと、出土した深さから、おそらく工事が遺跡に支障のないものと判断して、発掘調査にまではいたらなかった。

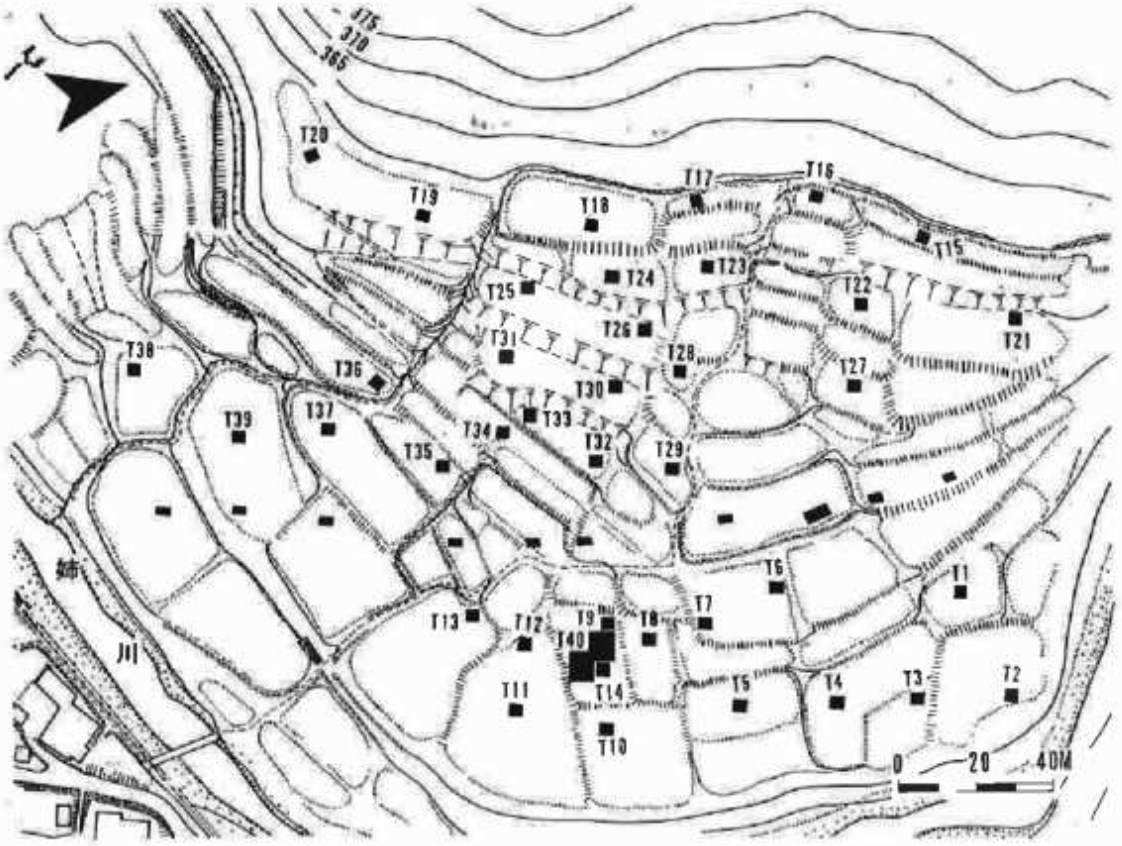
しかし、今回の調査や起し又遺跡で縄文時代の早期および中期・後期の土器を検出していることなどから、姉川上流部にある段丘上に縄文遺跡が所在している可能性は高いと考えられる。今後も、姉川流域で多くの開発行為が計画されているが、慎重に対処していきたいと思う。

〈参考文献〉

1992『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町教育委員会

1993『起し又遺跡発掘調査報告書』伊吹町教育委員会

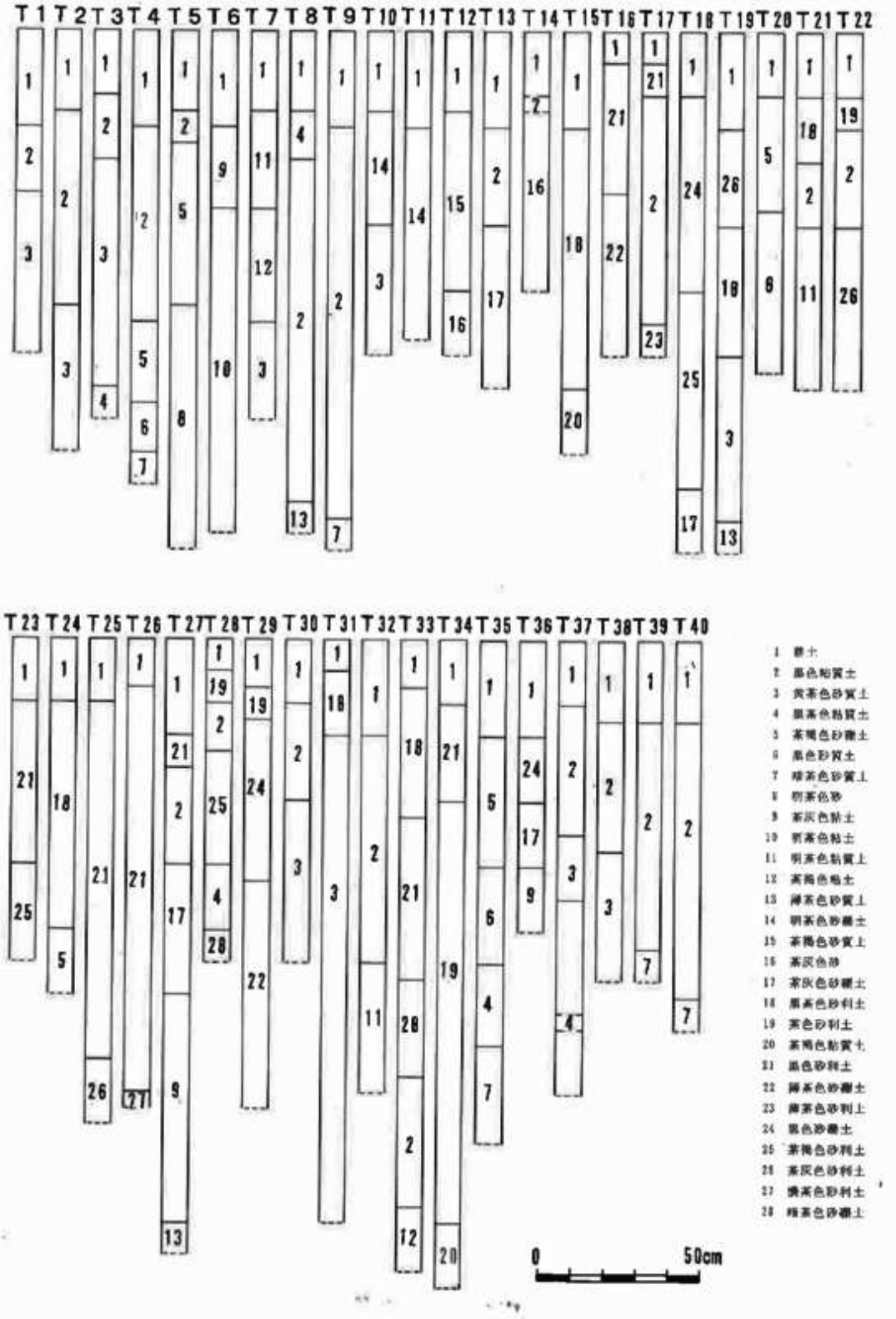
1993『伊吹町内遺跡調査概報Ⅰ』伊吹町教育委員会



第17図　試掘トレンチ配置図

(No.のないものは平成４年度実施個所)

写真１　出土縄文土器(上段左と中は表採)

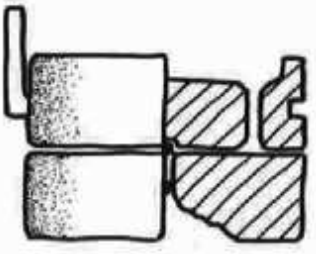


第18図　試掘トレンチ土層柱状図

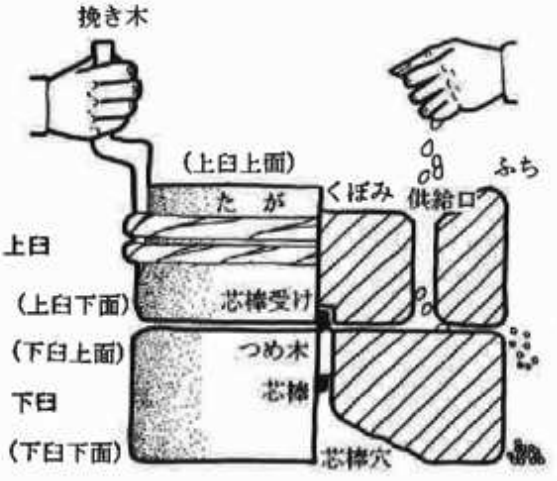
石臼生産遺跡

―伊吹町曲谷―

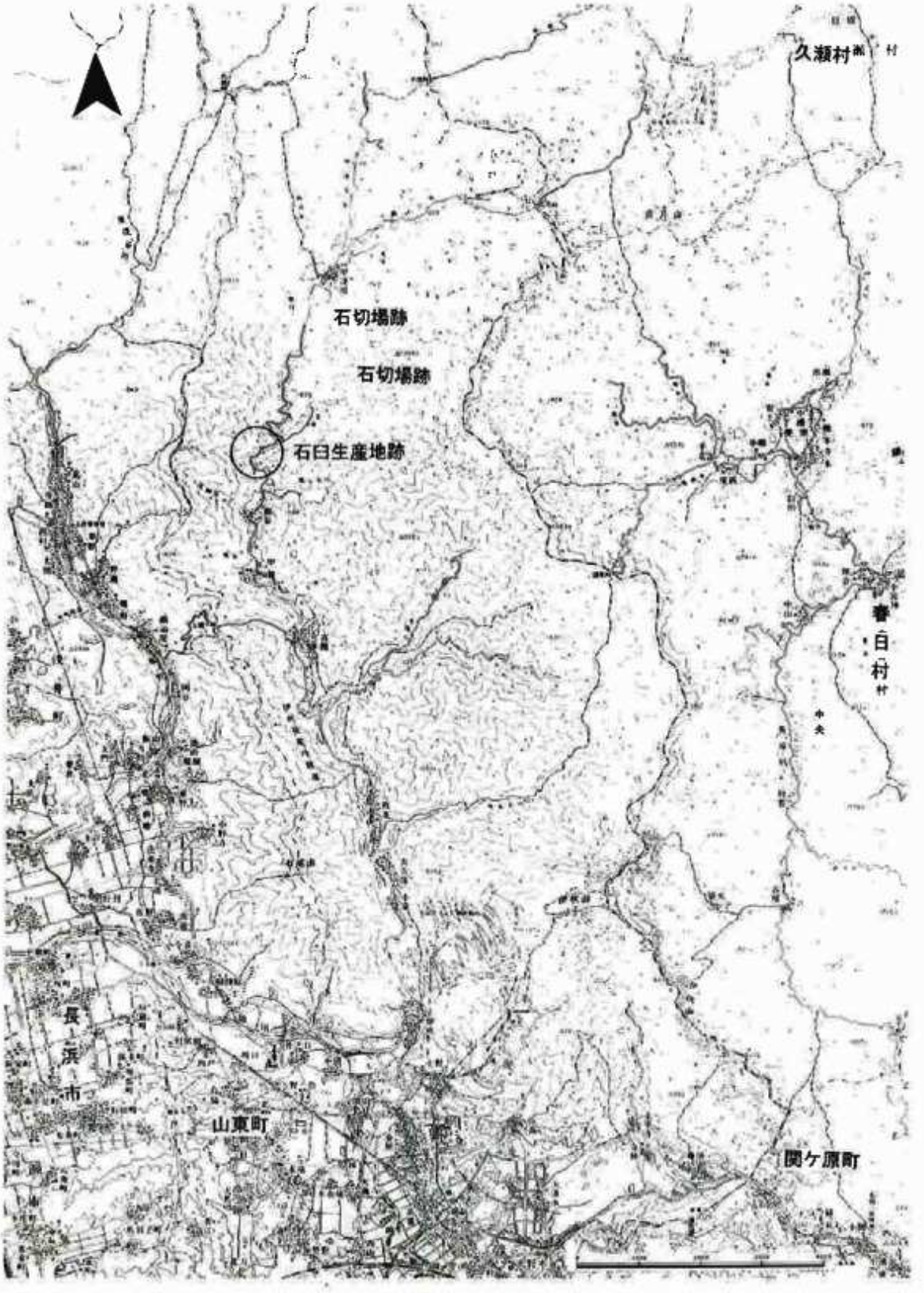
鎌倉末期頃から石材加工をおこなっていた、姉川上流の曲谷において、多量の石臼未製品が出土しました。これらは近世から近代初頭にかけてのものですが、曲谷臼の製作工程がわかる貴重な資料です。併せて、石工道具や周辺の遺跡から出土した曲谷臼の検討をおこない、曲谷石工の実態にもせまりました。



横打ち込み式の石臼



たが締め式の石臼



第19図　石臼生産遺跡位置図

第1章　調査の経過

伊吹山地の山ふところ、姉川の上流部に位置する滋賀県坂田郡伊吹町曲谷は、ふるくから石材加工の村として知られていた。とくに「曲谷臼」とよばれる石臼は、滋賀県の北部から岐阜県の西美濃地域まで分布が確認されている。石臼生産の中心は、おそらく江戸時代中・後期以降と考えられ、大正末期頃まで続けられていたようである。[1] 石工は近年までわずか1軒残っていたが主に墓石などを作っていたので、曲谷臼の作り方を知っている人はもういない。製作工程等、石臼に関する情報はほとんど伝承に頼らなければならないのが現状である。

現在でも集落内のあちこちで作りかけの石臼をみることができる。多くは家の軒下に積みおかれているが、石垣や石段、家の建築部材として二次的に利用されていたり、屋敷地内のインテリアとしても利用されている。たとえ割れた失敗品であっても、地元の方々によって大切に保管されている。

しかし山中の静かな集落も、近年姉川治水ダムの建設事業などの開発がはじまっている。平成4年度に縄文時代の起し又遺跡の発掘調査を実施した[2]が、今後も引き続き当地に所在する文化遺産の調査を積極的に進める必要がある。

今回の石臼調査はその一環で、地域の歴史を考えるうえで重要な遺物である石臼に、考古学的調査の光をあてて考察していこうとするものである。

今回の調査は、所有者である世一政行氏のご理解とご協力を得て実施した。今回使用した石臼の資料は、個人住宅の建て替えの際に出土したもので、伊吹町教育委員会としては、周知の石臼生産遺跡であったため、立会調査を中心として対応した。したがって、発掘をともなわない調査ではあるが、貴重な遺物の記録保存のため緊急に調査をおこなったものである。

資料中には早くから屋敷内に積んであったものも一部含まれるが、建て替え前の住宅は昭和39年に新築されたもので、多くの石臼はこの時点ですでに埋まっていたり、二次的に利用されていたという。

調査は、伊吹町教育委員会が実施した。曲谷の石臼については、三輪茂雄氏がすでに調査をされている。[3] 本書をまとめるにあたって、三輪氏の文献から得ることが多く、また、直接お会いしてご教示いただいた。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

伊吹町は滋賀県の北東部の端に位置し、滋賀県と岐阜県の県境として南北に連なる伊吹山地の西に位置している。北西および西は七尾山系を境に東浅井郡浅井町に接し、南西および南は坂田郡山東町に、東側は岐阜県となり、北から揖斐郡坂内村、同郡春日村、不破郡関ヶ原町に接している。

町域は東西７km、南北22.7km、面積109.17km²で帯状に南北に長い。地形的には山岳部が多い。町の北中部の各集落は姉川のつくる河谷部に立地し、南部の集落は伊吹山から流れでた弥高川・政所川・藤古川等が形成する複合扇状地上にある。

今回の調査地となった曲谷は町の北部にあたり、北から南に流れる姉川の左岸にある谷底平野に立地している。標高は集落内で約 350m前後をはかる。東西を伊吹山地と七尾山系の天吉寺山にはさまれ、南は甲賀・吉槻と接し県道を南下して町の南部にいたる。吉槻からは七曲峠を越えて浅井町にいたり、かつてはこの道が主要道であった。峡谷部を北へ約６kmさかのぼったところが町内最北の集落・甲津原で、ここから峠を越えて岐阜県の揖斐郡にはいる。

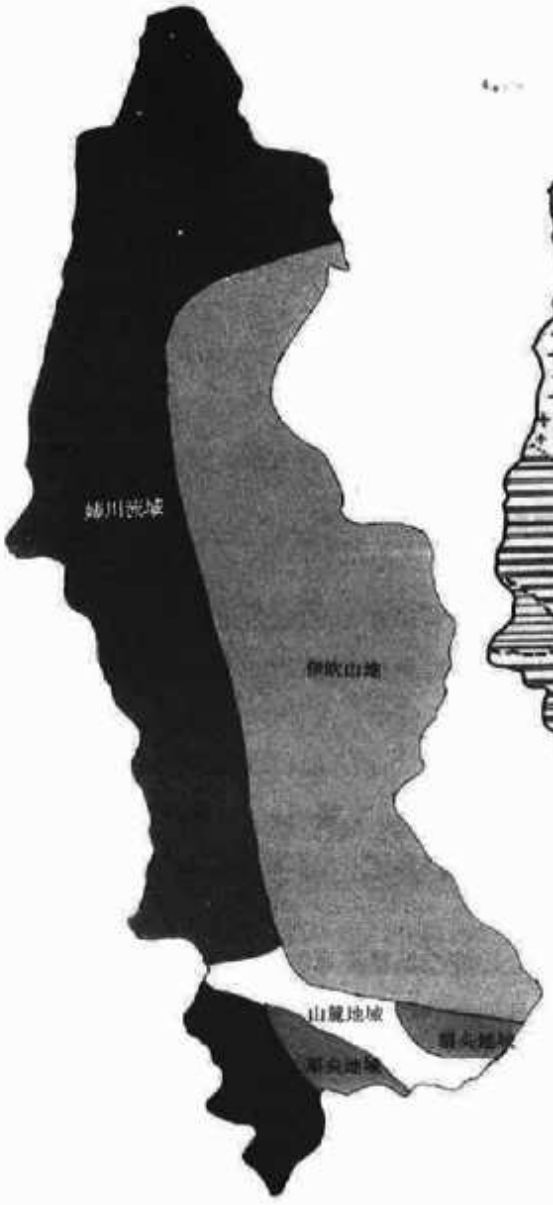
石臼生産遺跡としての地域的なとらえ方は集落全域をさすと考えているが、関連する遺跡として北側の山中に点在する石切場跡がある。[4]

第２節　自 然 環 境

曲谷付近は、姉川層とよばれる粘板岩や頁岩でできている地層のため、上流の花崗岩地帯とは異なり、川は深いＶ字谷を刻んで流れている。しかし、曲谷より北の甲津原周辺は花崗岩帯となっている。

ここの花崗岩床が、今回取り上げる石臼をはじめ石塔・石仏など曲谷における加工品の石材となるものである。同質の岩塊は姉川にも数多く転石として認められる。俗に「曲谷石」とよばれるこの花崗岩は、石質が粘く粒子が粗くて、やや細かい黒雲母が長く連なるところに特徴がある。[6]

曲谷をふくむ町北中部の気候は日本海側気候区北陸型に属し、気温が低く降水量も多く、とくに冬期の積雪量が多い。県下でも有数の豪雪地帯といわれている。[6]



第20図　伊吹町地形区分

粘土・砂およびレキ
石灰岩角レキ
砂およびレキ
花崗岩
石灰岩
粘板岩
チャート
砂岩
チャート
粘板岩および砂岩
粘板岩および頁岩
砂岩および粘板岩
チャート・粘板岩および砂岩
粘板岩および砂岩
チャートおよび粘板岩
粘板岩
粘板岩および砂岩

第21図　伊吹町地質図

（『伊吹町史自然編』より）

第３節　歴史的環境

１　東草野地域の歴史

曲谷を含む姉川上流地域を旧村名をとって東草野地域という。

曲谷集落北東にある姉川の支流起し又川がつくる谷合の段丘上に起し又遺跡がある。平成４年度発掘調査をおこない縄文時代早期・中期・後期の土器が出土した。これらの土器は中期初頭から中頃の瀬戸内系土器（船元・里木式）、中期後葉の東日本的な土器（葉脈状文）、後期の西日本的な土器（中津式・福田ＫⅡ式・北白川上層式・元住吉山式）などで、本遺跡が伊吹山中にあって東西交流の中継点的な役割を果たしていたことがわかった。また集落北側のムカイラ地区における試掘調査でも縄文土器がわずかに出土しており、曲谷を含む姉川上流部の段丘上に縄文遺跡が点在している可能性は高い。

弥生時代以降の明確な遺跡は今のところ確認されていない。しかし曲谷の南にある甲賀の字大カイト・カン谷で須恵器や土師器を採集しているので、今後の調査で新たな遺跡発見が期待できる地域である。[7]

中世には草野庄に属した。草野庄は現在の浅井町の草野川沿いの地域と、曲谷の属す姉川上流の東草野地域で形成されていた。平治の乱に際して浅井町野瀬の大吉寺に源義朝をかくまった草野定康にその所領が安堵されたことが『吾妻鏡』文治三年（1187）二月九日条にみえる。室町時代は円満院、青蓮院門跡、大館氏（将軍近臣）によって分割領知されていた。また、京極氏が北近江を制すると下坂氏や上坂氏が当庄の代官職を勤めた。

江戸時代東草野地域は小堀遠州領（寛永石高帳）、小室藩小堀家領（元禄郷帳）、天明八年に小室藩改易により幕府領と領有関係が代わっている。[8]

明治22年（1889）の町村制施行で甲津原、曲谷、甲賀、吉槻、上板並、下板並の６ヵ村は東浅井郡東草野村となる。現在の町域となったのは昭和31年で、東草野村と坂田郡春照村・伊吹村が合併して坂田郡伊吹村（昭和46年町制施行）が成立した。

現在、姉川河谷の集落は県道山東本巣線によって結ばれ、谷口の伊吹から最奥部の甲津原まで河谷沿いの自動車交通が可能である。しかし、この道路によって路線バスが吉槻まで入るようになったのは昭和20年代の中頃であり、曲谷から甲津原間の自動車交通が可能になったのは昭和30年代前半のことで、それまではもっぱら徒歩交通に依存していた。この徒歩交通時代に重要な役割を果たしたのは、姉川河谷沿いの道ではなく、吉槻から西方へ七曲峠（標高 417ｍ）を越えて草野川河谷の浅井町（旧草野村）鍛冶屋に通じる峠道であった。ここを通じて湖北地方最大の中心地長浜との関係を保持していた。このことが、旧東草野村域を東浅井郡に所属させていた要因の一つであった。また、甲津原から岐阜県

へ越える三つの峠（鳥越峠・新穂峠・品又峠）がある。近世には糸・茶・牛・石臼・炭などの物資の運搬に大きな役割を果たしていたことが史料から読みとれ、近江と美濃を結ぶ間道的存在だった。しかし、このような峠道の利用も、30年代の高度経済成長による生活様式の変化や道路の整備と自動車の普及、町村合併による行政区画の変化などがあいまって姉川上流山村の生活圏に大きな変化が生じ一部は消滅を余儀なくされている[9]。

2　曲谷における石材加工の系譜

曲谷での石材加工の始まりについて、木曽義仲に仕えた西仏房覚明という人物が石工の技術をおこすのに功績があったといういいつたえがある。義仲が滅んだあと曲谷まで逃げてきた西仏房が、ここで硬質の花崗岩を発見しふるさとの信州から石工を招き、輾石（石臼）の製造をはじめたというものである[10]。義仲の敗死は1184年で、伝承どおりとするとこの年以後、曲谷で石材加工が始まったことになる。日本における切り石加工の技術は、源頼朝による東大寺大仏殿再建（1195）で中国・宋から日本にきた伊行末ら石工集団が伝え、鎌倉時代中期頃に畿内や近江で確立したといわれている。

また、国産の石臼が現れるのは15世紀後半に入ってからと考えられており、西仏房による「輾石（石臼）の製造」についてはあくまでいいつたえの域をでないものと考えられる。

では、実際に集落内に残る石造物から曲谷での石材加工の歴史について考えてみたい。

集落内の白山神社に花崗岩製の板碑が二基ある。右は鎌倉時代末期、1310年頃の造立と推定される弥陀三尊形式のもの。左はやや粗いつくりであるがこれも鎌倉末期のものと推定されている[11]（写真２）。その他境内には宝篋印塔の笠や台座などがある。さらに集会所前に注目すべき遺物がある。湖北地方において鎌倉後期から南北朝期のものとされている形式の宝篋印塔台座の未製品で、縦約50cm、横約52cm、高さ約39cm、底部の一部が欠けおちている。側面のうち二面は格狭間が彫られているが、他の二面はほぼ手付かずの状態で自然の玉石（転石）の特徴を残している。石材の産地曲谷でこのような未製品が発見されたことによって、当地での石材加工技術の始まりを今のところ鎌倉後期から南北朝期ととらえることができる（写真３）。

室町時代中期～後期には組合せ式五輪塔や一石五輪塔、石仏などが作られていたものと考えられ、例えば曲谷集会所前の五輪塔宝珠未製品や白山神社にある初期加工段階の一石五輪塔（天正期頃）などがあり、同様のものが下流の吉槻や大久保でもみられる。この時期姉川上流地域で花崗岩などの河原石を利用した石材加工がひろくおこなわれていたのかもしれない[12]。

これは石造品の需要が増え、小型で簡略化した一石五輪塔が流行するようになると、道

具と石材さえあれば農作業の合間につくれたため、曲谷周辺の集落でも手がけられたものと考えられる。

ここで製品の供給先について考えてみたい。当地の石材加工技術の上限と考えた鎌倉後期から南北朝期は、ちょうど京極導誉が北近江で力を持っており本町内の太平寺に城を構えていた時期と合致する。曲谷における石材加工と京極氏との関係は切り離せないのではないだろうか。また近江では早くから仏教文化が広まっていたことが石造建造物文化が栄えた要因の一つと考えられ、とくに本町内においては伊吹山を中心とした仏教文化があり、長尾寺・弥高寺・観音寺・太平寺を中心とした寺院が主要な供給先であったことは、本書でとりあげた長尾寺遺跡の調査でも明らかである。

戦国時代に入ると各地の城館を中心に石臼が普及する[13]。曲谷でもこのころすでに石臼が生産され地侍層など限られた階層が使用していたようである。この点については第3章第3節であらためて考察したい。

石臼は江戸時代に入ると穀物を粉にするために大いに利用され、江戸時代中期以降ひろく普及したものと考えられている。石臼が曲谷の石材加工の中心となるのはこの時期からで、周辺地域に販売ルートを広げていったものと思われる。確認されている分布範囲は湖北地方および岐阜県の西濃地域が中心である。岐阜県西部の揖斐郡には甲津原から久瀬村などにぬける峠道を通ったと考えられる。また、本町内の藤川宿に石臼の問屋があり[14]、曲谷臼の取り扱いや、目立ての職人の斡旋などをおこなっていたという。

この他、町内で曲谷の石材加工技術の系譜を考える資料として町南部の春照にある秋葉神社の石室がある。この石室は県北部地域に多いタイプで、「寛政十一年（1799）石工江州曲谷村　木曽政衛門義政」の銘が刻まれている。曲谷石ではないので、曲谷で作られ製品としてもってこられたものではなく「木曽政衛門義政」という石工が移動して製作したものと考えられる。石材加工技術が最も高度になった製品のひとつといえる(写真4.5)。

曲谷臼の生産は大正末期頃まで続けられていた。しかし大正末期から昭和初年にかけて、しだいに機械による製粉にかわり、これに歩調を合わせるように曲谷における石臼生産も終りを迎えたものと考えられる。石臼は一度購入すると長期間使えるため、その後もしばらくは目立てをする職人がいたという。

第二次大戦後、それまで墓石などを作っていた石工が次第に減っていったが、それでも丁稚奉公に出る少年たちはたいてい各地の本格的な石屋へ就職したという[16]。現在では、最後に残っていた1軒も数年前になくなり、曲谷で石工を仕事にする人はいない。

写真2　白山神社板碑

写真3　宝篋印塔台座未製品

写真4　秋葉神社石室

写真5　秋葉神社石室銘

第3章　調 査 の 成 果

第1節　曲谷臼の形態

２つの円盤状の石を合わせ、上の石を回転させて石に刻んである目に入り込んだ穀物を粉にする道具が「石臼」である。（以下、中表紙の絵参照）

ここでは調査した曲谷臼の形態について考えるが、その前に石臼の一般的な構造について紹介したい。上臼の上面は皿状の「くぼみ」が作ってあり、回転によってものがとびちらないようになっている。中心から少しずれたところにはものをいれる「供給口」が下まで貫通している。上臼の下面と下臼の上面には「目」が刻まれている。上臼の下面はやや凹面で下臼の上面は水平か凸面になっている。この凹面と凸面の間のすきまを「ふくみ」という。下臼の中央には「芯棒穴」が貫通している。これに「芯棒」を「つめ木」で固定し、上臼下面中央の「芯棒受け」と重ねあわせる。芯棒受けには「受け金」をつける。

石臼の最も重要なものである「目」は、ふつう中心から放射状に６あるいは８本の溝（主溝）を出し、この溝にそれぞれ平行して等間隔に何本かの溝（副溝）を刻んでいる。主溝が８本で副溝が６本のパターンを８分画６溝式などという。上臼の回転によって上下の溝が重なりあうことにより目につまったものを粉にしながら外に押し出していく。臼の刻み目の断面は石の質と挽くものによって変わるが、Ｖ字形、丸溝などがある。目のパターンは８分画と６分画が多く、大まかに８分画は近畿圏を中心に分布し、６分画は九州や長野、関東地方に分布している。

上臼を回転させる際につかう「挽き木」は、上臼の側面に掘った穴にＬ字形の挽き木を打ち込むものが全国的に多く、滋賀県と愛知県北部・岐阜県南部・三重県北部には、上臼の側面に縦方向の浅い溝をつくり、２本の竹の「たが」を巻きくさび状の挽き木を打ち込む形式のものが分布している[18]。もちろん曲谷の石臼は後者に属す。

今回の調査では、住宅移転にともなって出土した資料が中心で、そのほとんどが失敗品として放棄されたものか荒どりした石臼用石材であった。（表7、8参照）

資料総数は 121点。その中で完成品は上臼が２点と下臼がわずかに１点のみであった。完成品が見つからない理由としては、産地であるので古くなる前に売ってしまい、自家用には新しいものを使ったと考えられる。　本節では、この内の２点と町内の上野地区で使われていた曲谷臼のセット１組および町保管の１セットをとりあげて、完成品としての曲

谷臼の形態について検討したい。

(1)(2)は世一氏所有の出土資料である。

(1)は上臼で、直径35.5cmでおそらく一尺二寸の規格品と考えられる。高さ 11.2cm、重さは25kgを計る。上面のくぼみは浅い皿状で下端に段をつくらないでゆるやかにくぼんでいる。外のふちからの深さは 2.6cmで、そのくぼみの中心よりずれた位置に供給口が貫通している。この供給口は 4.1cm× 3.4cmの長方形をしており入口のところでわずかに傾斜して落ちこむ。供給口の断面は入口下から下面の 1.3cm上までほぼ垂直にあいており、下面付近で「ハ」の字状に開く。ここでは隅丸の長方形で口を開け、長さ約 8cmの内側に曲がった「もの配り溝」が付き、全体では拓本で見るように勾玉型をしている。このもの配りの向きから、反時計まわりにまわされていたことがわかる。

ふちの幅は 3.4cmで、供給口と中心をはさんだ対角（Aの位置）に挽き手溝がある。挽き手溝は側面から見ると台形をしており上からの長さは 6.4cm、上端の幅は 3.2cm下端は 2.3cmである。上端の奥行きは 1cmで、ゆるやかに傾斜しながら下端にいたる。

下面中央には直径 2.9cm、深さ 1.9cmで円形の芯棒受けが彫られている。金属製の受け金が取り付けられていたような痕跡はない。

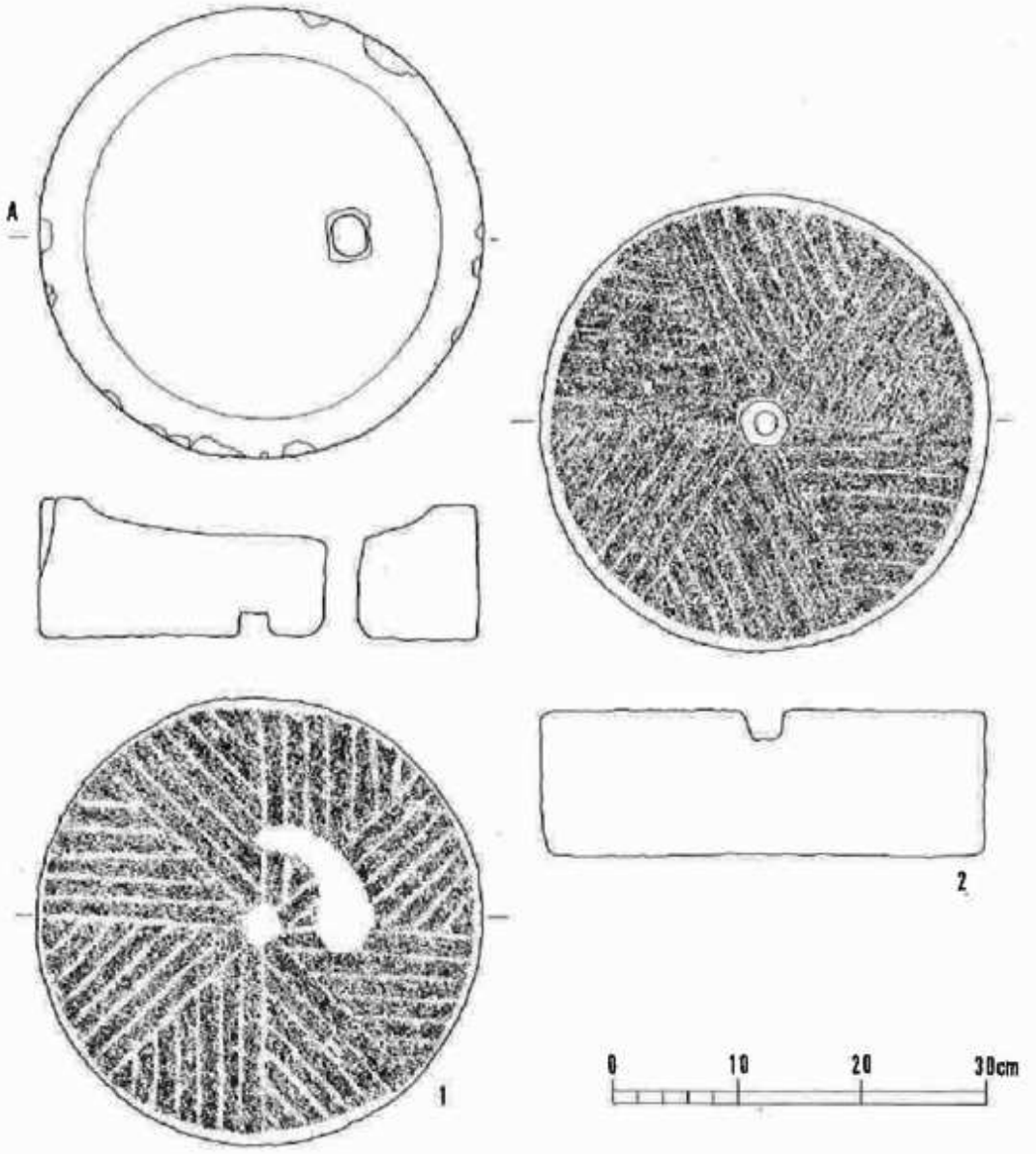
下面は８分画６溝式の目が刻まれている。それぞれの溝の間隔はおよそ 1.7cmである。目の刻みは新しくほとんど使われていないのではないだろうか。

なお、世一氏所有の完成品上臼の残る１点は図示しなかったが、直径34.5cm、高さ10.5cm、重さ22kgと少し(1)より小さめの８分画のものである。

(2) は唯一の下臼完成品である。直径34.8cm、高さ11.7cm、重さは30kgを測る。上面の中央に直径 3.8cm、深さ 2.4cmの「芯棒穴」があけられている。臼面表面は側面、底部ともにきれいに仕上げられている。

この資料は唯一の完成品ではあるが、従来考えられていた曲谷臼の概念とは明らかにことなる特徴をもっている。その１つは芯棒穴が深さ 2.4cmで止まっていて貫通していない点である。一般的に芯棒穴は貫通しているのが普通で、芯棒穴が貫通していないものが発見されるのはきわめて稀であるという。事実、今回調査で使用した資料も、芯棒穴が貫通しているか、あるいは上下から穴をあけようとしているものが大部分をしめた。

この件に関係すると思われるが、芯棒穴が貫通している下臼の下面はほとんど内側がえぐられている。これは、石臼は桶の中でひくが、下臼の底が平だと桶の底がゆがんでいる場合に動いてしまうという理由からである。しかし (2)は底部が完全に平に仕上げられている。



第22図　出土遺物実測図

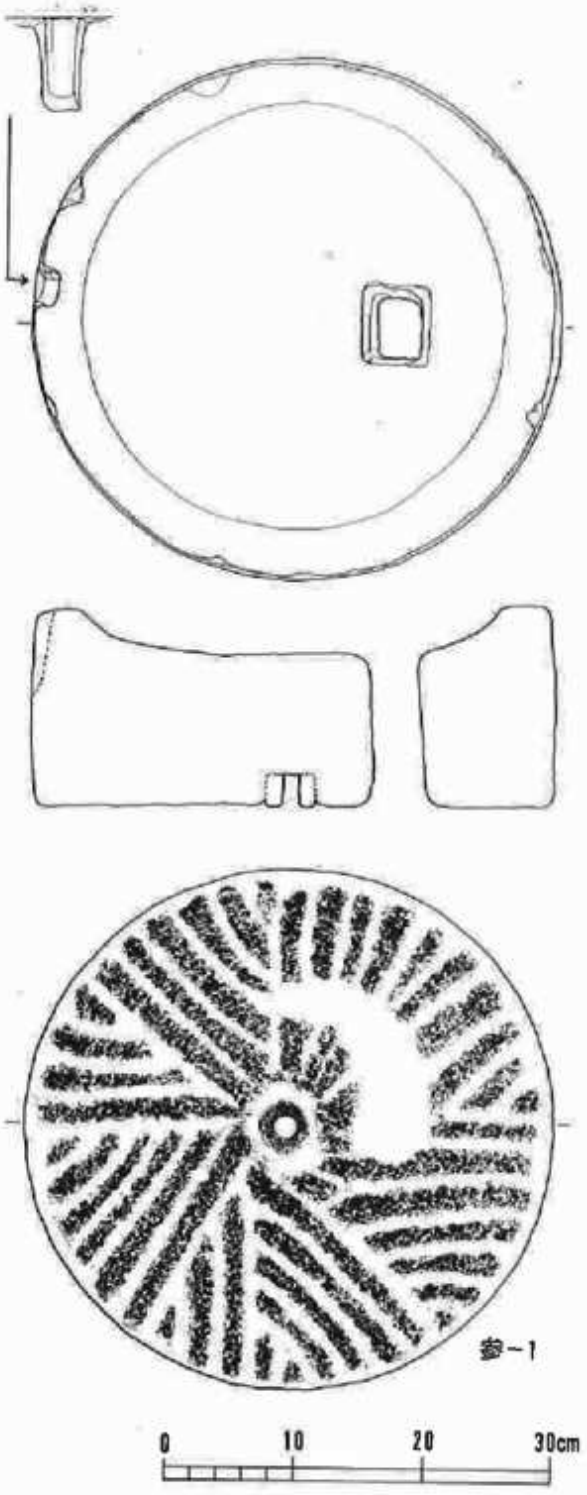
さらに決定的な相違は目のパターンが６分画であるということである。具体的には６分画７溝式の目をもっている。近畿圏の石臼は８分画で、三輪氏の分布図でみると西日本は一部の例外を除いて中国・四国地方まで、東日本は富山県、岐阜県美濃地方、愛知県尾張地方までが８分画となっている。今回曲谷で６分画の石臼が見つかったことは注目すべき点であり、あるいは現在曲谷臼が確認されている東の端である岐阜県郡上郡などを中継して、飛騨地方や信州の６分画の臼と技術的な交流があったものと考えられる。

このように極めて特徴的な形態をもつ(2)は、あくまでも曲谷臼全体の中では例外的なものと考えられる。この臼は、目のすり減り具合から曲谷内で使用されていたようで、特異な形態から特別な使い道があったかとも思われる。

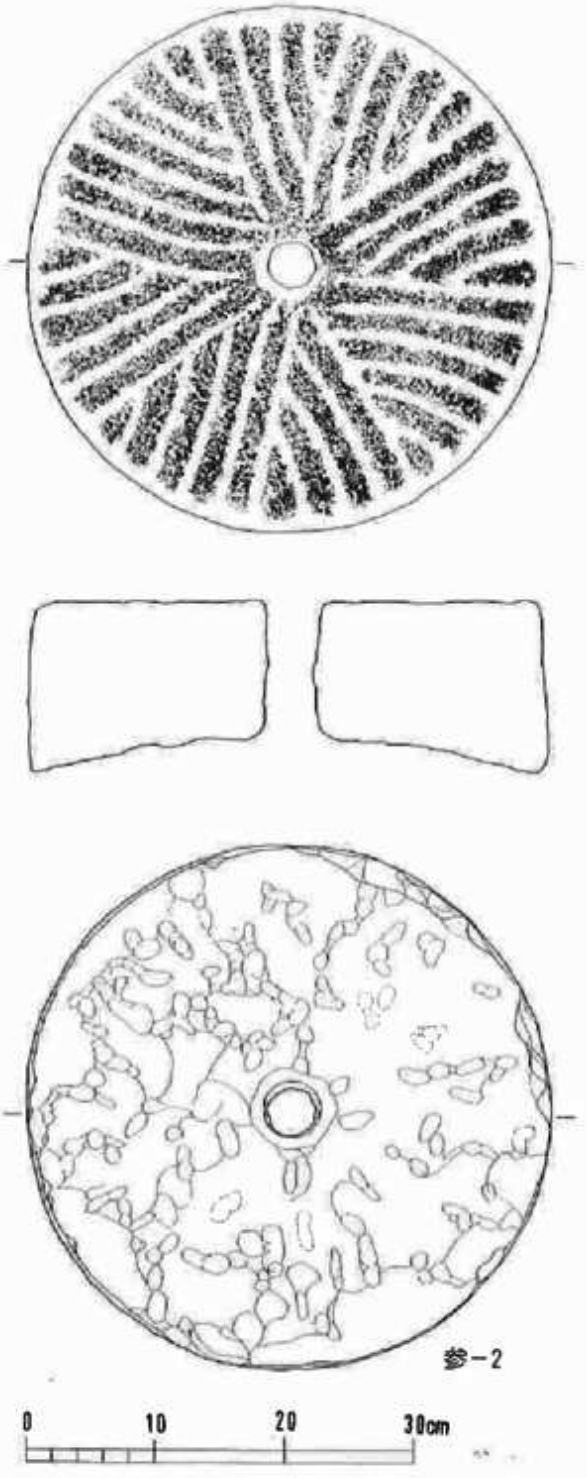
次に参考資料として町中部にある上野地区で使用されていた曲谷臼についてみてみたい。

この臼は昭和30年頃まで大豆などをひくのに使われていた。入手先や入手方法など具体的なことは定かでないが、石質やつくりなどから曲谷臼であることは間違いない。なお、使用済になってからは屋外におかれていたためか、曲谷臼にとって必要な部品である木製の挽き木やこれをとめる2本の竹のたが、芯棒や芯棒を固定するためのつめ木などは、すでになくなっている。

(参－1)は上臼である。直径40.5cmで曲谷臼に多い一尺二寸(約36cm)よりひとまわり大きい。高さも15.8cmを測り、したがって45.0kgと非常に重いものである。とても一人で作業するための臼とは考えられない。曲谷臼には一人挽きと二人挽きのものがあったといい、本資料は後者であろう。上面のくぼみは深さ 3.7cmで段をもたない皿状をしている。くぼみのふちは幅 4.7cmを測り、丸みをおびている。これは



第23図　石臼実測図



第24図　石臼実測図

曲谷臼共通の特徴であると思われる。くぼみの中心より約 5cmずれたところに供給口が貫通している。これは平面が 6.1cm× 5.4cmの長方形で入口付近でわずかに傾斜してまっすぐ下面まで貫通する。側面の挽き手溝は供給口と中心をはさんで対角のややずれた位置にある。高さ26.7cm、上辺 4cm、下辺 3cmの台形をしており、上の奥行きは 1.9cmである。

下面には上面から貫通しているもの配りと芯棒受けがつくられている。もの配りは曲がりながらつけられており、下面の約４分の１区画分の長さである。もの配りの向きから、この臼が反時計まわりであることがわかる。芯棒受けの穴は直径 3.9cm、深さ 2.5cmで、幅 1.2cmの金属製の金輪が取り付けられている。この金輪を「ばんかね」と呼ぶ。

臼の目の溝は幅 1cm前後、深さ 0.8 cm前後で広く深く、断面は丸溝である。約 1.4cm間隔で切られており、溝の切り方は８分画で２～５の副溝をもつが、１ヵ所で溝の主溝に平行する変則的な「こぼれ目」があるなど、目の切り方に不規則さがみえる。

（参－ 1)は、臼や目の大きさから一尺二寸前後の標準的な曲谷臼とはちがう用途をもっていたものかもしれない。

（参－ 2)は（参－ 1)と一組で使用されていた下臼である。直径40.5cm、高

さ13.2cm、重さ40kgを測る。直径は上臼と同じであるが、高さは約 2.6cm低い。これは重みを加えて粉砕する機能をもつ上臼と、安定しておればよい下臼との性格の差であると思われる。

上面の中央に直径 4.4cmの芯棒穴が貫通している。この穴は下面が中央にむかって大きくえぐられているために上から10.8cmを測る。穴の中央付近がやや出っ張っている。

上面の目の溝は幅 1cm前後、深さ 0.8cm前後で、間隔も(参ー 1)とほぼ同じである。8分画で3～6の副溝をもつ。

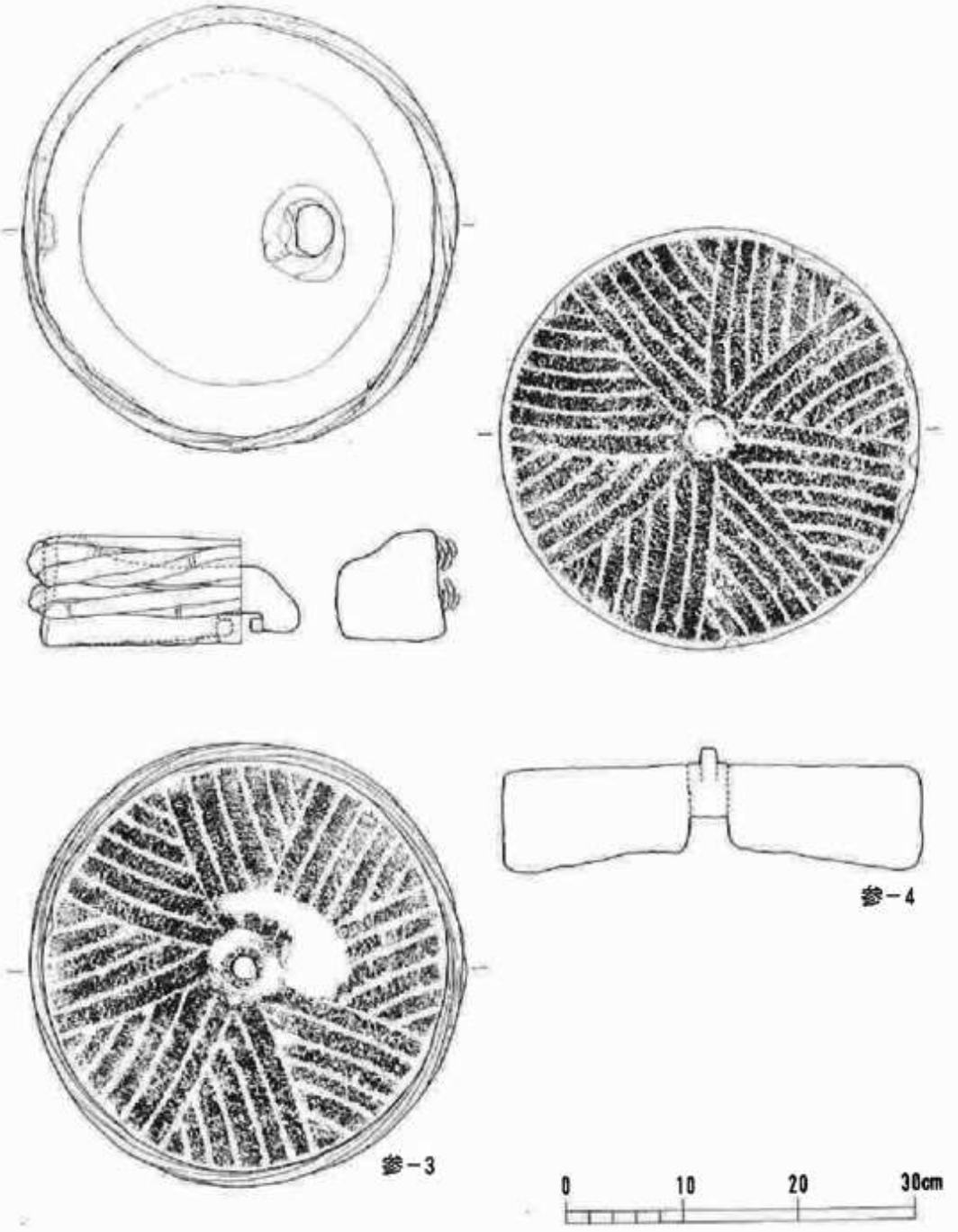
下面は端から 3.4cm中央でえぐられており、外側から放射状に彫られたノミ跡を明瞭に残すものの、端部は研磨されており、水平になるよう仕上げられている。断面図でみるように、曲谷臼の下臼下面は使い勝手から中央でくぼませているのが普通であり、(2) が特殊な例であることがわかる。

(参ー 3)と(参ー 4)は伊吹町教育委員会が約10年前に収集し保管していた資料である。具体的に使用されていた地域はわからないが、町内で使用されていた曲谷臼であることはまちがいない。挽き木はなくなっているが2本の竹のたがや芯棒、芯棒受けが残っており保存状態はよい。

(参ー 3)は上臼である。臼の直径35.1cm、高さ 9.5cm、竹のたがを含む重さは20.5kgである。竹にたがをいれた直径は37.5cmとなる。上面のくぼみは深さ 2.7cmの浅い皿状で、中心よりずれた位置にある供給口は大きく傾斜して漏斗状になっている。供給口の一番狭まったところは4.5cm×2.2cmで隅の丸い方形をしている。ふちの幅は 4cmを測る。挽き手溝は供給口と中央をはさんだ対角に位置している。上端の幅は 3cm、奥行きは 1.2cmで、縦は約 6.5cm程下がるが、たがのため確認できない。たがは竹製で上下2本ある。上のたがは4本、下は3本の竹で組まれている。したがって上のたがの方が下よりも太い。

下面は8分画5溝式の目が刻まれている。断面は丸く、目の幅は約 0.6cmで、それぞれの間隔は約 1.6cmである。中心に近いところにもの配りがあり、この臼が反時計回りであることを示している。芯棒受けは直径 4cm、深さ 1.7cmで、幅 1.2cm前後の金属製の輪がついている。この臼の下面中央は、一部すり減っていて端部より約 1cmくぼんでいる。

この資料は挽き木をたがと挽き手溝の間に打ち込んで完成となるが、すでに挽き木は失われている。町内を歩くと多くの家の軒先に石臼がつまれているが、そのほとんどが雨風のためにたがや挽き木が失われており、蔵にでも保管されていないかぎり完形品は残っていないだろう。また、曲谷臼につきもののたがが曲谷ではめられていたのかどうか不明だが、曲谷にもかつて桶屋があったと聞く。挽き木はカシのような硬い材質の少し曲がった



第25図　石臼実測図

ものをさがしてきて使用したという。

(参－ 4)は(参－ 3)とセットになる下臼である。直径36.1cm、高さ 9.2cm、重さは21.0kgを測る。上面に８分画で５～６溝をもつ。断面は丸く、目の幅は約 0.6cmで、それぞれの間隔は約 1.4cmである。中央に芯棒穴があり、直径 1.3cmの鉄製の芯棒が木のつめ木によって固定されている。芯棒は 1.3cm突き出ており、上臼の心棒受けとあう。下はつめ木から出ていない。つめ木は上面から 4.6cm下まで残っている。下部は腐食しているため、もともとどこまであったかわからない。下面は中央付近でえぐられていて端部から1.7cmくぼむ。(参－ 2)と同様に外側から放射状に彫られたノミ跡を明瞭に残す。

最後に表１と表２についてみてみたい。世一家資料の計測から上臼、下臼それぞれの直径と高さをおとしたもので、これによって曲谷臼の製品の規格を考えるうえでの参考にしたい。あくまでも、先にかいたように資料のほとんどすべてが製作途中で放棄されたものであるために、その後の工程で、とくに仕上げの段階で数値が低くなるものと思われる。当然数値にもバラツキがでてくるわけで、今後あらためて製品となった曲谷臼の計測表をつくり検討する必要がある。

表１は上臼の数値を表す。大まかに直径は35cm～36.5cmの間に集中している。高さは12

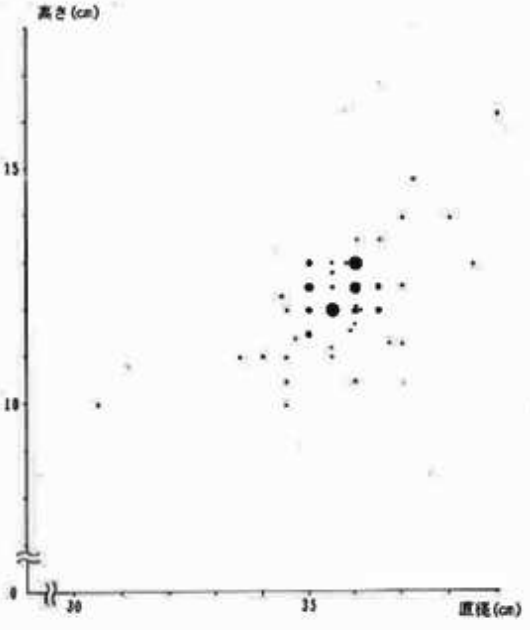


表１　上臼計測値グラフ

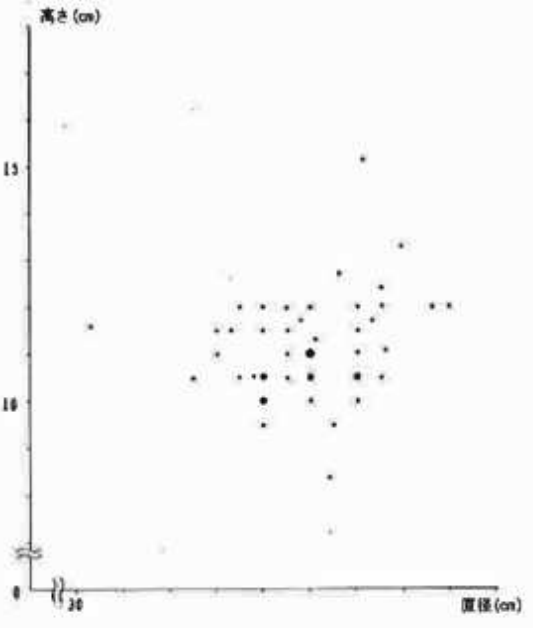


表２　下臼計測値グラフ

cm～13cmが中心であるが10cm以下のものはない。直径が一尺二寸、高さが四寸が目安となる。次に下臼を示す表２は、表１よりさらにバラついており、しいて中心となる範囲をとるなら、直径が34cm～36.5cm、高さが10cm～13cmとなる。直径はおそらく上臼とあわせることを考えると一尺二寸の規格になると思われるが、高さは10cm以下のものもあり、上臼より下臼が低い。上臼は重量をかける役割をもつので下臼より高くしているのではないだろうか。

曲谷臼の特徴については三輪氏が次のように述べられている[17]。

①石質は細かい黒雲母が長くつらなる配列に特徴がある。

②上臼上面のくぼみが浅い皿状をなす。

③供給口は長方形で入口に向かって漏斗状に傾斜している。

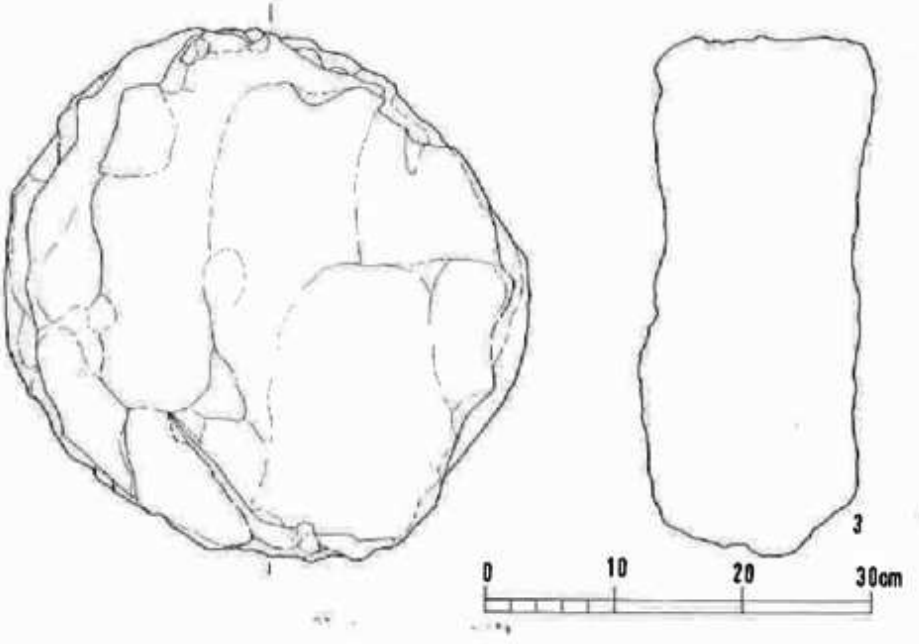
④直径は一尺二寸（36cm）前後。

⑤高さは二．五寸～三．五寸（ 7.5cm～10.5cm）。

⑥たが締め挽き手を取り付ける溝がある。

⑦目は８分画で回転方向は反時計回り。

②～⑥については今回あらためて確認するにとどまったが、⑤の高さについては、未使用の製品としてはもう少し高くなるかもしれない。⑦は例外的なものかもしれないが６分画のものが見つかった。又、ふちがまるみをおびているのも曲谷臼の特徴といえる。



第26図　出土遺物実測図

第2節　製作工程の復元

1　製作工程の復元

ここでは、出土した資料から曲谷臼の製作工程の復元を試みたい。

石臼の製作工程については、三輪茂雄氏による京友禅の染物用につかう餅米糊製造用石臼（黒雲母花崗岩：白川石）の製作手順の記録や佐渡の石英安山岩（小泊石）製石臼の記録がある[18]。これらはそれぞれの筆者が実際に体験した記録であり、詳細で継続的な工程や注意事項が記録されている。

曲谷では、すでに昭和初期に石臼生産が衰退していたと考えられることから、製作工程の復元にはこれら他地域の資料を参考にするしかなかった。

したがって、今回ここで記録する内容については、あくまで出土品を対象にした観察からの推測であって、なんら経験がともなっていないことを先にお断りしておきたい。

今回の資料を使い各作業のなかみを検討することで、製作方法や使われていた道具などの推測ができないだろうか。そのうえで最後に作業工程について考えたい。

〔石臼用石材〕

曲谷の石切場は、集落の北側に点在している。主なものとして、姉川の支流起し又川の谷合にあるサナギ谷（ミズガタニ）や寺谷の支谷であるイワイ谷などがあげられる。これらには露頭した花崗岩のかたまりがあり、現在でも矢穴のあるものや放棄された石材、石屋とよばれる作業小屋のあとが残っている。石屋は積み上げられた壁の石材のみ残っており、屋根はおそらく茅などでふかれていたと思われる。

石臼つくりの第1工程は、山で原石を切り出し、その原石を割って、ほぼ臼の形になるまで成形することで、ここまでの作業を石小屋の中でおこなったようである。

余分な部分を落し、できるだけ軽くなった石材を背負って山をおり、自分の家に持ち帰って冬仕事に細かい細工をおこなったという。

(3)～(5)は、この工程で集落に持ちかえられた石臼用の石材と思われる。

(3)は直径40.4cm、高さ16.7cm、重さ45.4kgで、全面に凹凸があり粗く整形されている。側面には縦方向に打ち込んだノミ跡が2ヵ所確認できる。ノミ跡は両方とも幅が 1.8cmで上端より 6cm下まで打ち込まれている。おそらく山で荒どりの際に側面の余分な部分を削り落としたときのものであろう。2つのノミ跡の間隔は12cmを計る。しかし極端な凹凸があり、側面も大きくえぐれたところがあることや、高さが16.7cmもあり曲谷臼の規格にするにはさらに 3cm前後削る必要があることなど、山で充分にぜい肉を落としたものとはい

えない。また、側面が欠けているのでこの石材で製作できる石臼は直径36cmのものが最大となる。

(4) は直径31.8cm、高さ14.7cm、重さ25.0kgの石材である。直径からすると一尺の臼になると考えられる。側面は (3) と違いほぼ臼の形に整形しているが、図の上面は中央付近で盛り上がっており、逆に下はえぐられている。石の角は全周が欠かれている。上面および側面にはノミ跡が明瞭に残っている。上面には３ヵ所のノミ跡があり、幅１cmで長さは２本は５cm前後、１本は６cmで端から中央の盛り上がりに向けて打ち込まれており、余分な凸面をノミで削っていることがわかる。側面のノミは上から中央付近まで打ち込んで削られている。おそらく上下からのノミで側面を作りあげるものと思われる。(4)は(3)とちがい臼に近い形まで山で仕上げたものではないだろうか。しかし、下面がえぐれており、製品化を前に放棄された可能性もある。

(5) は直径31.5cm、高さ11.2cm、重さ17.5kgの石材である。図は約２cmくぼんだ部分であり、製品化するとなると下臼の下場になると考えられる。しかし下臼としても軽量すぎることや、側面に欠損が多いことから放棄されたものではないだろうか。図の裏側はある程度整形されているが、図の面は縦横にノミ跡が残っている。

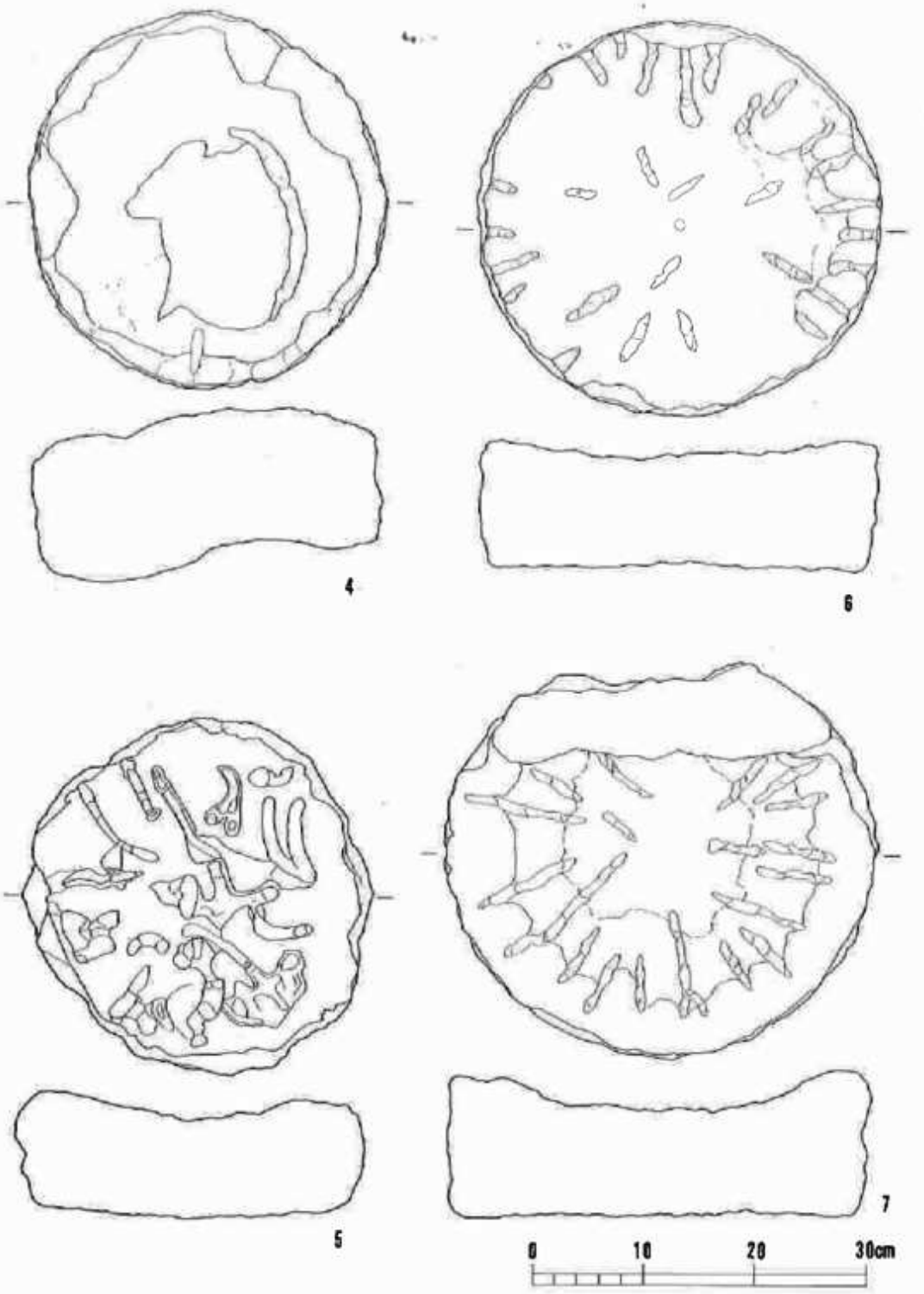
その他、世一氏所有の資料中には11点の石臼用石材があった。直径は最小31.0から最大42.0cmで平均値が36.5cm、高さは 9.0～15.5cmで平均値が12.3cm、重量は18.0～42.0kgで平均値が30.9kgとなる。

平均値からみるかぎりでは完成品に近い数値を示している。このことは、山で荒どりする際にほとんど臼の規格に近いところまで石材をつくりあげて、家まで持って帰っていることを想像させる。

〔 上 臼 〕

上面のくぼみをつくる (6)～(8)は上臼の上面のくぼみをつくる工程を示すものである。

(6)は上面のくぼみをつくりかけたところや、山での作業がわかる資料で、直径36.1cm、高さ12.0cm、重さ26.5kgを計る。直径、高さともに完成品の規格にできあがっており、山での石臼用石材づくりの仕上がりを示す資料ともなる。上面をわずかにくぼみぎみに荒どりしたノミ跡とは別に、皿状のくぼみを４分の１程度つくりかけているノミ跡がある。このノミ跡は端から 3.0～4.8cm水平に進んだところでそのまま内部に傾斜してくぼみを彫っている。ノミ跡の幅は１cm前後で明瞭にのこる。すべてのノミ跡は中心に向けて 360度放射状に打ち込まれている。削る面を外側にして石材を立て、少しづつ回しながらノミを打ち込んでいく作業が行なわれたものと考えられる。下面は山での荒どりのままと思われ、



第27図　出土遺物実測図

たくさんのノミ跡がある。

もう一つこの資料で注目すべき点は、石材の中央に直径 1cmの円形の浅い穴が彫られていることである。これはおそらく石材の側面を削り円形にするための目安として彫られたものと考えられる。この点を中心としてコンパス状の道具で臼の直径の円を引き、それに合わせて側面を削る作業がこの点から復元される。

なお、本資料は上面角が作業中に欠けたことが放棄された原因として考えられる。

(7)は直径38.5cm、高さ13.0cm、重さ28.0kgで、外周の約３分の１が割れている。(6)につづくもので荒くはあるがほぼ皿状くぼみをつくりだしている。くぼみの深さは 3.6cmで上端の直径は28cm前後、下端直径は17cm前後、ふちの幅は５cm前後である。ふちの部分はなんらかの作業で平になっていて、(6)にあったような端からでるノミ跡はなくなっている。くぼみを削るノミ跡はふちの内側から傾斜して深く打ち込まれている。一番長いもので14.3cm、短いもので 5.2cm、幅 1cmで中心に向かって放射状にならぶ。ノミ跡の間隔は1.2～6.0cmである。このくぼみを彫るときに大きく欠けたものと考えられる。

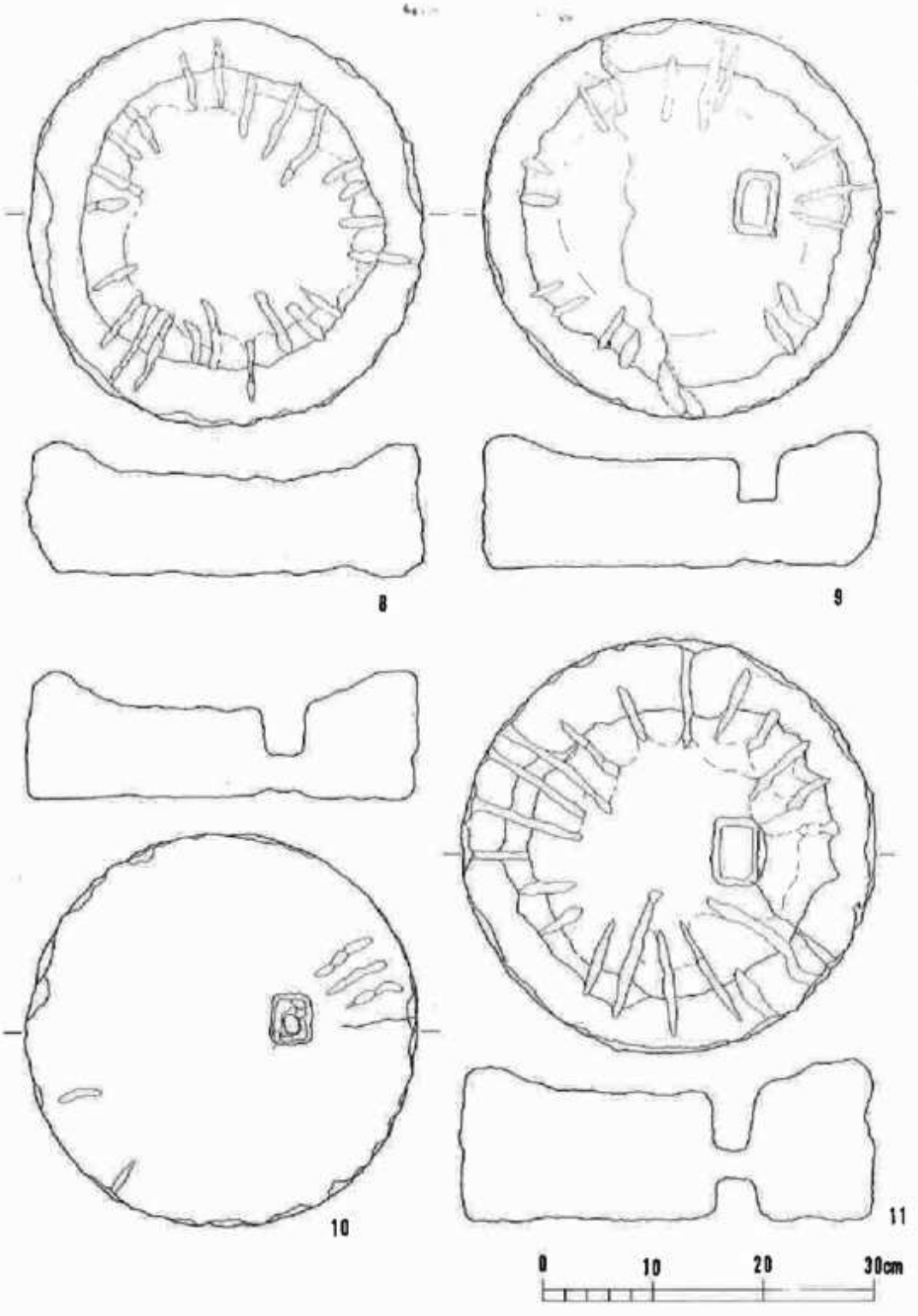
下面や側面はノミ跡がのこるものの平らに成形されている。

(8)は 直径34.4cm、高さ12.3cm、重さ26.0kgで皿状のくぼみがあらかたできあがっている。ふちはほぼ水平に仕上げられ、ふちの内側端の稜線は円形につながり、(7) よりも進んだ段階といえる。くぼみ内は、(7) 同様のノミ跡が放射状に入る。くぼみの深さは３cmである。下面と側面は(6)(7)同様で、下面にひびが入ったことにより放棄されたものか。

供給口を彫る　(9)～(15)は供給口をあける段階の資料である。(9)(10)は上面から穴を開けた段階で、(11)(12)はつづいて下から穴を開け、(13)～(15)は両者が貫通した過程を示す。

これら世一氏資料をみると、皿状のくぼみを彫り、上面から穴を開けはじめ、一気に彫りきるのではなく、下面から穴を開けて貫通させる工程が考えられる。おそらくこれが一般的な工程と考えられるが、宇向平で採集した(参－５)のように、明らかに下から穴を開けはじめた資料もある。

(9)は 直径36.0cm、高さ12.1cm、重さ27.0kgで、中心よりややずれた位置に長方形の供給口が彫られはじめている。くぼみやふちは十数個所のノミ跡をのこし、わずかな凸凹があるものの、製品に近い整形がされている。くぼみは深さ 2cmと浅く下の段がないもので、曲谷臼の特徴をよくあらわす。ふちは 3～ 4cmの幅があり、側面の仕上げ段階で均一にするものか。供給口は 6cm× 4cmで、まっすぐに約 4cm彫られて平にして止めている。のこり 5.4cmを下面から彫ることになる。



第28図　出土遺物実測図

下面はノミ跡がわからない程度に整えられている。上面の供給口の真下に下面からの供給口を開けかけた痕跡がある。これについては(10)のところでふれる。

この資料は体部を貫いてひびが入っており、そのために放棄された。

(10)は(9)とまったく同じ工程の上臼下面にあたる。直径36.0cm、高さ11.7cm、重さ26.0kg下面はノミ跡をつぶして水平にしている。ノミ跡はわずかに確認できる程度である。上面はノミ跡を多くのこすものの、くぼみとふちの区別ははっきりしている。側面も下面から 3cmのところまで全周が整形されている。

供給口は長方形で、上面から 5cmのところまで彫られていて、下面まで 3.8cmをのこす。下面の痕跡は 4.8cm× 4cmで深さ 0.8cm、周囲から彫られはじめたようで、中央が島状にのこされている。ノミの先端部の痕跡は幅 0.5cmである。供給口を開ける作業のときにひびが入って放棄された。

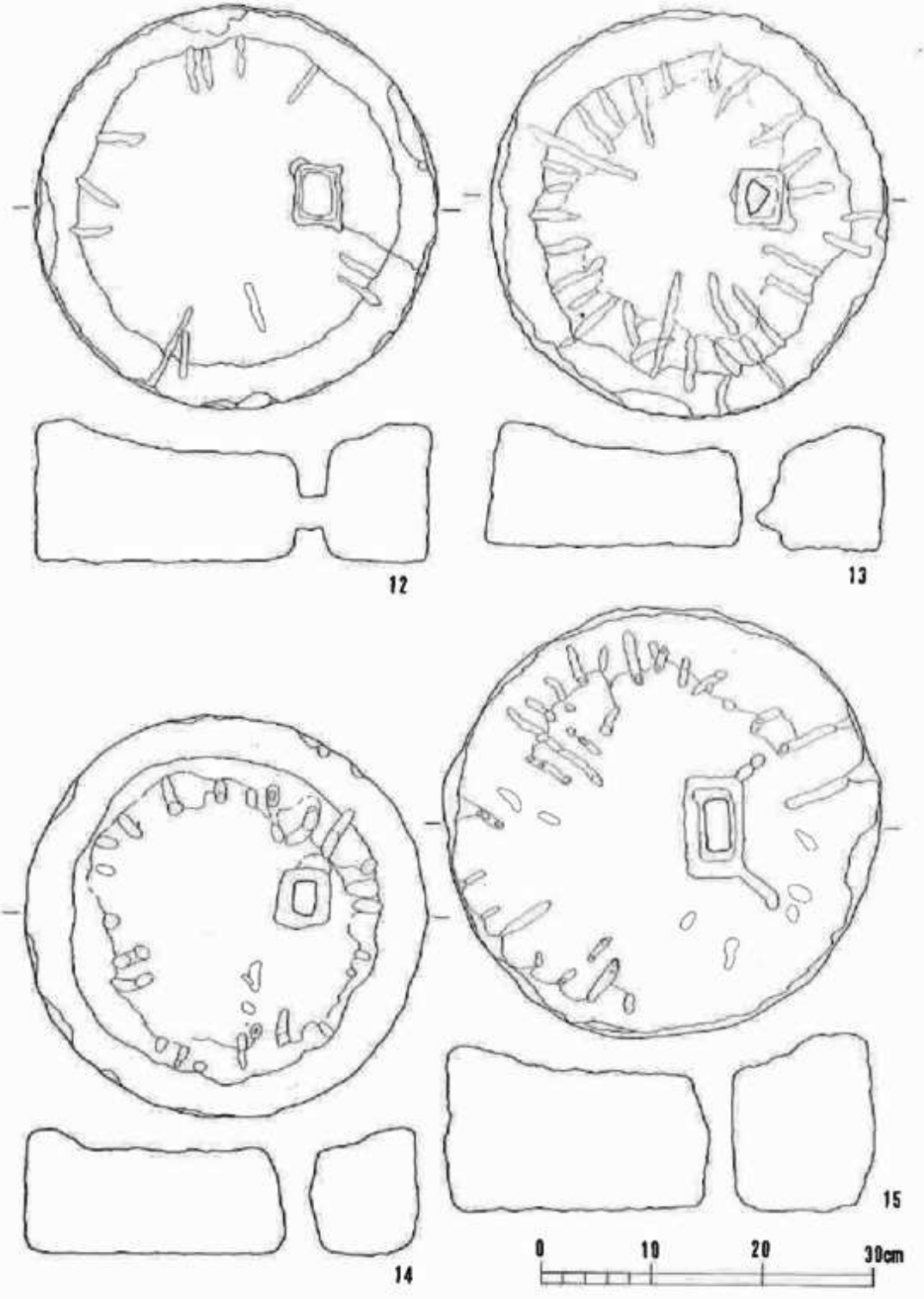
(9)(10) からわかることは、供給口や下臼の芯棒穴などを彫るときには、まず穴の外周に沿ってノミを入れていき、その後中央にのこった島状の部分を欠いていくという作業と、さらに、下の穴を開ける段階では、下面はノミ跡をほとんど消すまでに水平に整形されているという作業工程で、この作業は下面からの穴を開ける前に行なわれているが、上面のくぼみをつくったあとか、上の穴を途中まで開けたあとになされていると考えられるが、この工程をあらわす資料は得られなかった。

(11)は供給口を下面から途中まで彫った段階のもので、次の(12)と同様に彫る際にひびが入ったために放棄されたものと考えられる。上面は端部からふちをへてくぼみを彫るノミ跡を荒々しくのこし、ふちの幅も未調整である。胴部も同様であるが、下面はやはりノミ跡をつぶしてほぼ水平に整えられている。直径37.2cm、高さ14.8cm、重さ33.0kgを測る。供給口は 6.4cm× 4cmの長方形で、上下ともほぼ同じ大きさとなっている。

(12)は(11)とちがい上面ならびに側面も下面と同じようにほぼノミ跡がつぶされていて、臼の規格に近くなっている。直径35.8cm、高さ13.0cm、重さ38.0kgである。上面のくぼみは曲谷臼の特徴である内面に段をもたない浅い皿状をしており、ふちの幅も 3cm前後にそろっている。供給口は 5.6cm× 4.4cmで、上下の穴を結んでひびが入っている。

(13)は供給口が上下貫通した状況であるが、完全に口が整えられておらず、上から 6cm、下から 3cmのところで狭まっていて、 2cmほどのでっぱりをのこしている。このでっぱりを欠き供給口を整えるのであろう。放棄された原因は不明である。直径36.7cm、高さ11.3cm、重さ26.5kgである。

(14)(15)は、供給口が完全に貫通している資料で、(14)は直径35.9cm、高さ11.6cm、重さ30.2kg、完成された供給口は 5cm× 4cmと小さめで、下面は完全に平に調整されていて



第29図　出土遺物実測図

ノミ跡はない。上面はノミ跡をわずかにのこすものの、幅 4cmのふちと、深さ 1.8cmの浅い皿状のくぼみができあがっている。

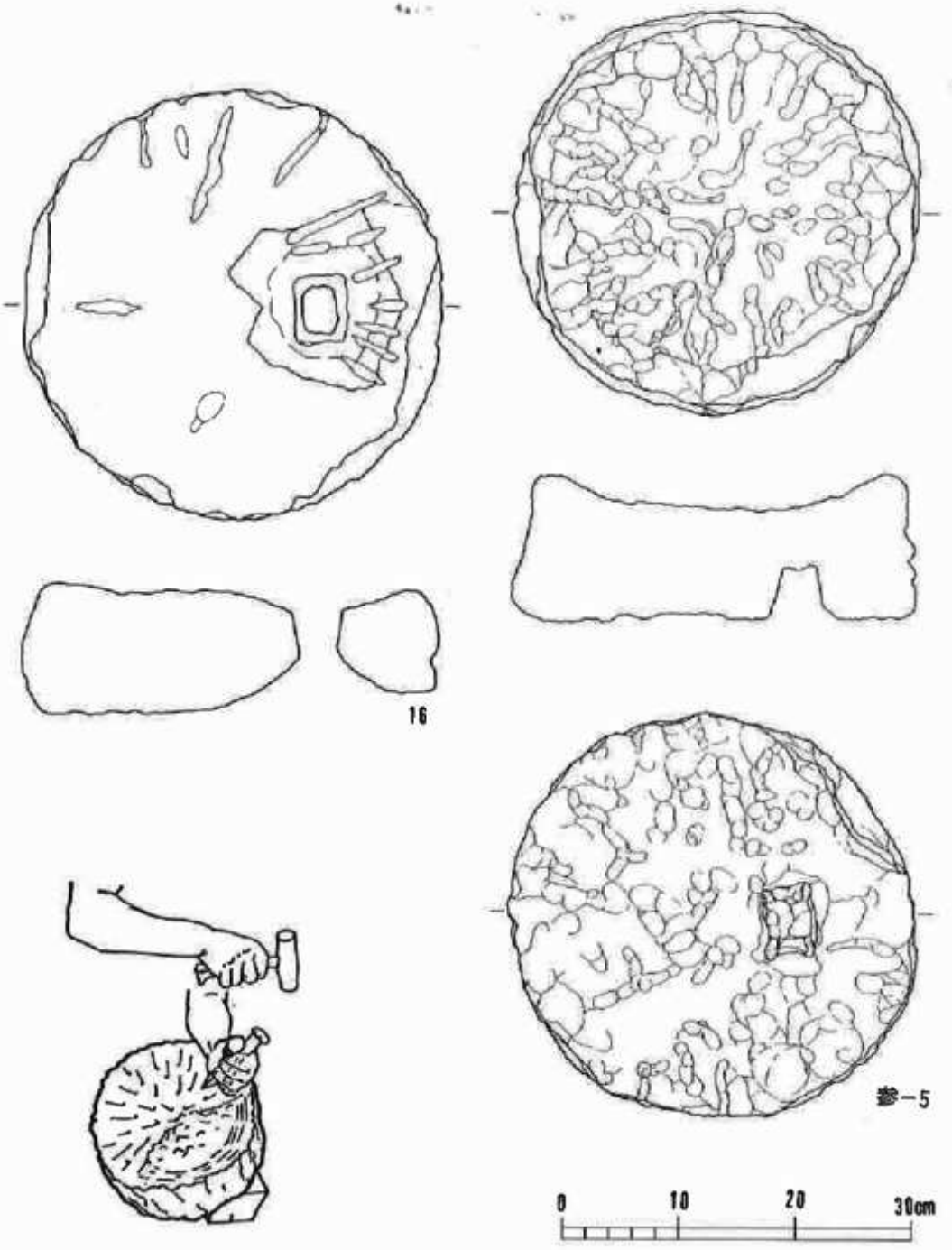
(15)は(14)の工程の下面にあたる。直径39.0cm、高さ16.2cm、重さ40.1kgで最も大きいサイズである。平面 9cm× 5cmの供給口は中央付近やや狭まりながら貫通している。(15)は全体に荒く、上下側面ともノミ跡を多くのこす。特に下面は、(9)～(14)の下面がノミ跡がほとんど無くなるまでに整形されているのと比べると、端部の一部は水平になっているものの下面にも多くのノミ跡を認める。下面の調整が他の資料と比べ不充分なまま、供給口を完成しているもので、このように製作工程にバラツキがある点に、専業集団ではない曲谷石工の特徴がうかがえる。

明らかに製作工程のバラツキがわかる資料として(16)がある。直径37cm、高さ11.7cm、重さ26.0kgで、上面がほぼ平に整形されている。他の資料のように先にくぼみを全体に彫らず、供給口の周辺のみが彫りくぼめられている。外側のふちの部分を約 3cmほどはずしたところから、くぼみを彫ったときのノミ跡が８本ある。彫られているくぼみは、深さは 2cmで幅14～16cmの不成形をしている。その中央付近に5.6cm×4.6cmの供給口が彫られている。入り口付近はほぼ完成しているが、下面は大きくえぐれいる。おそらく上の供給口をつくるときに、開けすぎてそのまま下の部分が大きく剥離してしまったものと考えられる。すべての資料がそうであるように、石材に貫通する穴を開けるときは、あるところまで開けておいて、つぎに逆方向から開けないと失敗するようである。一方からだと穴が貫通するときに、このように出口のところで欠けてしまうことが多いという。

(16)のように、供給口付近だけくぼみをつくり、まず供給口を開けてしまうという工程は、(10)～(12)のように、供給口をつくるときにひびが入ってしまい失敗するのが多いことを考えると、くぼみを全部彫る作業を省略する分だけ効率的である。

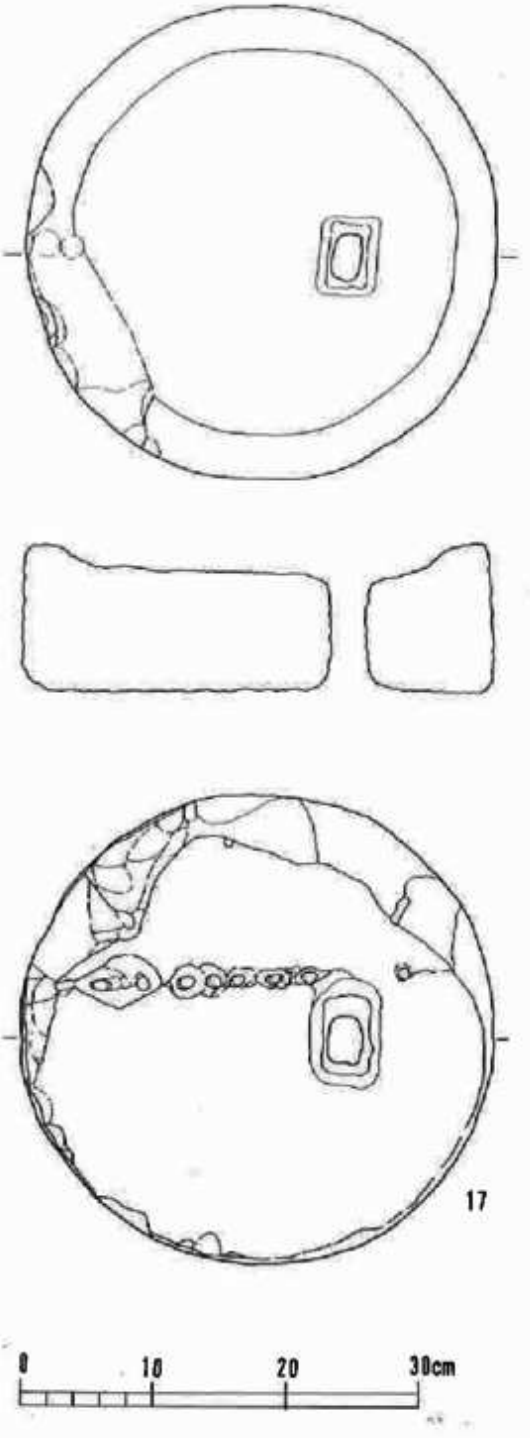
また、(参－ 5)も製作工程のちがいを明らかにあらわす資料なのでここで取り上げたい。

これは、曲谷集落と姉川をはさんで北にある小字向平で、道路工事中にみかけた資料である。直径34.3cm、高さ12.5cm、重さ25.5kgの上臼である。上下、側面ともに荒くノミ跡をのこす。上面は(6)～(8)のように、端からでるノミが皿状のくぼみをつくっている。ふちは約 3.4cm幅で大まかにつくられている。上面に供給口を彫りかけた痕跡はない。下面はほぼ水平にしているものの多くのノミ跡をのこす。注目すべき点は、この面に供給口が彫られはじめていることで、縦横6.4cm×4.0cm、深さ 4.6cmと、ほぼ中央まで彫りくぼめられている。穴の底は中央が盛り上がってのこっている。この作業中にひびがはいったことにより放棄されたものと考えられる。



（『佐渡の石臼』より）

第30図　出土遺物実測図



第31図　出土遺物実測図

臼面を仕上げる・その他の部分をつくる

上面のくぼみを彫り、下面を平に成形して供給口を完成すると、上臼つくりの山場がすぎたようで、これ以後の工程を示す資料は少なくなる。

臼面を仕上げるためには、シアゲタガネ、ヒラノミ、ビシャンなどとよばれる道具が用いられたと考えられるが[19]、今回の資料からの観察では、その痕跡を追うことは不可能であった。

(17)は、臼面の仕上げがすんで、側面の挽き手溝をつくるときに失敗して捨てられたものである。

直径34.7cm、高さ11.4cm、重さ27.5kgで、外形は完成している。ふちの幅は 3.6cmで深さ 1.4cmの非常に浅いくぼみをもつ。中央よりややずれた位置に、 6cm × 4.2cmの供給口があり、まっすぐ下面まで貫通している。供給口と中心をはさんだ対角の隅周辺が欠けていて、その中央付近に挽き手溝の痕跡がのこっている。のこっている上端で幅 3.4cm、奥行き 1cmで、下端までの 3cmがのこっている。上面のふちの端から復元すると 4.2cmの長さの溝になる。おそらく溝を仕上げている途中で、この部分が欠けてしまったものだろう。

下面は供給口と面の仕上げのみできあがっていて、供給口から伸びるもの配り溝や、下臼とつなげる芯棒受けの穴は、まだ手がつけられていない。臼面の仕上げのつぎの工程で、挽き手溝つくりがお

こなわれている。この工程を示す資料は他に５点みられたが、これらをみると、挽き手溝つくりで割れていてもの配り溝や芯棒受けがないものが３点、もの配り溝が完成していて挽き手溝がないものが１点、不明１点となる。この限りでは、失敗しやすい挽き手溝をまずつくり、そのあともの配り溝、芯棒受けの順に仕上げていき、目を立てて完成という工程がうかぶ。また、もの配り溝や芯棒受けつくりの段階での失敗はほとんどなかったのではないだろうか。

なお、(17)の下面にある小穴の列は、２次利用のためにここで割ろうとした矢穴と考えられる。

〔 下 臼 〕

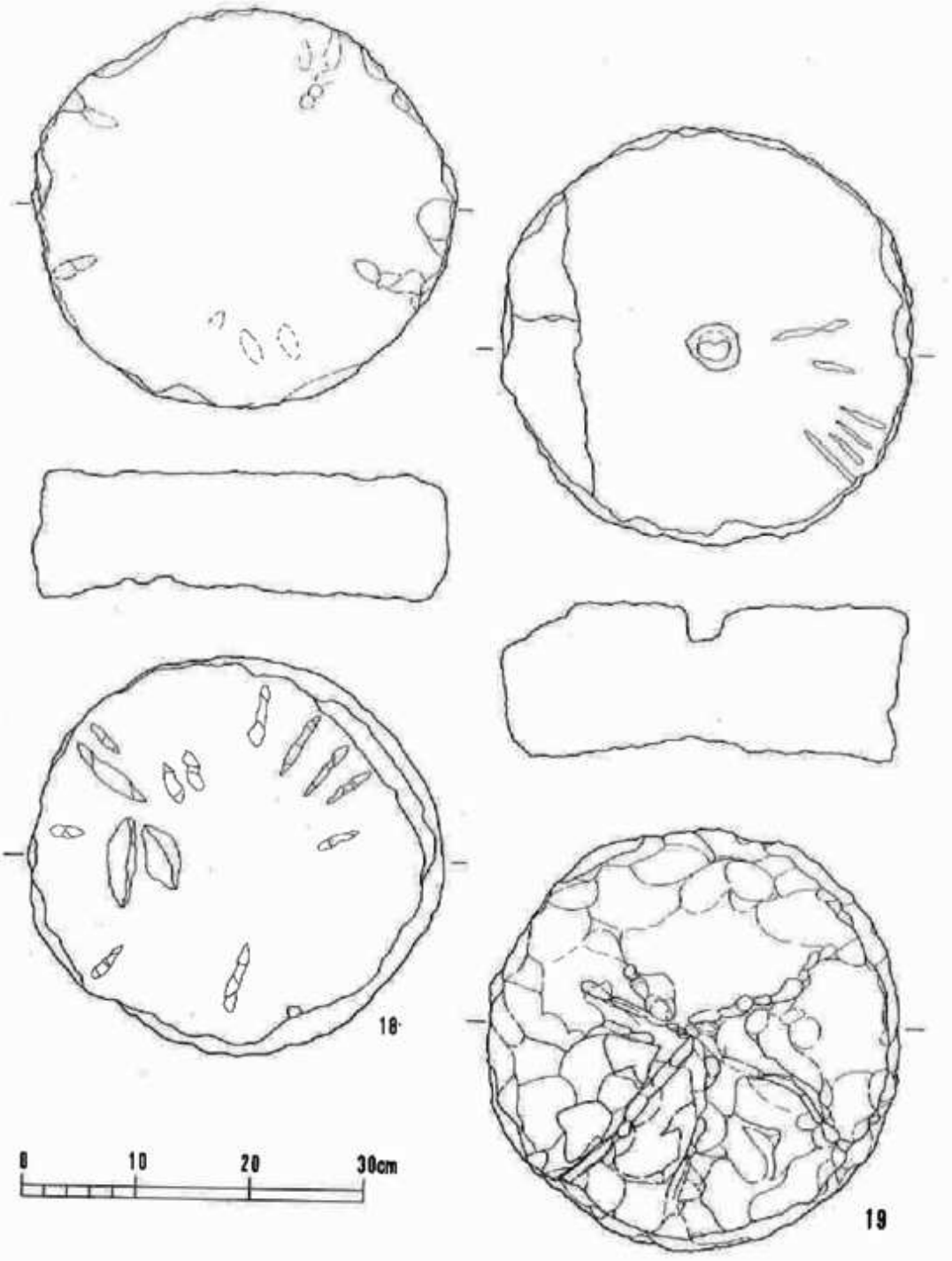
上面を平にする・下面をくぼめる (18)は、石臼石材から下臼をつくる最初の工程で、下臼の上下面それぞれの形をつくりだしたものである。

直径36.6cm、高さ11.1cm、重さ25.6kgで、上面は７本の薄いノミ跡が認められるだけで、ほとんど水平にされている。側面は山での荒どりのままと思われ、まったく成形されていない。下面は外側から中央に向かって放射状にノミ跡が入り、中央をへこめぎみに削っている。完成した下臼の形からみると、今後さらに中央をくぼめていくものと考えられる。側面が欠けたことで放棄されたものと思われる。

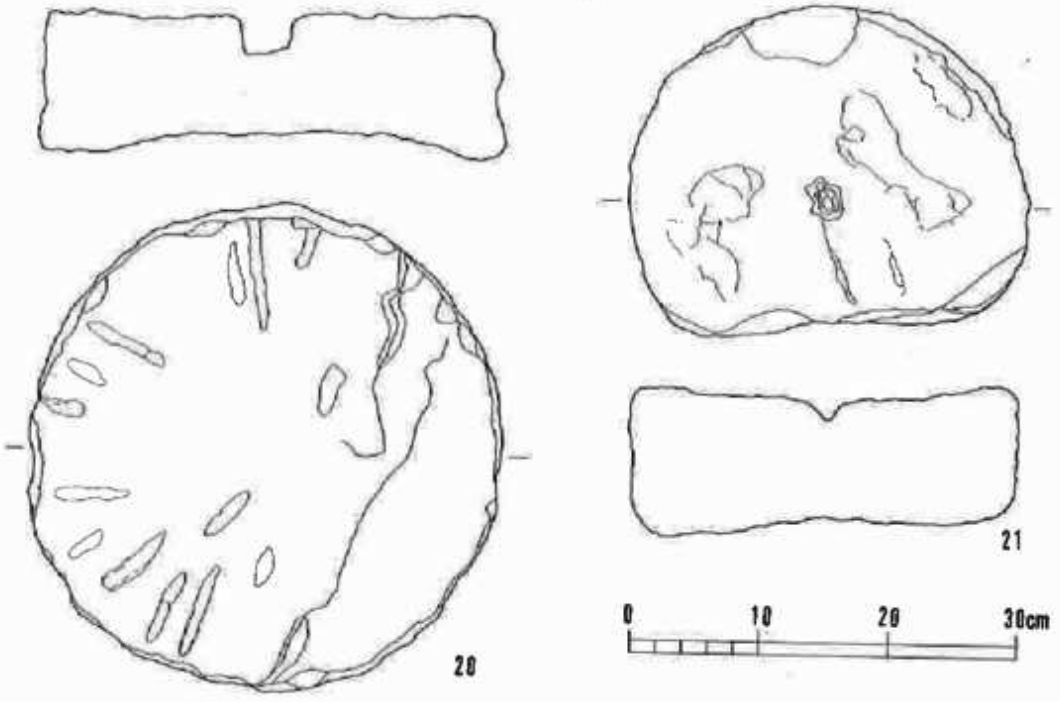
(19)は、上面がやや盛り上がりぎみに平にされ、芯棒穴がすでに上から彫られはじめている資料であるが、下面成形の過程がわかるのでここで取り上げる。直径36.1cm、高さ15.1cm、重さ32.5kg、厚みがあるのは下が未成形のためである。その下面は、図のように10～17cmの長いノミ跡が、端から中心に向かって十字に入る。ノミは何度か止められながら打ち込まれており、ノミとノミの間は盛りあがりをのこす。資料ではこの盛り上がりをさらに欠くノミ跡が確認できる。まず十字に彫って４分割し、さらにそれぞれの分割の中央にノミをいれて８分割する。この要領で石のでっぱりをとっていきくぼみをつくる。(18)の下面の放射状のノミ跡はこの工程でできたものである。

芯棒穴を彫る (19)の芯棒穴は、直径 4cm、深さ 3.6cmまで彫られている。上臼の供給口とおなじように穴の側面にそってノミを打ち込んでいき円形にしている。成形中に上面端部が欠けたことにより放棄された。

(20)は直径36.3cm、高さ11.7cm、重さ27.5kgで、上面はノミ跡がわずかにのこっているものの水平にされていて、中央に直径 4cmの円形の芯棒穴を深さ 3cmまで彫っている。穴の彫り方はやはり外側からで、内部中央が盛り上がってのこる。側面は上下から 3～ 5cm



第32図　出土遺物実測図



第33図　出土遺物実測図

の長さで垂直に削られている。下面は中央をくぼめてに彫っていて荒いノミ跡をのこす。工程でいうと(19)のつぎになる。石にひびが入ったことにより放棄されたか。

(21)は直径30.3cm、高さ11.6cm、重さ15.5kgと小振りな石材で、ノミ跡が少なく表面はローリングを受けたように滑らかになっている。側面下面とも荒いままで、ノミ跡がのこり、下面はややくぼんでいるものの厚さはそろっていない。上面の中央に直径 2cm前後、深さ 2cmの穴が開けられている。おそらく供給口の彫りはじめと考えられるが、今まで上臼の供給口や下臼の芯棒穴でみてきたように穴の外周から彫りはじめているやり方でないところが注目される。一部欠けたことで放棄された。

(22)も全体にローリングを受け粒のない滑らかな表面をしている。直径33.3cm、高さ11.5cm、重さ22.0kgを測る。(21)と同様に上面の中央に一辺 3cm、深さ 5cmの四角錐形のノミ穴がまっすぐ彫られている。図のように下面の中央にも穴が彫られはじめた痕跡があるが、こちらは直径 5cm、深さ 2cmと上面よりも広めに彫られはじめている。周りから打ち込んだ細い２本のノミ跡も確認できる。下面は外から中央へのノミ跡が全面にのこり、くぼみぎみに成形されている。石材にひびが入ったために放棄された。

(23)は直径35.1cm、高さ11.3cm、重さ23.0kgで、上の芯棒穴は直径 4cmの円形で、深さ 2.4cmのところで止められている。図示していないが、穴底は壁面に沿って10ヵ所のノミ先端部の跡が回っていて、中央付近がやや盛り上がってのこす。下面の穴は彫りはじめたところで、周囲から彫ろうとした6本のノミ跡がわかる。下面全体は何本ものノミ跡があるが、端部はほぼ同じ高さになるようにすでに調整されていて座りがよい。完成品をみても下面のノミ跡を完全に消すことに手間をかけていないので、この資料も芯棒穴さえ彫れば下面は完成となる。

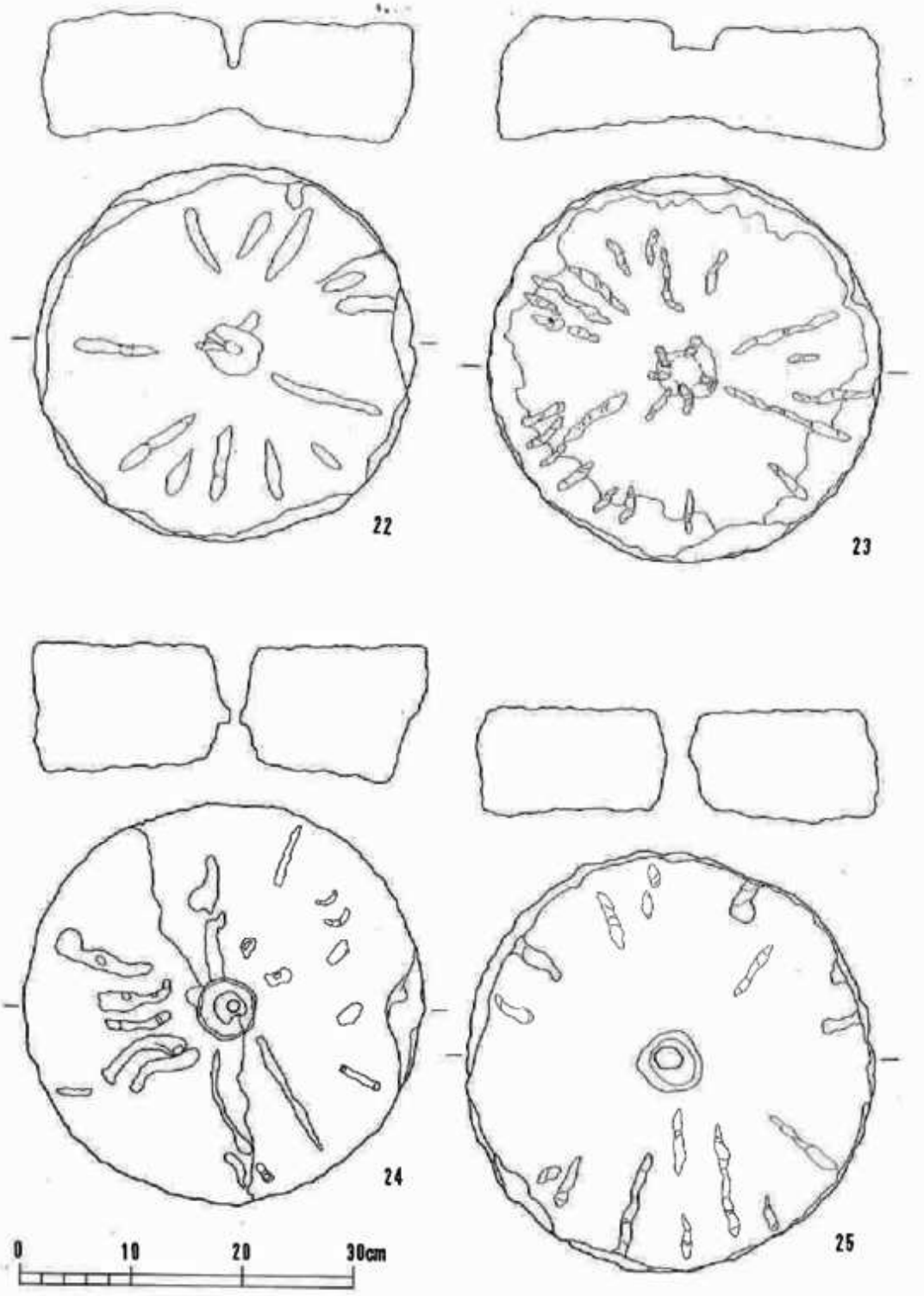
(24)(25)はともに下面の図である。(24)は芯棒穴がわずかに貫通している状態がわかる。上面からの穴はV字形に彫られ、下からの穴はU字形に近い。わずかに貫通している穴は幅 1cm、長さ 1.4cmで上下の穴をつなぐ。この後でっぱり部分を欠いて完成させるものと考えられる。上下側面ともノミ跡が多くのこっていて、穴の貫通まぢかで石材を2分するひびが入り放棄された。

(25)はでっぱりの部分を欠いて完全に貫通させた過程を示す。

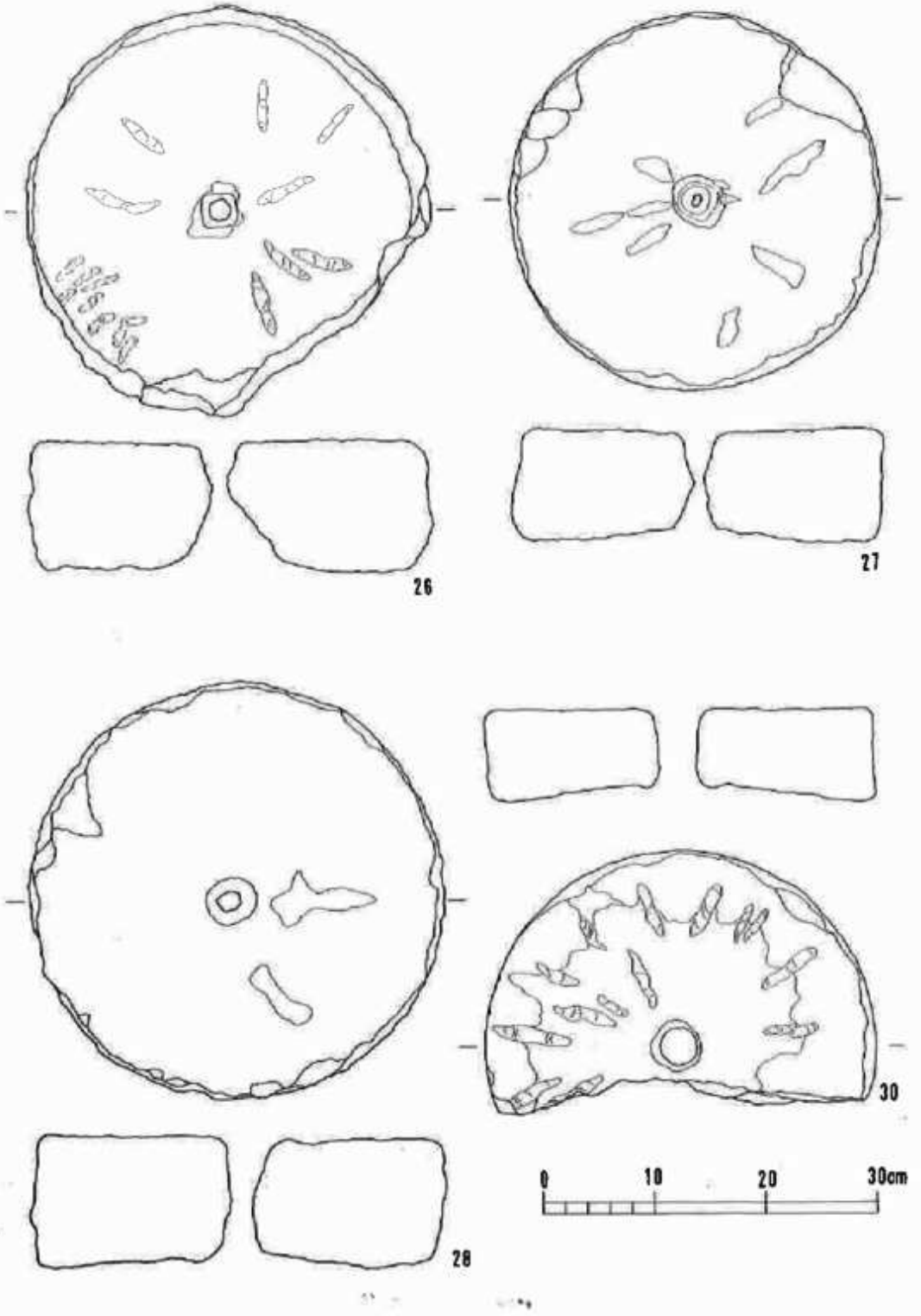
(26)は芯棒穴を完成させたものである。直径36.5cm、高さ12.4cm、重さ26.5kgを計る。上面の芯棒穴は、一辺が 3cmの隅丸方形をしている。この穴は内側へ傾斜して、上から 3.6cmのところで 1.2cmと最も狭まっている。そこから下面にむかっては、「ハ」の字に広がってゆき、下面にでたところで大きく直径10cmの穴になっている。完成品から比べるとやや極端な感じもするが、すでにつぎの段階の臼面の仕上げにかかっていることから、芯棒穴として仕上がっているものとみてよいだろう。

臼面を仕上げる　(26)の上面は、8ヵ所のノミ跡が薄くのこっているものの、ノミ跡を消して表面を水平に滑らかにしたような痕跡もみられることから、臼面の仕上げにはいった資料と考えられる。側面は上から約 4.4cmのところまで垂直に削りとられている。この側面を削る作業では、大ノミ、中ノミ、ビシャン、両刃などの道具が使われたと考えられる。[20] 下面はノミ跡をのこしたままであるが、端部で高さの調整がされており座りはよい。

(27)は直径33.8cm、高さ10.5cm、重さ21kgで、上面はわずかに凸凹があるものの、ノミ跡はほとんど消されている。また、側面もでっぱりがなく垂直に仕上がっている。下面はノミでくぼみぎみに仕上げ、座りもよく作業は終了している。芯棒穴は上下とも直径 4cmの円形で、上から 4.6cmのところが幅 1cmと最も狭くなっている。(26)(27)のように芯棒穴がまん中で狭くなっているのは、上臼の重みで芯棒が下にめりこまないための工夫とも考えられる。



第34図　出土遺物実測図



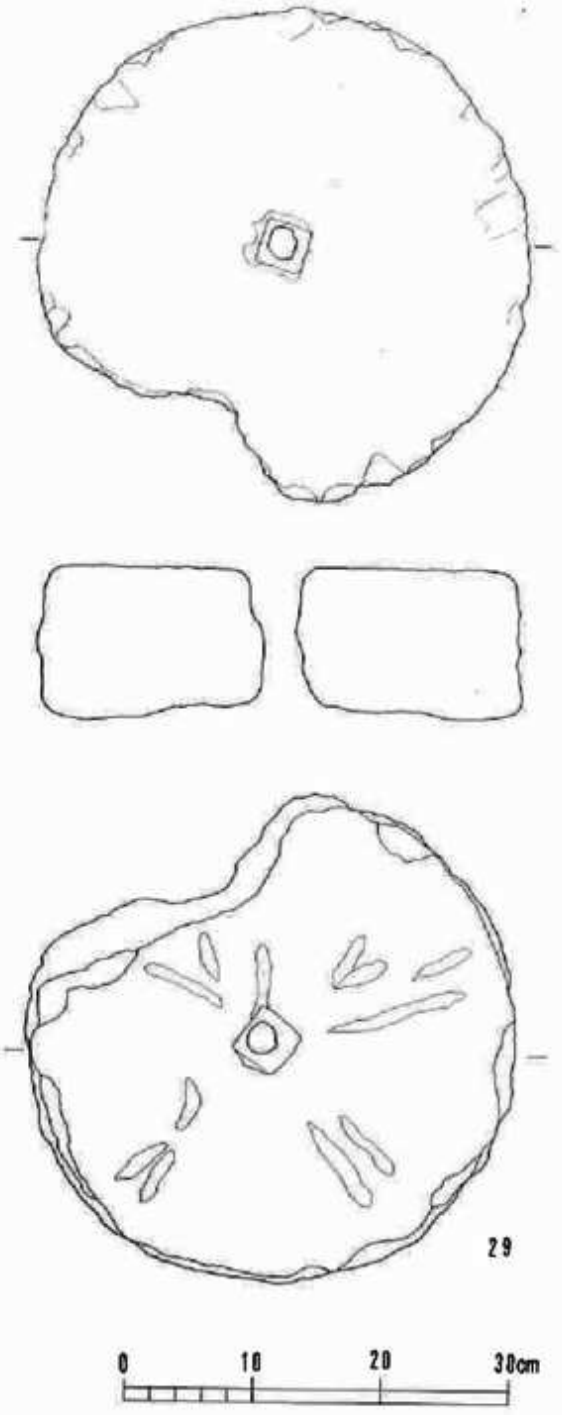
第35図　出土遺物実測図

(28)は直径37.6cm、高さ12.0cm、重さ30kgで、(27)と同じ段階の資料である。上面はわずかなくぼみをのこしてほぼ水平に仕上げられている。側面は中央付近にわずかにでっぱりをのこすものの、上下から垂直に仕上げられている。芯棒穴は上下とも直径 4cmの円形で、上から 6cmはいったところでわずかに狭くなる。

(29)は直径38.0cm、高さ12.0cm、重さ29kgで、上面の仕上げは完成しており、ノミ跡の痕跡をわずかでものこす(27)(28)に比べると、ノミ跡もなく目が刻める段階まで仕上げられている。しかし側面は上下から削ったノミ跡がのこっていて、上面のような仕上がりにはなっていない。下面はくぼみぎみに仕上げられていて、ノミ跡をのこしながらも安定した形にできあがっている。上面の芯棒穴は、一辺が 3.6cmの正方形で、中央付近では丸くなり、下面で再び一辺 4cmの正方形に整えられている。

芯棒穴は(27)(28)のように円形のものと、(26)(29)のように正方形のものの２種類があるが、資料全体からみると円形のものが圧倒的に多い。

(30)は 1/2に割れている資料で、直径35.4cm、高さ 8.4cm、重さ12.5kgを測る。上面と側面は研磨されているように滑らかで、下面もノミ跡をのこすものの地面にふれる外側の部分は滑ら



第36図　出土遺物実測図

かになっている。上面は目が刻まれていないが、高さが他の資料と比べて低く、使い古されて目が消えてしまった資料かもしれない。芯棒穴は直径 4.6cmの円形である。

作業工程　(3)～(30)の資料を検討する課程で、曲谷での石臼作りの作業工程がおおまかに把握できたように思う。

山で原石を切り出し、山の小屋で臼の規格に近いところまで石臼用石材を加工する。この工程ですでに、上臼用か下臼用なのかが決まっていて、下臼用なら下場をくぼめぎみに形作るなどという作業が、意識的におこわれていたと考えられる。

家に持ち帰ってからの工程は概略つぎのようになる。

（上臼）

①上面のくぼみを作る

②供給口を上から途中まで彫る

③下面を平にする

④供給口を下から彫って貫通させる

⑤臼面を仕上げる（上のくぼみを完成する）

⑥挽き手溝を作る

⑦もの配り溝を作る

⑧芯棒受け穴を作る

⑨目を刻む

⑩完成（たがをはめ、挽き木を取り付ける）

（下臼）

①上面を平にする

②下面をくぼめる（ノミ跡をそのままにしてほとんど仕上げる）

③芯棒穴を上から彫る

④芯棒穴を下から彫って貫通させる

⑤上面を仕上げる

⑥側面を仕上げる

⑦目を刻む

⑧完成

ただし、このような工程が必ずしも決まったものでないことはみてきたとおりである。職人や時代のちがい、手にした石の質にあわせた作り方のちがいかもしれないが、もっと大ざっぱに、その時々の気分的なものかもしれない。このあたりに曲谷の石工集団の特徴

が見出せるのではないだろうか。

2　破損状況の分析

いままでみてきた廃棄された石臼は、作業中に生じた破損によって製品にならなかったもので、その破損原因や工程別の廃棄石臼の数を調べることで、曲谷臼の製作作業の一端がみえてこないだろうか。ここでは、本文中に取り上げた資料の他に、世一家にのこる91点の資料を加えて検討していきたい。

表3、4は、本文掲載資料と世一家資料のうち完成品と原石と工程が不明なものを除いた102点を、廃棄された工程ごとに分けてグラフにしたものである。ここでいう工程は、前項の「作業工程」を基準にした。

ただしグラフ化するにあたって、上臼作業工程の①～⑨のうち、①を「成形」、②③を「供給口を上から彫る」、④を「下から彫り貫通させる」、⑤を「臼面を仕上げる」、⑥～⑧を「挽き手溝等をつくる」として５つの項目に分けた。⑨の目を刻む途中の工程はなかった。おなじように、下臼も①②を「成形」、③を「芯棒穴を上から彫る」、④を「下から彫り貫通させる」、⑤⑥を「臼面を仕上げる」の４項目に分け、⑦の目を刻む工程はなかった。

このグラフをみると、上臼・下臼ともに穴を彫る工程で廃棄されることが多いのがわかる。上臼の「供給口を上から彫る」工程と「下から彫り貫通させる」工程を合わせると73.7%となり、下臼では75.5%となる。曲谷では「穴を彫るときに失敗することが多く、７

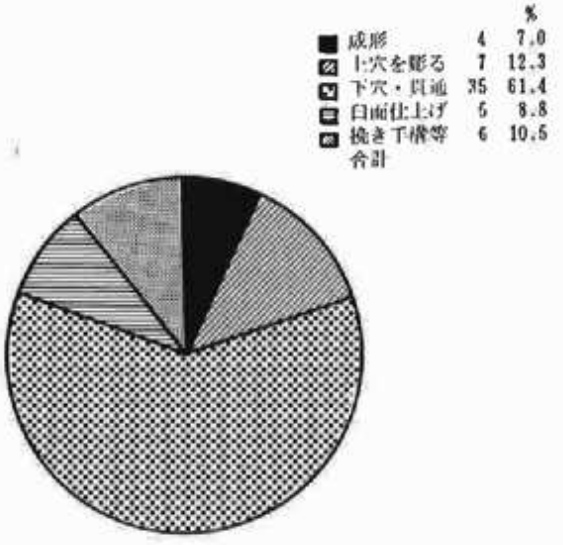


表3　放棄臼工程別構成グラフ(上臼)

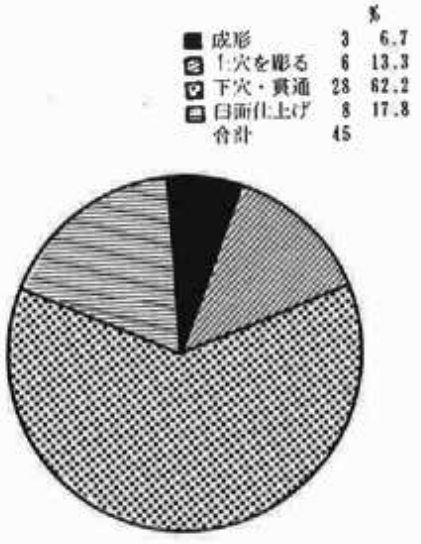


表4　放棄臼工程別構成グラフ（下臼）

個に１個しか成功しなかった。」という話が伝わっている[21]。効率が悪くやや大げさな話に思えるが、廃棄石臼の７割をこえるものが穴を彫る工程で失敗している事実をみるとき、単なる言い伝えでもないように思える。

供給口や芯棒穴があくと一応完成のめどがたったものと考えられるが、上臼では挽き手溝をつくるときに欠けているものが数点あった。また、目を刻む作業で放棄されているものはなくこの段階での失敗はなかったようだ。

それでは、廃棄の原因にはどんなものがあったのか。表５、６は、工程ごとに廃棄原因をあげたものである。ここでは本文で取り上げた(6)～(30)を対象とした。

原因には大きく分けて亀裂・欠損・破損の３つがある。

亀裂は石材に明らかなひびが入ることで、表でみると上臼では供給口、下臼では芯棒穴を彫るときに発生している。佐渡の事例によると、ひびを入れたり割ったりしないためには、穴の底の同じところを何回も叩かないよう気をつけたという。

欠損は、割れてしまったわけではないが石材の端などが欠けることで、ほぼ全ての工程でみられるが、欠けたことによって規格どおりの製品ができないために廃棄されるようだ。判断しにくいものもあるが、(16)のように上から穴を彫るときに下面を欠け落してしまった例や、(17)のように挽き手溝をつくるときに欠いてしまうこともある。

破損は石材の４分の１から半分が欠けてしまうことをいう。表では、成形時と臼面を仕上げるときに破損しているが、世一家にのこる資料では穴を彫るときに多く発生しているようで、上臼の供給口を彫る工程では半分に割れてしまったものが約半数あり、下臼では芯棒穴を貫通させる工程の中で半分に割れたものが３分の２をしめる。

亀裂・破損は穴を彫る工程で多くが発生し、欠損は成形から穴彫り、仕上げまでの全ての工程で発生するようだ。

工程＼原因	亀裂	欠損	破損	不明	合計
成　　形	1	1	1	0	3
上穴を彫る	2	0	0	0	2
下穴・貫通	2	1	0	3	6
臼面仕上げ	0	0	0	0	0
挽き手溝等	0	1	0	0	1
合　　計	5	3	1	3	12

表5　上臼工程別放棄原因

工程＼原因	亀裂	欠損	破損	不明	合計
成　　形	0	1	0	0	1
上穴を彫る	1	2	0	0	3
下穴・貫通	2	1	0	1	4
臼面仕上げ	0	2	3	0	5
合　　計	3	6	3	1	13

表6　下臼工程別放棄原因

3　道具

調査の課程で、世一氏が保管しておられる石臼つくりの道具を見せていただいたので、本項で簡単に紹介したい。

石臼つくりの道具を記録したものには、新潟県羽茂町小泊の石英安山岩製石臼つくりの道具[22]、京都府白川石の石臼つくりの道具[23]、愛知県岡崎市岡崎石の道具の記録[24]がある。また、墓石や鳥居などをつくっていた香川県庵治町の石工道具[25]や大分県国東半島の石工道具[26]、炊事用品や建築材つくった石川県金沢市の石工道具[27]や石垣積みをおこなってきた山口県久賀町の石工道具[28]などがあった。

石加工の技術には、軟石加工技術と花崗岩系の硬石加工技術がある。新潟県小泊・国東半島・金沢が前者にあてはまり、曲谷をはじめ白川石・岡崎石・庵治石・久賀が後者にあてはまる。両者は使用された道具や作業姿勢などに違いがみられるようだ[29]。

写真６は石を運ぶための道具であるが、呼び名はわからない。鉄製でＬ字形に曲がった本体に、４個の鉄輪が鎖状につながれている。本体は長さ約25cm、曲がった部分は約 9.5cmあり、鉄輪はそれぞれ10.2～13.2cmの楕円形で直径は約 1.4cmある。山で切りだした石材の下に曲がった部分をひっかけ、木のてこを輪に通して前に転がして運んだという。他地域の記録の中に同様のものは見当らなかった。

写真７の左は大形ハンマーで、他地域では全てげんのう・玄能（源翁）と呼ばれている。槌は長さ約28cm、一番太いところで幅 7cmある。柄は失われているが、他地域の例でみると、柄のたわみ具合が重要なようで、弾力性のある細い幹が使われている[30]。石を割るときに、ヤ穴にヤを詰め玄能で叩く。

写真７の右はこやすけと呼ばれる道具で、いわば柄付きのノミである。刃先は平たく、写真では柄が失われている。槌は長さ12.6cm、一番太いところで幅 4.2cmある。形をととのえるために、石材の一部を削りとるのにつかわれた。欠き落とす石の部分にのせて、小形のハンマーで叩いた。同様の道具を岡崎でもこやすけと呼ぶが、京都白川石では片刃あるいはこやすけと呼ばれ、庵治ではオシキリと呼ばれている。このようなノミやタガネに柄をつけた道具の使用は、花崗岩系の石工道具の特徴である[31]。

写真８は小形のハンマーである。槌は長さ約 9cm、一番太いところで幅 5.5cmある。柄をいれた長さは21cmである。打撃面は両面ともまくれている。ノミやこやすけなどを叩くのにつかわれたと考えられる。曲谷での呼び名はわからないが、岡崎や庵治でセット・セットウ（石頭）と呼ばれている。

写真９の３点は目たてををする道具である。刃は両面とも平たく幅約 3～ 5cmある。槌の長さはそれぞれ13cm・14cm・21.2cmで柄が直角に接続している。柄をいれた長さは25.2

cm・42.8cm・45.4cmある。曲谷での呼び名はわからないが、京都白川石では両刃と呼ばれ、石の角を取るときや臼面の仕上げや目たてに使用されている。同様の道具を庵治ではタタキと呼ぶ。

写真10はノミである。左から5点は荒ノミ、右端は細工ノミという。荒ノミは断面が丸か四角形で、長さ約13.2～16.3cm、径は 2.3～ 3.4cmを計る。山でヤ穴を彫ったり荒成形をするときや、家で石の面を平にしたり、穴を彫るときに使われたものであろう。1点に「ヨー」の銘がある。細工ノミは断面丸形で長さ14.6cm、径 2cmの細身で、打撃の痕跡はあまりない。穴の最終仕上げや、臼以外で名前などの彫刻を必要とするときに使われたようだ。

以上13点を報告したが、全体のごく一部であり、山仕事、家での仕上げ、運搬あるいは道具鍛冶やたがつくりなど、多くの工程で多彩な道具が使われていただろう。

また、世一氏のように道具を保管しておられる家はまだまだあると思われる。今回の調査をきっかけに、曲谷の重要産業であった石臼つくりの道具を集大成して有形民俗文化財として記録・保管し、先人の生活の証として後世にのこす必要を痛感した。

写真6　石を運ぶ道具

写真7　大形ハンマー・こやすけ

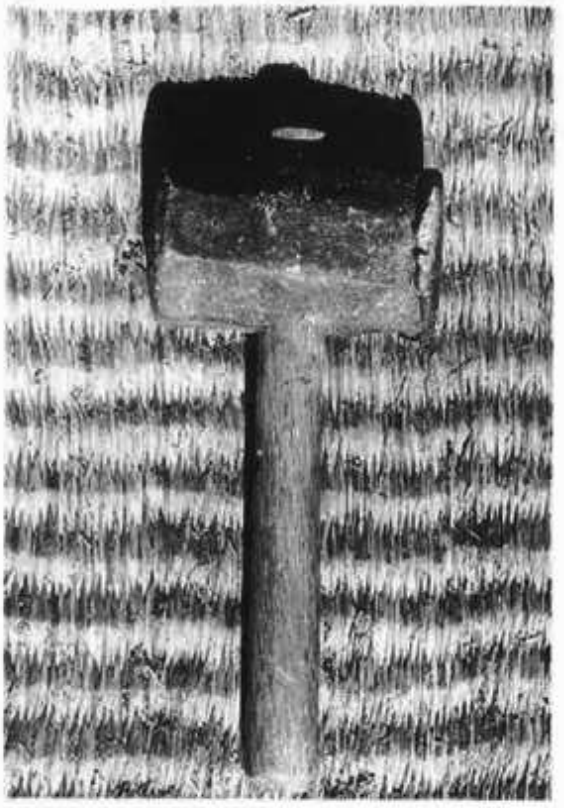


写真8　小形ハンマー

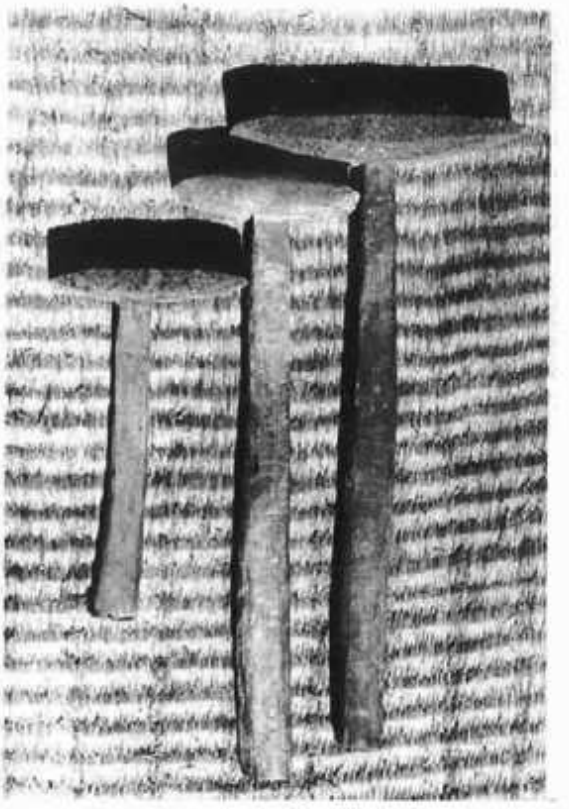


写真9　目立てをする道具

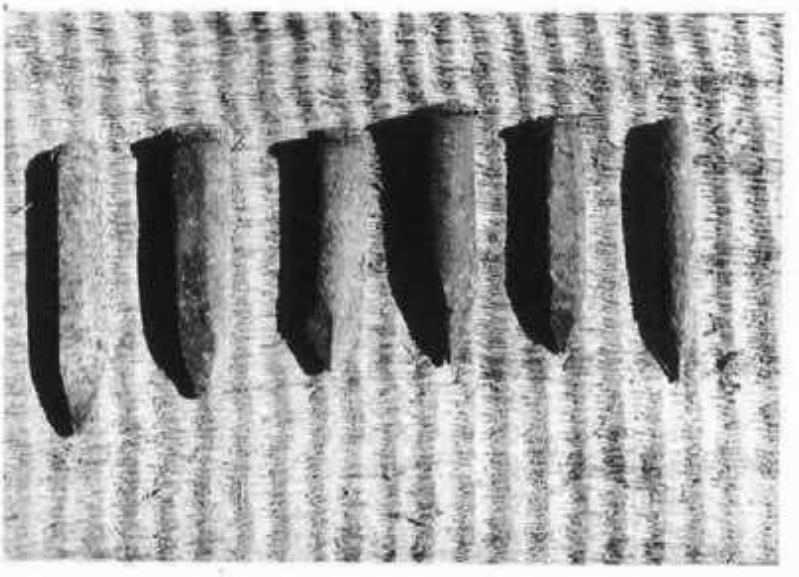


写真10　ノミ類

表７　世一家資料計測値一覧（本文記載分）

No.	区　別	直径(mm)	高さ(mm)	重量(kg)	工　程	摘　　要
1	上　白	355	112	25.0	⑩	完成品
2	下　白	348	117	30.0	⑧	完成品
3	原　石	404	167	45.4	—	
4	原　石	318	147	25.0	—	
5	原　石	315	112	17.5	—	
6	上　白	361	120	26.5	①	
7	上　白	385	130	28.0	①	
8	上　白	344	123	26.0	①	
9	上　白	360	121	27.0	②③	
10	上　白	360	117	26.0	②③	
11	上　白	372	148	33.0	④	
12	上　白	358	130	38.5	④	
13	上　白	367	113	26.5	④	
14	上　白	359	116	30.2	④	
15	上　白	390	162	40.1	④	
16	上　白	370	113	26.0	④	くぼみ未完成
17	上　白	347	114	27.5	⑤⑥	
18	下　白	366	111	25.0	①②	
19	下　白	361	151	32.5	③	
20	下　白	363	117	27.5	③	
21	下　白	303	116	15.5	③	
22	下　白	333	115	22.0	④	
23	下　白	351	113	23.0	④	
24	下　白	356	127	27.5	④	
25	下　白	365	105	26.0	④	
26	下　白	365	124	26.5	⑤⑥	
27	下　白	338	105	21.1	⑥	
28	下　白	376	120	30.0	⑥	
29	下　白	380	120	29.0	⑥	
30	下　白	354	84	12.5	⑥	

表８　世一家資料計測値一覧（本文記載以外）

No.	区　別	直径(mm)	高さ(mm)	重量(kg)	工　程	摘　　要
31	原　石	360	100	25.0	—	
32	原　石	390	90	30.0	—	
33	原　石	360	140	36.0	—	
34	原　石	380	135	30.5	—	
35	原　石	420	125	34.0	—	
36	原　石	390	105	32.0	—	
37	原　石	370	145	42.0	—	
38	原　石	340	115	28.5	—	
39	原　石	310	120	18.0	—	
40	原　石	345	115	(20.0)	—	1/2
41	原　石	350	155	33.0	—	
42	上　白	375	140	31.0	①	
43	上　白	345	100	24.0	③	供給口はまだ

No.	区　別	直径(㎜)	高さ(㎜)	重量(kg)	工　程	摘　　要
44	上　白	365	135	40.0	②	
45	上　白	350	125	(19.5)	②	1/2
46	上　白	350	130	(19.0)	②	1/2
47	上　白	360	130	(17.0)	②	1/2
48	上　白	355	128	33.5	④	
49	上　白	305	100	19.0	④	
50	上　白	360	120	28.0	④	
51	上　白	350	125	29.0	④	
52	上　白	355	125	34.0	④	
53	上　白	355	120	27.0	④	
54	上　白	360	130	30.5	④	
55	上　白	350	130	33.0	④	
56	上　白	360	130	34.5	④	
57	上　白	360	135	(25.0)	④	1/2
58	上　白	355	130	(17.5)	④	1/2
59	上　白	360	125	(21.0)	④	1/2
60	上　白	360	130	(19.0)	④	1/2
61	上　白	365	120	(20.0)	④	1/2
62	上　白	335	110	(15.5)	④	1/2
63	上　白	360	105	28.7	④	
64	上　白	360	125	31.5	④	
65	上　白	355	110	28.0	④	
66	上　白	365	125	31.5	④	
67	上　白	370	125	32.0	④	
68	上　白	355	120	30.0	④	
69	上　白	355	120	(25.0)	④	1/2
70	上　白	360	120	(16.5)	④	1/2
71	上　白	350	125	(20.0)	④	1/3
72	上　白	360	130	(16.0)	④	1/2
73	上　白	355	120	(20.0)	④	1/2
74	上　白	365	120	(22.0)	④	1/2
75	上　白	340	110	(17.0)	④	1/2
76	上　白	350	120	(18.0)	④	1/2
77	上　白	370	140	37.0	⑤	
78	上　白	345	120	(20.5)	⑤	1/2
79	上　白	360	125	(20.0)	⑤	1/2
80	上　白	350	115	(18.0)	⑤	1/2
81	上　白	350	120	(17.5)	⑤	1/2
82	上　白	345	110	25.0	⑦	もの配り溝完成・挽き手溝なし
83	上　白	350	115	28.0	⑥	
84	上　白	355	120	(26.0)	⑥	1/2挽き手溝で割れる・もの配り溝なし
85	上　白	365	125	(25.5)	⑥	挽き手溝で割れる・もの配り溝なし
86	上　白	360	125	(31.0)	⑥	挽き手溝で割れる・もの配り溝なし
87	上　白	345	105	22.0	⑩	完成品・8分酒
88	下　白	340	105	22.5	①②	
89	下　白	350	105	(26.5)	①②	

No.	区　別	直径(㎜)	高さ(㎜)	重量(kg)	工　程	摘　　要
90	下　白	345	120	(23.0)	③	1/2
91	下　白	350	120	(18.0)	③	1/2
92	下　白	340	100	(17.0)	③	1/2
93	下　白	350	110	26.5	④	
94	下　白	369	133	27.0	④	
95	下　白	325	105	25.0	④	
96	下　白	340	115	(21.5)	④	1/2
97	下　白	360	105	(14.0)	④	1/2
98	下　白	335	120	(18.5)	④	1/2
99	下　白	360	120	(20.5)	④	1/2
100	下　白	345	115	(18.5)	④	1/2
101	下　白	335	105	(15.0)	④	1/2
102	下　白	350	110	(14.0)	④	1/2
103	下　白	360	110	28.5	④	
104	下　白	365	120	33.5	④	
105	下　白	340	100	24.0	④	
106	下　白	330	115	(24.0)	④	
107	下　白	350	110	(13.5)	④	1/2
108	下　白	360	105	(13.0)	④	1/2
109	下　白	340	95	(14.5)	④	1/2
110	下　白	340	120	(17.0)	④	1/2
111	下　白	350	100	(18.0)	④	1/2
112	下　白	330	110	(18.0)	④	1/2
113	下　白	350	105	(17.0)	④	1/2
114	下　白	340	105	(17.0)	④	1/2
115	下　白	360	115	(17.0)	④	1/2
116	下　白	345	110	(17.5)	④	1/2
117	下　白	355	95	(20.0)	⑤	
118	下　白	360	100	(16.5)	⑥	1/2
119	下　白	345	105	(16.0)	⑥	1/3
120	不　明	349	127	27.5	―	
121	不　明	353	116	22.5	―	

★工程は 63ページ参照

第３節　遺跡出土の曲谷臼

ここでは、曲谷臼の分布範囲内にあたる滋賀県湖北地方と岐阜県西濃地方にある２つの中世城郭から出土した石臼について検討したい。

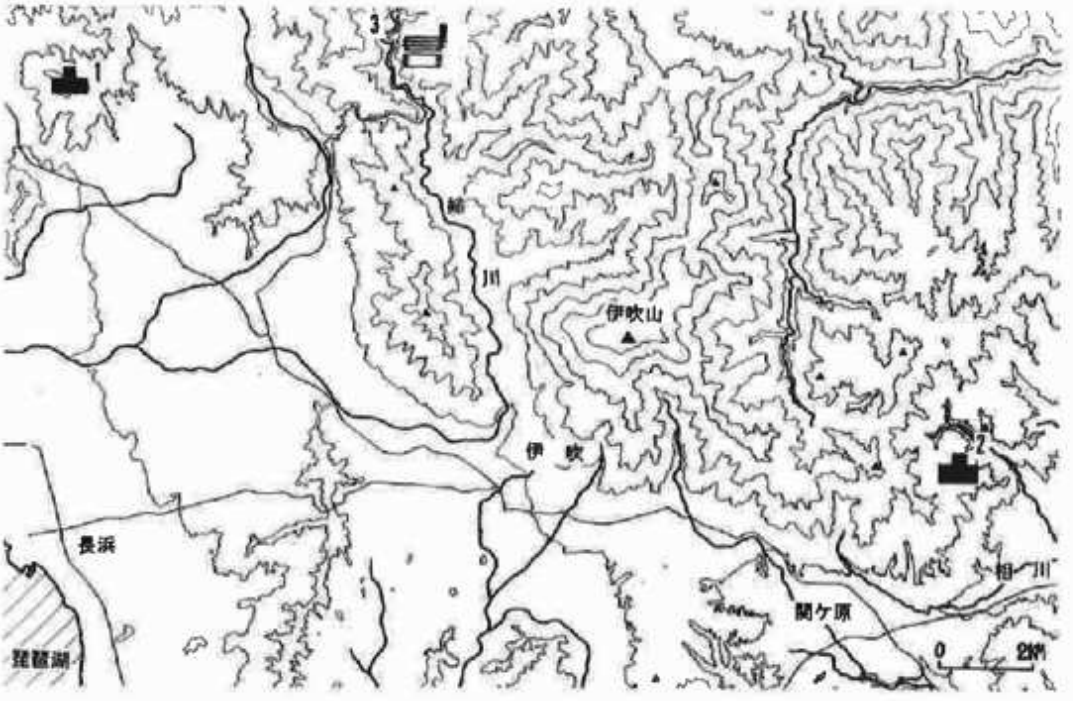
１　小谷城跡（滋賀県東浅井郡湖北町）

〔小谷城の概要〕

小谷城は、湖北地方（県北部）を領していた京極氏の一被官から身を起して、戦国大名となった浅井亮政が築城し、以来久政・長政と三代にわたる居城となる。

城の築かれている小谷山は、長浜平野の北東隅に突き出した伊吹山系の１支脈で、背後に伊吹山系の深い山々を控え、前面には雲雀山などの小丘を配し自然の要害をなす。城のつくりは、最頂部の大嶽から南東および南西に馬蹄形にのびる尾根上の要所に曲輪を配している。特に南東の尾根上には出丸・金吾丸・番所・御馬屋・桜馬場・大広間・本丸と続き、さらにその奥へ、中丸・京極丸・小丸・山王丸と、階段上に曲輪を並べ、大嶽の城に連絡する。この両尾根にはさまれた清水谷には御屋敷とよばれる居館がある。このように小谷城は全国でも屈指の規模をもつ中世城郭であるといわれる。

小谷城は一般に大永四年（1524）の築城とされている。この年亮政は、湖北の国人層の



第37図　遺跡位置図（1．小谷城 2.菩提山城 3．曲谷）

盟主であった浅見貞則を打倒して、京極高清・高延父子を擁し、湖北支配の一歩を踏みだした。この当時の小谷城は、最も高い標高 495.1mの大嶽に築かれていた可能性が指摘されている。以後六角氏とたびたび戦い、天文三年（1534）には京極高清・高延父子を供応して、その経済力を誇示している様子が『天文三年浅井備前守宿所饗応記』にみえる。おそらくこの時期には清水谷の居館をふくめて、城郭としての体裁をほぼ整えていたことがわかる。二代久政のときには一時江南の六角氏に服従するが、永禄三年（1560）、家督を長政（当時賢政）に譲り小丸に隠居した。織田家と婚姻関係を結んだ長政は、湖北を中心に、湖西や中郡まで勢力を拡大した。また、この時期に城の改修などもおこなわれているのではないかと推測されている。

元亀元年（1570）四月、越前朝倉を攻める織田信長に反旗を翻し、続く六月二八日に姉川の合戦で敗れたものの城は落ちなかった。元亀二年（1572）に一進一退の攻防ののち、天正元年（1573）八月二八日に浅井長政が自刃して浅井氏は滅亡した。落城後羽柴秀吉が入城したが、天正三、四年頃、湖畔の今浜（長浜）に居城を築いて小谷城は廃城となった。[32]

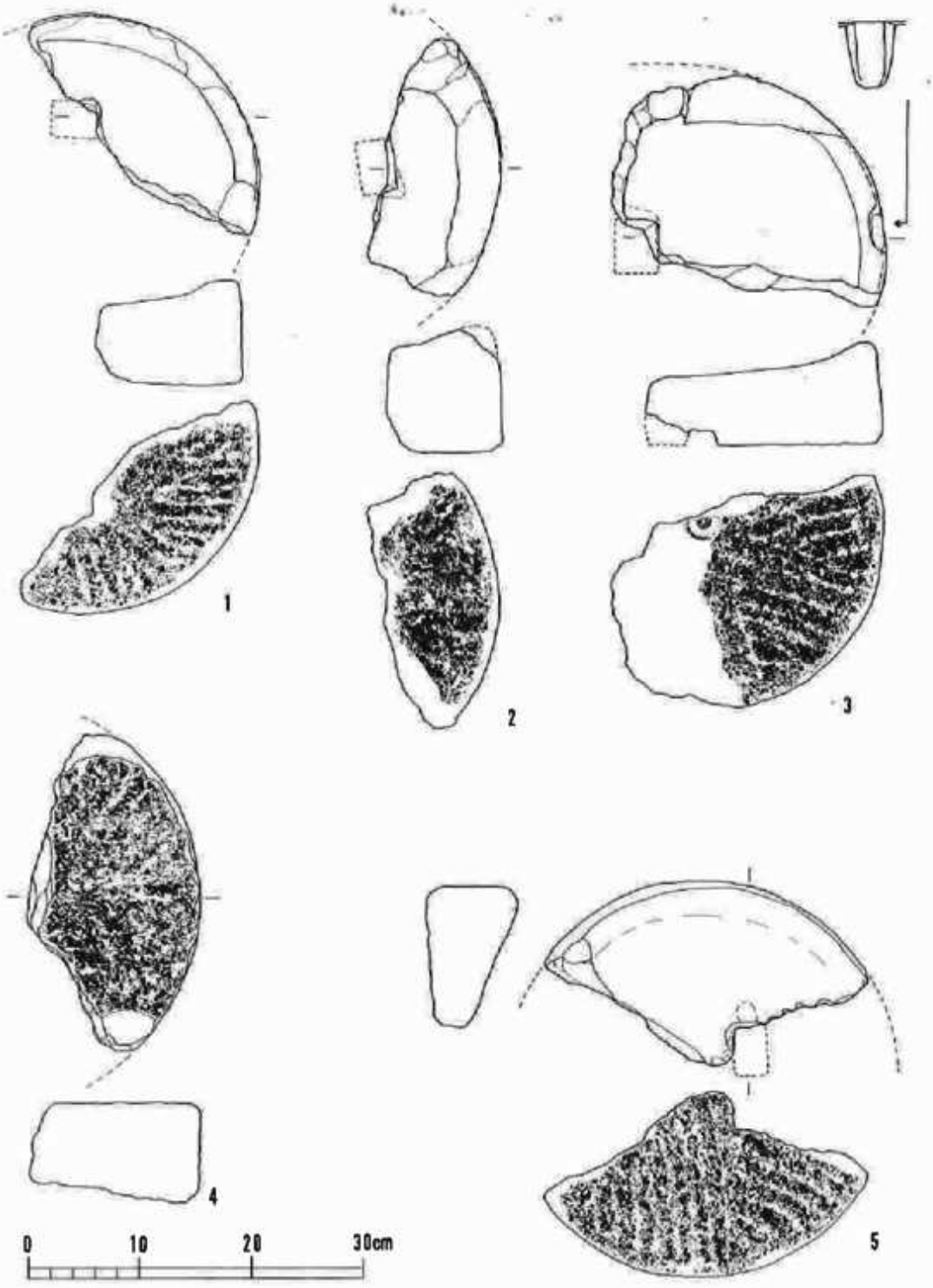
〔出土石臼について〕

1970年から75年にかけて、湖北町によって小谷城の山城部分の整備事業および事前発掘調査がおこなわれ、戦国時代の城郭の実態を示す重要な遺構や遺物が発見された。これらは『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』（1976）[33]や『史跡小谷城』（1988）において詳細に報告されている。ここでは、これら報告書を参考にしながら、小谷城跡出土の石臼について検討していきたい。

(1)～(4)は、今回湖北町教育委員会のご好意を得て実測させていただいた、小谷城出土の石臼である。

(1)は上臼で約３分の２を欠いている。復元したときの直径は約31.5cmになる。外側の高さは 9.2cmで、中心部付近の高さは 7.2cmを計る。上面は 2.3cm前後の幅のせまいふちをもち、そこから傾斜して浅い皿状のくぼみをつくっている。くぼみの深さはのこっているところで約 2cmである。また、供給口の４分の１くらいがのこっていて、直角をはさむ二辺は、約 2cmづつをのこして欠けている。おそらく長方形の供給口があったものと考えられる。供給口の断面は、入り口からせばまりながら傾斜して 4cmのところで最もせまくなり、そこから下面にいたるにしたがってまた広くなっている。下面の目はわかりにくいが、８分画で副溝を６本前後もつようにみえる。『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』の写真図版71と72図として掲載されている京極丸出土の石臼に該当する。

(2)は(1)よりもさらに大きく欠けている上臼で、復元した直径は36cm前後で、外側の



第38図　出土遺物実測図(1～4小谷城跡, 5菩提山城跡)

高さは約11cm以上である。ふちは全て欠けていて幅、高さともわからないが、くぼみは浅い皿状をなす。長方形と考えられる供給口の４分の１が認められ、二辺の一部の 4.8cmと 1.5cm分がのこっている。供給口の断面は、(1)同様に上から 5.4cm下がったところで最もせまくなり、そこからまた広くなる。下面の目は、おそらく８分画で４本以上の副溝をもつ。

(3)は、全体の３分の１以上がのこっている。復元した直径は約32.5cmで、外側の高さは 9cm、中央付近では 6.2cmを計る。ふちは幅約 2.2cmで、そこから浅く傾斜して皿状のくぼみをつくる。中心からややはずれたところに長方形の供給口の一部が認められる。二辺の 3cmづつがのこっている。供給口の断面は下部が欠けているためにわからないが、(1)(2)同様に中央部がせまくなっている。供給口の対角に挽き手溝がのこっている。上端が 4.4cm、下端が 2.6cmの台形をしていて、上端の奥行きは 1.2cmである。挽き手溝があることから、この臼が竹たが締め式の臼であったことがわかる。下面はほぼ水平で、中央に直径約 3cm、深さ 1.3cmの芯棒受け穴がある。鉄さびが付着していることから金具が取り付けられていたことがわかる。下面の目は他の資料に比べると明瞭で、８分画６～７溝式である。

(4)は３分の２が欠けているが、下臼と考えられる。復元した直径は36.8cmで、外側の高さは 9cm、内側は 7.3cmを計る。上面の溝は極めて不明瞭ながら、８区画で７前後の副溝があったようだ。下面は端部からすぐに、ゆるやかにまっすぐくぼんでいる。表面はノミ跡のようなものもがのこっていて、下臼下面の特徴をあらわす。『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』（1976）の写真図版の73図の馬洗池出土の石臼に該当すると考えられる。報告では上臼とされているが、このくぼみを上臼の上面とするには、明瞭なふちがなく皿状にくぼんでいない点や、臼の重要な要素である皿状くぼみとするにはつくりが雑な点などから、やはり下臼下面とするのが妥当であろう。

『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』では、大広間跡・桜馬場下・馬洗池・京極丸から各１点ずつ石臼の出土が報告されている。大広間跡出土の石臼は、半円形で直径34cm、外側の高さ10cm、中央部で 8.5cmのもので、この計測値からも写真図版からみても、(1)～(4)に該当するものはなかった。上臼とされているが、中心に穴があることや、上面が荒い削り方で周縁から中心の穴に傾斜してことなど、下臼下面の可能性も考えられる。

その他、桜馬場下出土のものは一覧表に掲載しているのみで、記録と写真がないのでわからないが(2)か(3)が該当するものと思われる。

以上、小谷城出土の石臼資料を検討した。その結果、

①上臼上面のくぼみが浅い皿状をしている。

②供給口が長方形をしており、穴は入口から傾斜して中央付近でせまくなっている。
③直径は31.5～36.8cm、外側の高さは9～11cmである。
④上臼側面に挽き手溝があり、もとは竹たが締め式であったことがわかる。
⑤臼の目は８分画である。
などの特徴がみられた。また、石材は全て花崗岩であり、実測したものの中には曲谷臼特有の黒雲母の配列が観察できるものがあった。

石質や①②は、曲谷臼の決定的な特徴である。その他の特徴も曲谷臼がもつものである。このことから、小谷城出土の石臼を曲谷産と判断することができる。[34]

ちなみに、曲谷から小谷城跡への直線距離は約８kmである。七曲峠を越えて北国脇往還に入り、小谷城下にいたる行程が考えられる。

2　菩提山城跡（岐阜県不破郡垂井町）

〔菩提山城の概要〕

菩提山は、岐阜県の西端に位置し、伊吹山地に属している。主峰・伊吹山の東南にある明神山の尾根続きに立地している。標高は 401.1mである。岩手川・久保川にはさまれた要害で、山頂からは濃尾平野が眺望できる。

菩提山城がいつ築かれたのかは明らかではない。天文十三年（1544）に土岐頼芸が岩手四郎にあてた書状の中に「菩提山城之儀」云々とあり、菩提山麓の漆原を本拠としていた岩手氏が菩提山に砦を築いていたようだ。永禄元年（1558）竹中遠江守重元が岩手氏を攻め滅ぼし、翌年菩提山に築城したことが、『美濃明細記』等にみえる。

重元の子は有名な竹中半兵衛重治で、菩提山城を本拠としていた。永禄七年に斎藤氏の稲葉山城を奪い、この際、織田信長から稲葉山城の譲渡を乞われたが、これを固辞して、主君・竜興を迎え入れて、自身は浅井家の食客となった。その子重門は、重治が没した天正七年（1579）に菩提山城を下り、山麓の岩手に館をつくる。

城は本曲輪・二の曲輪・三の曲輪・出曲輪が尾根上に並び、台所曲輪・大手曲輪・西の曲輪他の削平地が取り巻く。

1980年に測量調査がおこなわれ、詳細な報告がされている。[35]

〔出土石臼について〕

(5)は1978年に台所曲輪で採集された石臼である。台所曲輪のいわれについて不明であるが、北隣に「倉蔵」と伝えられている削平地があり、東下方には水の手がある。報告書では、台所曲輪を中心とする地域を補給の曲輪と位置づけているが、このようなところか

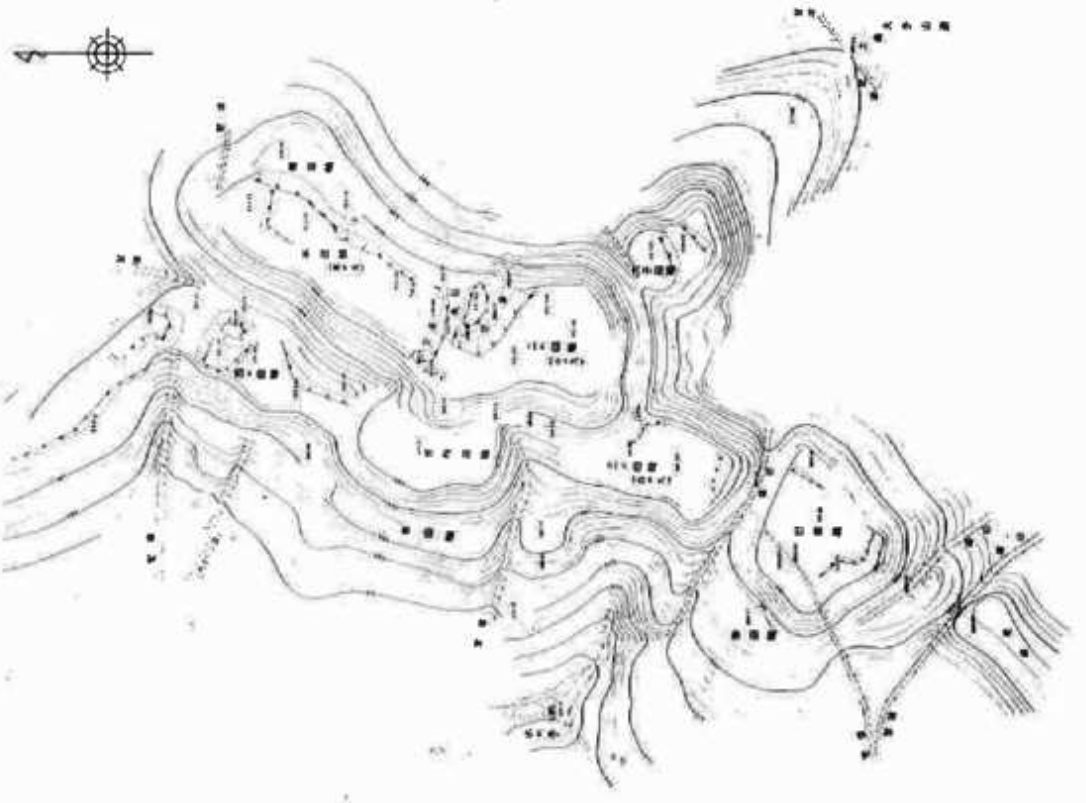
らの石臼の出土は、各地の城跡から出土する石臼の機能を考えるうえで貴重である。

この石臼については、すでに三輪氏が調査をされており、曲谷臼であると確認されている。[36] 今回、垂井町の岩手菁莪記念館のご好意を得て、実測ならびに写真撮影をさせていただいた。

(5)は上臼で約3分の2を欠いている。復元したときの直径は約35.6cmである。だいぶ使い古されているようで、のこっている部分のふちの高さは、一端が約6.5cm、もう片方が9.3cmと傾いている。中央付近は 3cm弱の厚みしかない。くぼみはほとんど段のない皿状をしていて、深さは約 3cmである。供給口の4分の1がのこっている。風化がはげしいが、隅丸長方形の供給口と考えられる。のこっている直角をはさむ二辺は、約 2.5cmと 2cmずつをのこし欠けている。下面の目は薄くのこっていて、8分画で7条前後の副溝をもっている。また、円形の芯棒受け穴がわずかに確認できる。深さはのこっているところで約 1.2cmを測る。石質は花崗岩で、曲谷臼独特の黒雲母の帯状の配列も一部みられた。

大きさ、石の質、長方形の供給口、上面の皿状くぼみなど、曲谷臼の特長をそなえている。

曲谷から菩提山城跡までは、直線距離で約17.2kmである。



第39図　菩提山城跡縄張図

第4章 ま　と　め

曲谷の集落のあちこちでみかける石臼が、そのむかしの石工の村としての活気を物語っている。これらの遺品とともに、いい伝えの中で生きてきた曲谷産石臼に、考古学的に光をあてて、もっと曲谷臼に接近しようと試みたのが今回の調査である。

今回利用した資料は、おそらく近世末から近代にかけてのものと考えている。

製作工程について放棄された石臼から復元したが、他の地域の臼つくりの工程とそれほど変わった部分はなく、今回の調査ではわからなかった詳細な部分は、他地域の臼つくりを参考に復元したらよいと思う。その中で、穴を彫るための苦労が、今回の調査で手にとるようにわかった。製作工程の復元は、今後、集落内にのこされている道具や、山中の石切場の調査を合わせて検討していかなくてはならない課題である。

曲谷での石材加工は、集落内にのこる遺品からみるかぎり、鎌倉時代末期頃にはじまったと考えられる。その後、各時代の需要に応じた石造物を継続してつくりつづけてきた。その中で、今回注目した石臼は、戦国時代にはすでに生産がはじめられていたことが、小谷城跡や菩提山城跡から出土した曲谷臼によって確認できた。1570年代には、すでに今日の形とほとんど変わらない竹たが締め式の石臼が、湖北地方や西美濃地方に出荷されていたのである。

特に小谷城では、臼以外の石製品がほとんど越前石（笏谷石）でつくられており、1970～75年の発掘調査では、行火・桶形製品やつぼなどの越前石の加工品が合計約28点出土している[37]。このころ越前石でも石臼がつくられていることが、越前の一乗谷朝倉氏遺跡で出土していることからわかっている[38]。石臼以外の製品は圧倒的に越前から運び込まれているのに、石臼だけは越前石のものを使わず、在地の曲谷臼を使っているのである。これは、小谷城以前から、曲谷臼がこの地域で利用され、名の知られた産地であったために、引き続き使用されたものと考えられないだろうか。

今後も、滋賀県や岐阜県で中世遺跡の発掘調査がおこなわれるであろうが、そこから出土する石臼の中に、曲谷臼の資料も含まれるだろう。これらを検討することで、ベールに包まれた、曲谷臼の生産と交流が浮かび上がってくるのではないだろうか。

曲谷の石工集団がどのような活躍をしてきたのか。その一端を紹介してまとめにかえたいと思う。集落内に石工に関する古文書はほとんどないようなので、直接の文献資料からのアプローチはできないが、他地域の資料を参考に推測していきたいと思う。

現在の滋賀県近江八幡市に、「岩倉・長福寺両石屋衆」又は「馬淵村石切衆」とよばれた石工職人達がいた。彼らは両集落の背後にある岩倉山に産する良質の花崗岩を切り出して加工していた。ここに、天正十一年（1583）を最古とする文書が保存されている。[39] その中の天正十一年と考えられる文書には、「當村之者供、從前々取候て石うすをきり申之由候」とあり、以前から石臼つくりに従事してきたことが読み取れる。また、『信長公記』では、天正七年（1579）に安土築城に参加しているのがわかる。天正十一年九月九日、秀吉は直轄領の代官名で、「江洲諸職人」あてに諸役賦課を免許するから、大阪城の築城に参加する旨の指令書を出しており、岩倉の石工も参加している。その後、聚楽第の工事にも参加しており、方広寺大仏殿と三条大橋の造築にも、「江洲　伊賀、和泉、津國（摂津）並びに京廻の石切」に諸役免許のうえ、動員を要請され参加している。江戸時代になっても、慶長十年（1605）江戸城の作事等に関係している。岩倉の石工は、中世から近世に時代が移る中で、城郭や寺院の築造に参加し、組織的にも技術的にも成長していったものと考えられる。

これらの石工文書とは別に、岩倉の中村家にのこる文書の中に曲谷の石工からの書状があったという話を聞いた。その内容は、「日光の宮様」の仕事に、岩倉の石工と曲谷の石工が一緒にいった。その時家康公からいただいた書状が岩倉にあずけてあるので返してほしい。という内容であったという。[40] 実際の文書の内容がわからないのは残念だが、日光の宮様とは東照宮のことと考えられ、江戸時代の早い時期に曲谷と岩倉の石工に交流があり、曲谷の石工が関東に仕事にいっていることがわかる。

先にもみてきたように、曲谷は古くから、湖北における石造物や石臼の有力な産地として知られていた。岩倉との交流や、東照宮の作事への参加などを考えると、大阪築城に際して出された「江洲諸職人」あて文書や、三条大橋構築の際の「江洲　伊賀、和泉、津國（摂津）並びに京廻の石切」のような内容の文書が、曲谷の石工集団にも出され、事業に参加しているのではないだろうか。その中で、曲谷の石工もまた、石工仲間として組織化され、他地域の技術と交流することでレベルアップしていったのではないだろうか。

江戸時代の曲谷石工の生活はよくわからないが、農閑期に石材加工をおこなっていたと伝えられている。このことが、地域は違うが、大阪府の阪南丘陵にあるミノバ石切場跡の発掘調査で明らかにされている。[41] ここでは、和泉砂岩を切り出して石臼などを生産しており、報告書によると、17世紀後半から18世紀の和泉砂岩の採石壙内で、採石に伴う礫層の間に風化した砂層が堆積しており、この堆積した期間に、一時作業が中断されていることがわかった。これを報告書では、石工の活動が、冬期と農閑期に集中しておこなわれた結果と推定している。今後、石切場の調査によって、生活のサイクルが明らかになることを

期待したい。

ではこの時代、石臼つくり以外に、曲谷の石工はどのような仕事を手がけていたのだろうか。このことをうかがわせる文書が、伊吹山地をはさんで隣あう岐阜県揖斐郡春日村下ヶ流にのこされているので紹介したい。享保十年（1725）に出された「乍恐奉願上口書之覚」という文書で、粕川の流域にある道の難所の修復工事を願い出たものである[42]。長文のため全文掲載しないが、この中に「ー前略ー　又ハ五日十日出水之時分川渡リ相叶不申、塩味噌等之賄迄得不仕困窮之御百姓共必至之迷惑仕候、それゆへ少々金子を出シ自由ニ通路仕候様ニ、石かべ切ぬき石たゝミ等仕、道形付可申哉と曲谷石切共ニ相談仕候へは、金子五拾両計出シ、瀧村東ニ水かゝへのはね石籠三ツかさね程ニいのこにつなき、三ヶ所計仕候ハヽ、力次第之背屈仕、三十年も留道成申様ニ請取道付相渡シ可申と申候へ共　ー以下略ー」という個所がある。要するに、この難所が何度修復しても洪水などで押し流され、住民や通行人が災難にあっているので、少々お金がかかっても安全な往来ができる道にしてほしいと希望している内容である。その際の工事方法を曲谷の石工に相談した結果、「水かゝへのはね石籠三ツかさね程ニいのこにつなき、三ヶ所計仕」と、斜面に激突する水流をゆるめ、急斜面の侵食を防ぐ工法を提案し、それには五十両もの大金がかかるといっている、というものである。この文書から、曲谷の石工が国見峠を越えて、春日村内で「石たたみ」（石垣か）を作ったり、道路の修理などにあたっていることがうかがえる。単に石臼の流通だけでなく、石工の移動も頻繁におこなわれていたのであろう。

また、この時代には、伊吹町春照の秋葉神社の石室に名をのこす「木曽政衛門義政」のように、他地域にでて仕事をする彫刻工がいたこともわかっている。

以上、第２章第３節とも重複したが、これらの資料から、曲谷の石工集団がおぼろげながらわれわれの目の前に姿をあらわしてきたのではないだろうか。

時間の制約から、充分な聞き取りもせずにまとめてしまった。大方のご教示、ご叱正を乞うものである。

《石臼の値段》

曲谷臼がいくらぐらいしたものか、気になるところです。

近江八幡の岩倉石工文書の中に、萬治三年（1660）、寛文四年（1664）、寛文七年（1667）の石臼の値段を定めた文書があります。それぞれ一尺一寸から一尺四寸までの値段を定めたもので、当時の米相場をもとに今ならいくらになるか計算してみました。例えば寛文七年の石臼の値段は、一尺二寸が五匁、一尺四寸が八匁と定められていて、当時の米相場は一石（約2.4俵）につき銀53.47匁。今の生産者米価を１俵24,500円として計算してみました。

計算式　53.47匁÷2.4俵≒22.3匁

22.3匁：24,500＝石臼の値段(匁)：Ｘ円

これで計算すると、Ｘ＝一尺二寸の石臼が5,493円

一尺四寸では　8,789円となります。

さて、今この値段で買うのなら安いのではと思いますが、当時としては高かつたのでは…。

付　章　滋賀県下出土の石臼

ここでは県内の遺跡で発見された石臼について紹介してみたい。

ただしここでは、下臼に受け皿が付いた、いわゆる茶臼も含めて取り上げた。遺跡から出土する茶臼には、あとで述べる新庄城遺跡で、茶道具とみられる遺物とともに出土した資料のように、茶の湯に使われたと判断できるものもあるが、出土状況や目の粗さなどから、そうと判断できないものもある。例えば、表具師が使う糊臼としての用途も考えられるし、石臼と同様に穀物等の粉砕に利用された可能性もあるからである。[43]

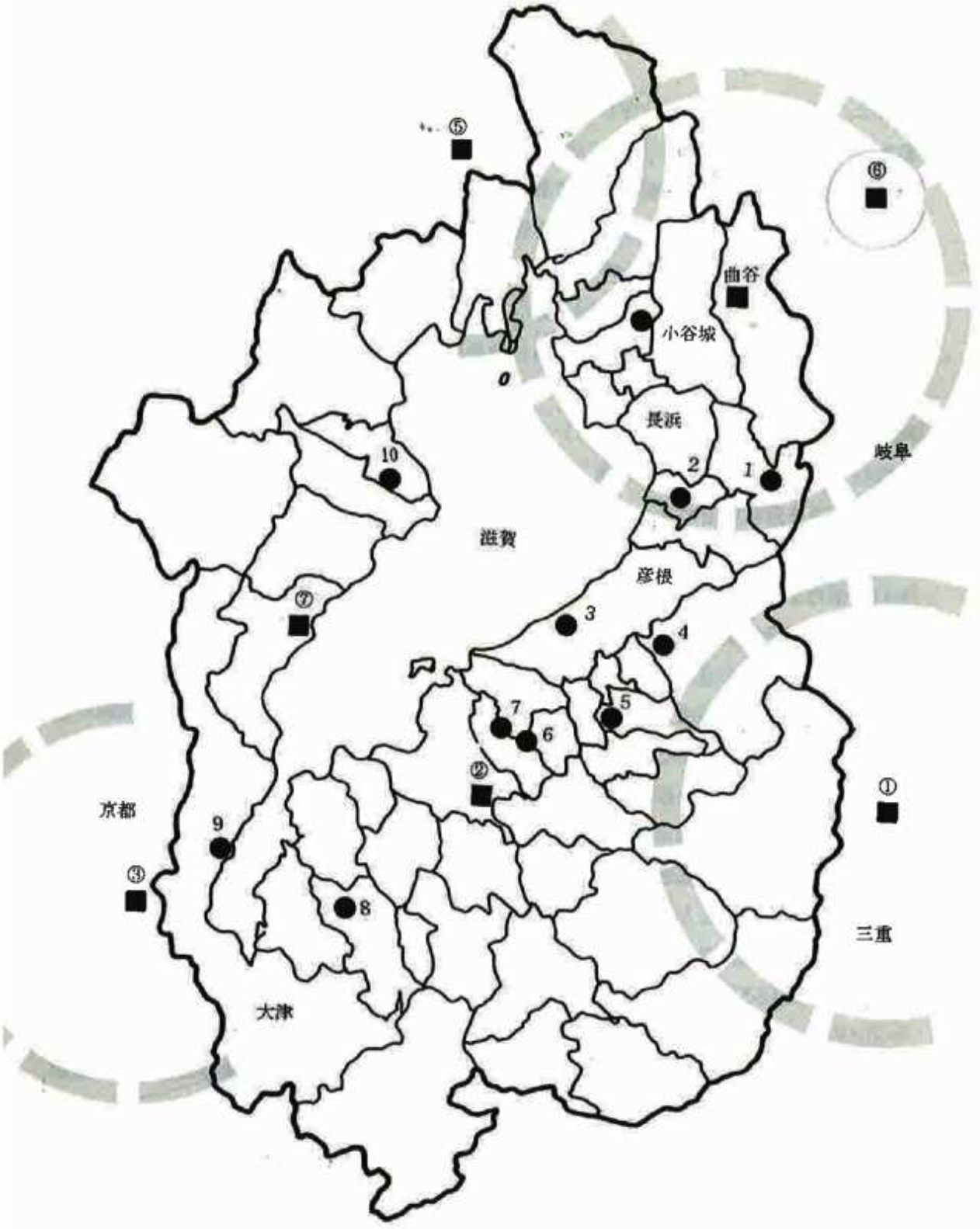
石臼生産地　出土石臼をみるまえに、県下の遺跡に石臼を供給した可能性がある、曲谷以外の石臼生産地を、県内と周辺地域に限って簡単に紹介したい。石臼の生産が、専業の石屋による大量生産になったのは江戸時代末期以降で、[44]曲谷やこれから述べる三重県の石博などは代表的な大量生産地である。それ以前は、良質の石材がある地域で農閑期に生産するといった小規模な産地が中心であったと考えられる。その中でも、曲谷は浅井氏の小谷城に石臼を供給するなど、中世にあっても知られた石臼生産地であったと思われる。

①石博（いしぐれ）（三重県員弁郡（いなべぐん）大安町）

鈴鹿山中の石博峠をはさんで滋賀県神崎郡永源寺町に隣接している。宇賀川に産する花崗岩を石臼・石仏・灯篭・鳥居などに加工した。豊臣秀吉の大阪築城に加わった東海・関東地方の石工が、石博峠や八風峠を越えた際に良質の花崗岩を見つけ、土地の人に技術を教えたのがはじまりとされている。[45]大安町郷土資料館で見せていただいた２点は、直径30cmの竹たが締め式のもので、目は８分画４溝式であった。供給口が丸いので曲谷臼との区別は可能である。三重県北部、岐阜県南部、滋賀県南部に分布しているという。[46]

②岩倉・長福寺（滋賀県近江八幡市）

湖東の近江八幡市と八日市市の境にある岩倉山から採れる良質の花崗岩を切りだし、従来から石臼つくりをおこなっていた。ここには、天正十一年（1583）を最古とする石工文書がのこされていて、豊臣秀吉の大阪築城などに関わりをもっていたことがわかる。臼についても、万治三年（1660）等の値段についての記録がある。また、曲谷石工との交流を物語る文書ものこっているという。集落に隣接する西山墓地で、つくりかけの石臼を見たという情報を得たが、現地で確認できなかった。しかし、墓地や山すそに石切りででたチップが散乱しており、中には本編で石臼用石材として取り上げたものに似た石材が数点みられた。また、妙感寺墓地には露頭した岩塊があり、ヤ穴が縦横に打たれている。[47]岩倉の



第40図　掲載遺跡位置図(■ 生産地　● 遺跡)

石臼は、湖東地方を中心に分布していると思われる。

③北白川（京都府京都市）

比叡山麓の北白川付近に産する白川石と呼ばれる黒雲母花崗岩を使って、石臼つくりがおこなわれていた。上臼の側面に彫った穴に、L字形の挽き木を打ち込んだ横打ち込み式の臼で、供給口が丸い。京都を中心に分布している[48]。

④越前（福井県足羽郡美山町）

越前の臼は美山町に産する小和清水石（砂岩）が中心であるが、笏谷石（凝灰岩）のものもある。小和清水では建築石材や燈篭、石臼などが作られていた。一乗谷朝倉氏遺跡で、両者の石臼や茶臼が多量に出土している。滋賀県北部にも入り込んでいるようである。臼は横打ち込み式で、供給口が四角、直径一尺弱、上臼のくぼみが深いなどの特徴がある[49]。

⑤疋田（福井県敦賀市）

福井県と滋賀県の県境に近く、赤みがかった花崗岩製の臼である。1本の竹たが締めで、上臼上面のくぼみが浅く、上縁が角ばっている[50]。

⑥西津汲（岐阜県揖斐郡久瀬村）

曲谷のある姉川上流とは、山をはさんで背中合わせの位置にあり、峠で結ばれている。三田倉谷の花崗岩を利用して、曲谷出身の利右エ門がはじめたと伝えられている。おそらく江戸時代末頃と思われる。形式は曲谷臼と同じで、久瀬村を中心に分布している[51]。

⑦南小松（滋賀県滋賀郡志賀町）

比良山系の花崗岩を利用して、燈篭・石仏・鳥居・石臼などを生産していた。技術は、奈良時代に朝鮮半島から渡来した一族がはじめたと伝えられている。昭和初期の最盛期には南小松 100戸のほとんどが石細工に関わっていたという[52]。

以上の7例を確認した。このうち⑤～⑦については、時代が限られていたり、大量生産地に隣接している小規模な生産地といえるのではないだろうか。

県下出土の石臼　管見に触れた県内の石臼を集成したところ、表9一覧表のとおり11遺跡46例が見つかった。遺跡の内訳は、城館跡 8・寺院跡 1・集落跡 1・近世墓 1で、城館跡が最も多い。

このうち敏満寺遺跡は、本来寺院遺跡であるが、発掘された地区が中世城郭遺構ととらえられていることから、ここでは城館跡に含めた[53]。また、1遺跡からの出土量としては、妙楽寺遺跡が19点と半数近くを占める。以下、湖北・湖東・湖南・湖西の順にみていきたい。なお、小谷城については、第3章3節で詳細に検討したので省略する。

1．宝持坊遺跡（坂田郡山東町清滝）

京極氏信が創建した徳源院を含む清滝寺遺跡の北側にある。弘仁年間（810～824）に開かれたという真言宗豊山派の宝持院に付随する坊跡とされる。昭和六一年の調査で、宝持院境内の北東隅に設定されたトレンチ１の整地層から石臼が出土している。測定値が記載されていないため、写真図版から判断するほかないが、下臼の４分の１片で、おそらく石材は花崗岩であろう。トレンチ４から出土している五輪塔火輪が、風化のはげしい曲谷石の特徴を持っていることや曲谷産石造物の分布圏と考えられることから、曲谷臼の可能性は高い。近世に属す。[54]

2．顔戸山砦遺跡（坂田郡近江町顔戸）

日撫山の頂上から南西に郭がならぶ。天野川をはさんで、南に戦国期に北近江と南近江の国境をなした地頭山や太尾山が至近距離にある。おそらく、日撫山麓に館をもつ土豪たちが、北方にもにらみがきく当所に砦を構えたものと考えられている。平成五年に、山頂部から茶臼の上臼片が１点採集されている。形態は推径は約19.5cm、このっている部分の高さ約11.3cmで８分画と思われる。上面はふちが全て欠けているが、滑らかなくぼみがゆるやかに傾斜している。奥行き約 2.7cmの挽き手を差し込む穴が一部のこっていて、穴の入口周辺が出っぱっており、飾りが付いていたものと考えられる。粒の細かい石質をもつ。[55]本遺跡は砦であり、軍事的緊張時のみ利用されたものと思われるが、天目茶碗なども出土していることから、眺望を利用した茶の湯の施設があったのかもしれない。

3．妙楽寺遺跡（彦根市日夏町）

荒神山の北東山麓に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。15～16世紀は石組水路・道路等で区画された町並みを形成し、区画内はさらに小溝や塀等により小区割りし、屋敷地としている。中世城館や琵琶湖岸に展開する中世村落の様子を知ることができる。昭和六〇年の調査で花崗岩製の石臼が８点出土している。つづく昭和六二年度には、茶臼が１点と花崗岩製石臼が９点、石材不明の石臼が１点出土している。茶臼の出土は、青磁茶碗などの茶道具のまとまった出土とともに、この集落で茶の湯文化が花開いていたことが推測されている。また、本遺跡が六角氏の軍事的前線地であり、八坂港を背後にもつ商業的要地であることを背景に、かなりの勢力をもっていた集落であったと推測されているが、この多量の石臼の出土によってもそのことがうかがえる。[56]出土した石臼のほとんどは、瀬戸美濃窯大窯編年Ⅰ・Ⅱ期（1490年～1570年）に属している。直径は26cm以上～35cmで、30cm～32cmが中心のようである。報告書には６点の実測図が掲載されていて、これをみるといずれも８分画の臼で、上臼の供給口が丸く、上面のくぼみは 3.5～ 4cmと深い。[57]

4．敏満寺遺跡（犬上郡多賀町敏満寺）

9世紀末から10世紀前半に創建された寺院で、青龍山麓にある今の胡宮神社付近に本堂があり、ここを中心に多くの塔堂が建ち並んでいたといわれている。調査されたのは、西谷とよばれる舌状台地北西部で、元亀三年（1572）の織田信長来攻に備えて、寺院施設の一角を城郭として築いたものであるとの評価がなされている。昭和六一年度に井戸跡から、井筒の石材として二次利用されたと思われる茶臼と石臼が１点づつ出土している。茶臼は高台と受け皿の付いた下臼である。石臼は、粗い花崗岩の下臼で、直径は約30cmである。芯棒穴は中央でいったんせまくなっている。出土した土師器から16世紀中葉のものと考えられる。[58]

5．島川遺跡（愛知郡秦荘町島川）

島川城は、15世紀頃より存在したと伝えられる中世城館（平城）である。文献資料に乏しく、不明なところが多い。石臼は、昭和六一年度の調査で小溝埋土中より出土している。時期は中世から近世はじめのものである。写真でみるかぎり上臼の小片で、上面のくぼみは上下に明瞭な段をもつ皿状で、ふちは角ばっている。石材は花崗岩と思われる。[59]

6．観音寺城跡（蒲生郡安土町石寺）

近江守護として、鎌倉から戦国時代末にいたるまで湖国に君臨した、佐々木六角氏の居城である。城郭の成立は南北朝期からであり、永禄十一年（1568）に織田信長の攻撃により開城した。山頂は物見台とし、本丸・平井丸・池田丸を稜線上に配し、今日観音正寺境内となっている曲輪を中腹として、数百余りの曲輪を南側斜面に構築している。守護所としての屋形は山麓にあった。昭和四四～四五年度に発掘調査がおこなわれ、本丸の屋敷跡中央で石臼と茶臼が、池田丸の屋敷跡北東隅で石臼が出土している。本丸の茶臼は臼面の直径17.6cmの安山岩製のもので、石臼は直径30cmの安山岩のものという。[60] これ以上の情報は報告書からは読みとれない。安山岩製石臼の産地については滋賀県周辺でみあたらない。

7．安土城跡（滋賀県安土町下豊浦）

織田信長が安土山に築城をはじめたのは天正四年（1576）で、天正七年に完成したという。しかし本能寺の変を契機にした戦乱で、天正十年（1582）六月、放火により落城した。安土城は壮大な天主閣をもち、石垣を多用した平山城で、城郭と町とが一体となった近世城郭の先駆となるものである。平成元年度からおこなわれている伝羽柴秀吉邸跡等の調査で、石臼が５点と茶臼が１点出土している。虎口階段埋土中より出土したものは、花崗岩製の上臼で、推径は約33cm、高さ約 9cmで８分画とされている。ふちはほとんど欠けているが、供給口と芯棒受けの半分がのこっている。供給口は隅丸の長方形をしている。前にもみたように、県内および周辺の花崗岩製石臼で、長方形の供給口をもつものは、今のと

ころ曲谷臼しかない。この資料が曲谷臼である可能性は高い。時代は安土時代とされている。他の上臼も花崗岩製であるが、全て[61]供給口の丸いタイプのものであった。また、挽き手溝がのこっているものがあり、たが締め式のものであろう。

8．久徳家墓地遺跡（栗太郡栗東町下鈎乙）

元禄十一年（1698）銘の墓石をもつ近世墓で、犬上郡多賀町久徳を本拠とした土豪久徳氏の一支流が栗太郡鈎へ移住・定着し氏寺にしたという。昭和五九年度の調査で、墓壙より70cm下の土壙から直径約27.5cmの下臼片が発見された。[62]

9．坂本城跡（大津市下坂本町）

元亀二年（1571）比叡山焼き討ち以降に、信長の命によって明智光秀が築城し、本能寺の変後焼亡するが、羽柴秀吉政権下で再建された。その後、天正十四年（1586）の大津城移転に伴い廃城となった。昭和五四年度に調査おこなわれ、安土桃山時代の多量の遺物と礎石建物・掘立柱建物・石垣・井戸・石組の溝などが検出された。石臼は３点出土している。[63]うち茶臼が１点あり、粒子の細かい石材の２分の１の下臼片である。臼面は８分画で直径は約16cmを測る。[64]天目茶碗や青白磁椀などとともに出土しており、茶の湯がおこなわれていたのであろう。

10．新庄城遺跡（高島郡新旭町新庄）

新庄城は高島越中守の居城「清水山城」の出城として、1500年頃に築かれたと考えられている。おそらく高島氏の有力家臣が在城していたと思われる。その後、天正元年（1573）に織田信長が家臣磯野員昌に与え、新庄城において高島郡内の支配を命じている。その後、天正六年（1578）に郡内支配の本拠が高島町大溝城へ移されるまでつづいた。昭和五七・五八年度に発掘調査がおこなわれ、直径１尺で８分画の花崗岩製上臼と下臼。直径６寸で８分画のものと直径５寸で８分画の茶臼破片の計４点が出土している。[65]これらの茶臼とともに、茶道具ともとらえられる瓦質土器の風炉や天目茶碗、信楽の壺が出土しており、茶が武士階級の中に定着していることを物語っている。[66]

まとめと課題　さて、県内の遺跡に石臼が普及しはじめたのはいつごろだろう。

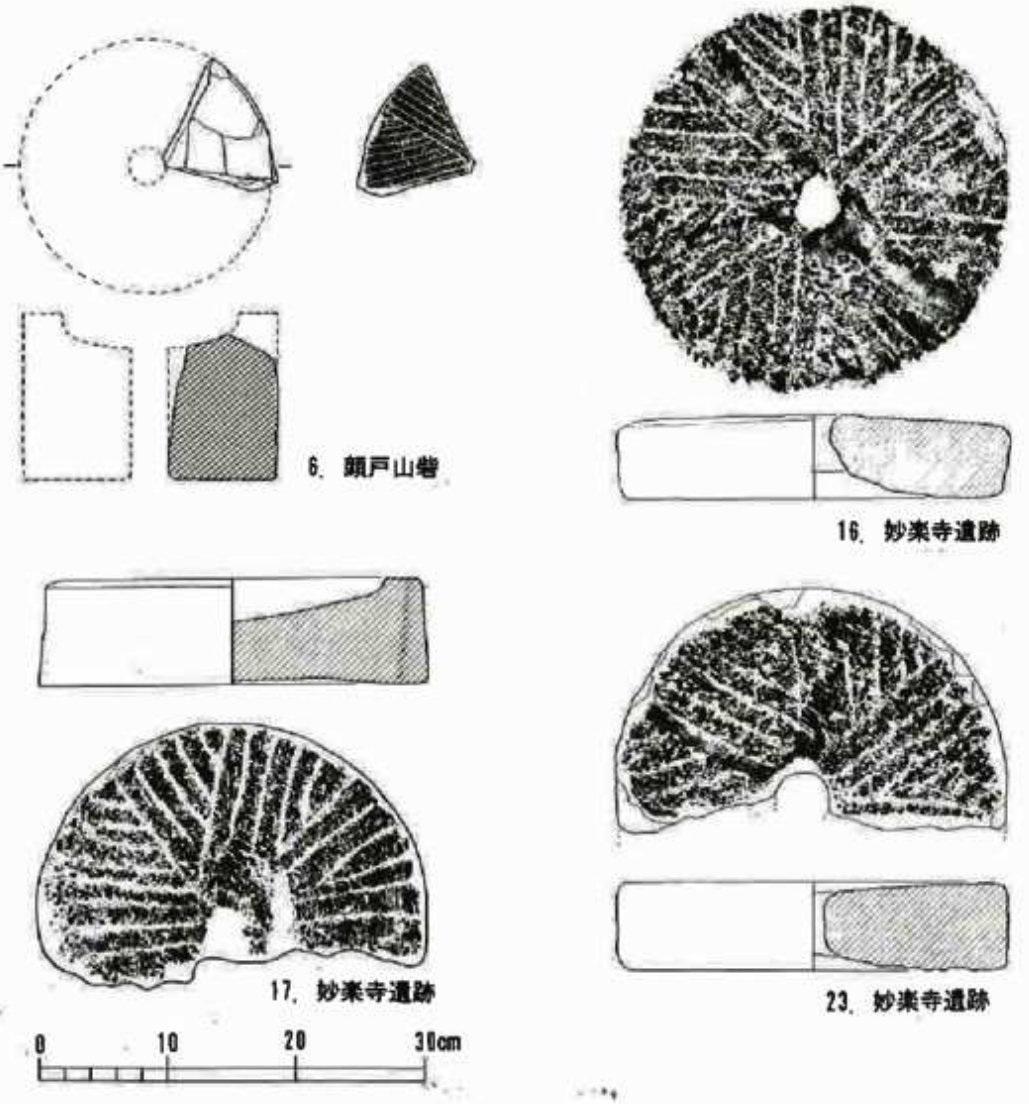
上記の11遺跡の中で、小谷城・安土城・坂本城・新庄城・敏満寺は、文献から築城や廃城の年代がわかる。小谷城の大永四年（1524）築城を除けば、他の４城は1570年代の築城である（新庄城は磯野時代とした）。廃城は、小谷城が天正三年（1576）、新庄城が六年（1578）、安土城が十年（1582）、坂本城が十四年（1586）である。また、妙楽寺遺跡では、すでに16世紀末頃（1570年代）に集落としての機能を停止している。これらのことから、近江においては、おそくても1570年代には、城館や寺院、あるいは勢力をもった村落

等の中で石臼が普及していたことがわかる。

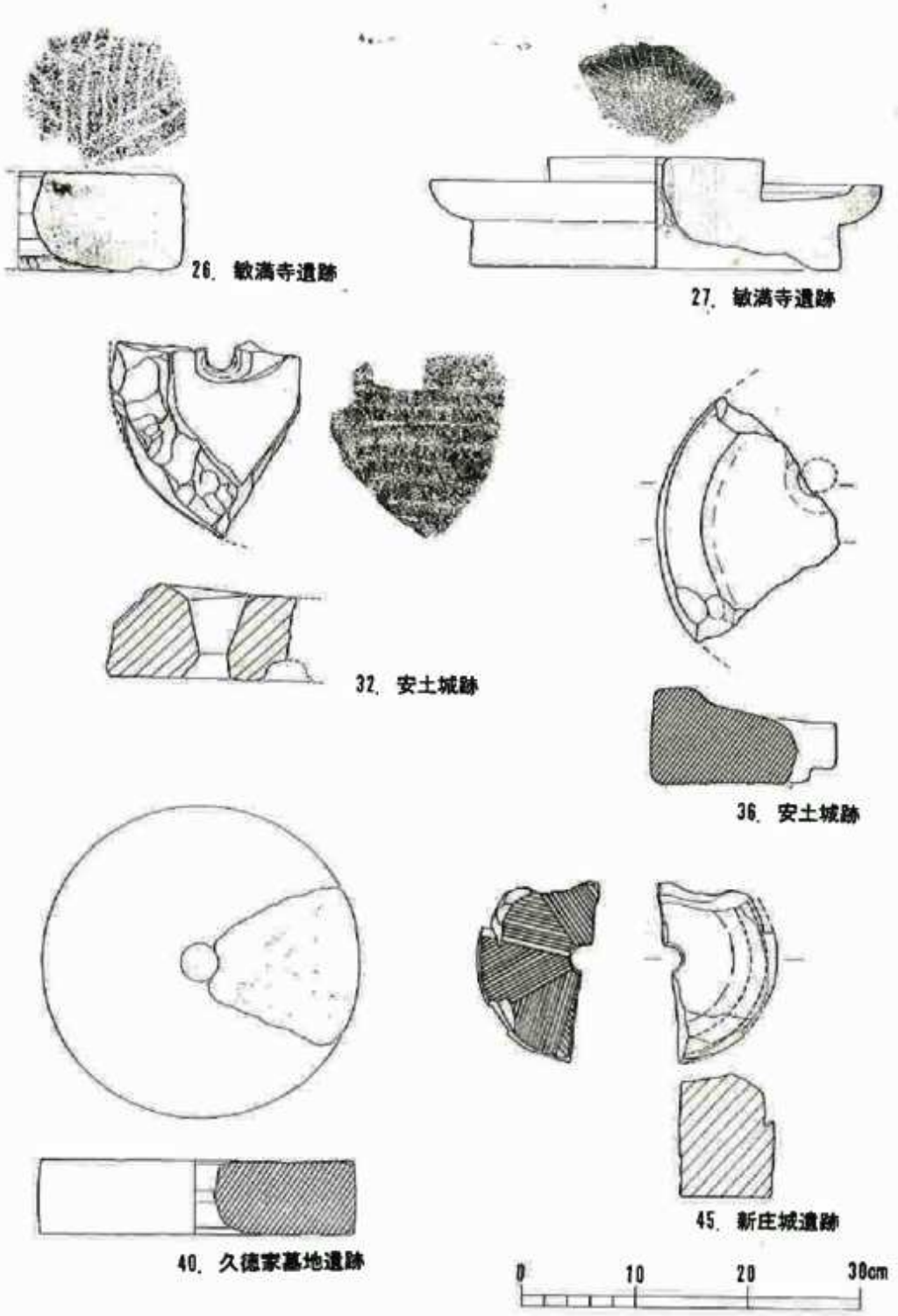
ただし、観音寺城のように南北朝期から守護所として成立していた城館から出土した茶臼などは、早い時期に輸入品として持ち込まれた可能性を考えなければいけないだろう。

今回、各出土遺物を直接詳細に観察しなかったために、石材やその質など重要な要素をみのがしている。今後、引き続き検討していきたいと考えている。さらに、曲谷のような生産地の調査も必要である。それらを改めて編集しなおすことによって、今後の検索に役立て、出土石臼の年代・産地・流通などの把握が可能となるのではないだろうか。大方のご教示、ご叱正を乞うものである。

（高橋順之）



第41図　出土遺物実測図（No.は表９に対応）



第42図　出土遺物実測図

（6．３６以外は各報告書より転載）

表9　滋賀県内における出土石臼一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	石質	備考
1	小谷城跡	浅井町	石臼	花崗岩	上臼 直径340㎜ 高さ100㎜ 大広間跡出土
2	小谷城跡	浅井町	石臼	花崗岩	桜馬場下出土
3	小谷城跡	浅井町	石臼	花崗岩	上臼 1/3 京極丸跡出土 直径312㎜ 高92㎜
4	小谷城跡	浅井町	石臼	花崗岩	下臼 1/3 直径368㎜ 高90㎜ 馬洗池出土
5	宝持坊遺跡	山東町	石臼	花崗岩	T1出土
6	顔戸山砦遺跡	近江町	茶臼		上臼 直径200㎜
7	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	昭和60年度
8	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
9	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
10	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
11	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
12	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
13	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
14	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	〃
15	妙楽寺遺跡	彦根市	茶臼	粒子の密な花崗岩	昭和62年度以下同じ 小片 高台風脚台 室町前半 B402
16	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	下臼 直径300㎜ 高65㎜ 8分画5~6条 B203
17	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 1/2欠 直径300㎜ 端部高80㎜ 中心高45㎜ 8分画3~8条 B204
18	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 1/2以上欠 直径348㎜ 端部高122㎜ 中心高85㎜ 室町前半 B403
19	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 1/2以上欠 直径350㎜ 端部高95㎜ 中心高50㎜ (6分画)8~9条 室町後半 B501
20	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 2/3以上欠 直径276㎜以上 端部高84㎜ 中心高40㎜ 6条前後 室町後半 B516
21	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	下臼 1/2欠 直径320㎜ 高59㎜ 8~9条 室町後半 B527
22	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 3/4欠 中心高44㎜ 室町後半 B528

23	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	下臼 1/2欠 直径300㎜ 高68㎜ (8分画) 6~7条 室町後半 B529
24	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼	花崗岩	上臼 1/4残 端部高84㎜ 中心20㎜ 室町後半 B529
25	妙楽寺遺跡	彦根市	石臼		下臼 1/2欠 直径260㎜以上 高95㎜ B903 室町後半
26	敏満寺遺跡	多賀町	石臼	花崗岩	下臼 2/3欠 直径300㎜ 高90㎜ 室町中期
27	敏満寺遺跡	多賀町	茶臼	(安山岩)	下臼 2/3欠 臼面直径192㎜ 高96㎜ 〃
28	島川遺跡	秦荘町	石臼		上臼 3/4以上欠
29	観音寺城跡	安土町	石臼	安山岩	上臼 2/3欠 直径300㎜ 本丸屋敷跡出土
30	観音寺城跡	安土町	茶臼	安山岩	下臼 2/3欠 臼面直径176㎜ 本丸屋敷跡出土
31	観音寺城跡	安土町	石臼		池田丸屋敷跡出土
32	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上臼 直径約330㎜ 高90㎜ 8分画8~9条 伝羽柴秀吉邸跡B地区虎口階段埋土出土 平成元年
33	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上臼 伝羽柴秀吉邸跡B地区裏虎口階段埋土出土 平元
35	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上下不明 伝羽柴秀吉邸跡C地区サブトレンチ 平元
36	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上臼 直径約310㎜ 高90㎜ 伝羽柴秀吉邸跡搦門前側溝 平成2年
37	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上臼 直径290㎜ 高120㎜ 8分画
38	安土城跡	安土町	石臼	花崗岩	上臼 直径約312㎜ 高90㎜ 平成5年
39	安土城跡	安土町	茶臼		下臼 臼面直径192㎜ 高台直径336㎜ 平成5年
40	久徳家墓地遺跡	栗東町	石臼	(花崗岩)	下臼 4/5欠 江戸期?
41	坂本城跡	大津市	茶臼	安山岩	下臼 1/2欠 (臼面直径約160㎜) (高約100㎜) 高台風脚台 8分画18条前後
41	坂本城跡	大津市	(石臼)		
42	坂本城跡	大津市	(石臼)		
43	新庄城遺跡	新旭町	石臼	花崗岩	上臼 直径300㎜ 8分画
44	新庄城遺跡	新旭町	石臼	花崗岩	下臼 直径300㎜ 8分画
45	新庄城遺跡	新旭町	茶臼		上臼 直径180㎜ 8分画18条前後
46	新庄城遺跡	新旭町	茶臼		直径150㎜ 18条前後

〈註〉

（第１章）

1　三輪茂雄　1978　『石臼探訪』産業技術センター

2　拙稿　1993　『起し又遺跡発掘調査報告書』伊吹町教育委員会

3　三輪茂雄　1975　『石臼の謎』産業技術センター

　　1975　「近江曲谷臼を訪ねて」（『民俗文化』145）

　　1977　「近江曲谷臼産地調査報告」（『民俗文化』169）

　　1977　「粉砕機の元祖　西仏房ー滋賀県曲谷遺跡第２次調査」（『粉体と工業』9-7）

　　1978　「西仏坊伝承について」（『民俗文化』173）

　　1978　『石臼探訪』産業技術センター

（第２章）

4　拙稿　1992　『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町教育委員会

5　三輪氏のご教示による

6　伊吹町史編さん委員会編　1992　『伊吹町史　自然編』伊吹町

7　拙稿　1992

8　木村至宏他編　1991　『滋賀県の地名』（日本歴史地名大系25）平凡社

9　小林健太郎　1974　「滋賀県姉川上流山村における生活圏の変化」（『滋賀大紀要』24）

10　三輪　1978

11　田岡香逸　1969　「近江湖北・湖東の石造美術(2)」（『民俗文化』70）

12　平成 3年度の町内遺跡分布調査で兼康保明氏に多くご教示いただいた

13　桐原健　1993　「信濃中世末における石臼の所有者」（『信濃』45-4）

14　三輪　1975

15　田中美津子　1990　「ルポ山の村から湖畔から」（『湖国と文化』52）

（第３章）

16　三輪　1978　『臼』（ものと人間の文化史25）法政大学出版局

17　三輪　1975　『石臼の謎』

18　三輪　1975　『石臼の謎』、北村誠一・段上達雄・富田清子　1986　『佐渡の石臼』（民族文化双書 4）未来社

19　同上、三輪　1975　『石臼の謎』

20　同上、三輪　1975　『石臼の謎』

21　三輪　1978　『石臼探訪』

22　北村他　1986

23　三輪　1975　『石臼の謎』

24　磯貝勇　1962　「石屋」（『日本民俗学大系』 5　平凡社）

25　段上達雄　1982　「讃岐庵治の石工道具」（『中国・四国地方の民具』　明玄書房）

26　段上達雄　1983　『国東半島の石工１』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第１集）

　　同上　1984　『国東半島の石工２』（同上第２集）

27 北島俊朗他 1987 『金沢の石切り緊急調査報告書』（金沢市文化財紀要65）金沢市教育委員会

28 松田国雄 1982 「周防久賀の石垣積みと用具」（『中国・四国地方の民具』 明玄書房）

29 北村 1986

30 磯貝 1962 等

31 段上 1982

32 秋田裕毅編 1988 『史跡小谷城ー浅井三代の城郭と城下町』湖北町教育委員会・小谷城址保勝会

33 中村林一編 1976 『史跡小谷城跡環境整備事業報告書』湖北町教育委員会

34 略測図ならびに写真を三輪茂雄氏に見ていただいた

35 不破幹雄 1980 『垂井町指定史跡菩提山城遺跡測量調査報告書』垂井町教育委員会

36 三輪 1978 『石臼探訪』

（第4章）

37 中村編 1976

38 三輪 1978 『石臼探訪』

39 近江八幡市教育委員会・近江八幡市立郷土資料館 1985 『石工文書解読書』
江南洋 1988 「石工文書」（『滋賀考古学論叢』4）

40 河内美代子氏にご教示いただいた。

41 岩崎二郎・田中晋作 1988 『ミノバ石切場跡発掘調査報告書』（(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書18）(財)大阪府埋蔵文化財協会

42 春日村史編纂委員会編 1983 『春日村史』上巻 春日村

（付章）

43 桐原 1993

44 三輪 1978 『臼』

45 大安町教育委員会 1993 『大安町史 2巻』

46 三輪 1978 『臼』

47 現地調査に際して、兼康保明氏にご教示いただいた。

48 三輪 1975 『石臼の謎』

49 同上

50 同上

51 三輪 1978 『石臼探訪』
岐阜県揖斐郡内の石臼については高橋俊示氏に、多くご教示いただいた。

52 長谷川嘉和編 1989 『滋賀県の諸職ー滋賀県諸職関係民俗文化財調査報告書ー』滋賀県教育委員会

53 中井均 1988 「敏満寺遺跡の防御的施設の評価～寺院と城郭の関わりを中心として～」（『敏満寺遺跡発掘調査報告書』）滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

54 岩間信幸編 1987 『宝持坊遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

55 近江町教育委員会のご好意で遺物の写真撮影・実測をさせていただいた。

56 一般民衆に石臼が普及するのは江戸時代中期前後といわれている。

57 伊庭功 1985 『妙楽寺遺跡Ⅲ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

葛野泰樹・稲垣正宏・三宅弘　1989　『妙楽寺遺跡Ⅱ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

58　横田洋三編　1988　『敏満寺遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

59　林定信　1986　『島川遺跡発掘調査概要報告書』秦荘町教育委員会

60　丸山竜平　1971　『観音寺城跡整備調査報告書』滋賀県教育委員会

61　葛野泰樹・木戸雅寿　1991　『特別史跡安土城跡発掘調査報告Ⅰ－伝羽柴秀吉邸跡』滋賀県教育委員会

未報告のものについても、安土城郭調査研究所の木戸雅寿氏・小竹森直子氏・勝見孝彦氏のご好意で実見させていただいた。数値はこの時の計測値である。

62　造酒豊　1986　『栗東町久徳家墓地遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

63　吉水真彦　1979　「近江坂本城跡の発掘調査（速報）」（『滋賀文化財だより』33）

64　大津市歴史博物館で実見した。

65　清水尚編　1991　『新庄城遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

66　兼康保明　1988　「出土遺物に見る茶道具とその評価－近江の中世遺跡を例として」（『滋賀考古学論叢』4）

67　安土城出土品は、高橋が計測した数値であり、後日、報告書が刊行のでそちらを参照してほしい。

（参考文献）

その他、石切場の調査として、滑石製石鍋製作場跡に関する下記の文献がある

・　正林護編　1980　『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』（大瀬戸町文化財調査報告書 1）

・　乗安和二三・大村秀典　1987　『下請川南遺跡』（山口県埋蔵文化財調査報告104）宇部市土地開発公社・山口県教育委員会

図　　版

長尾寺遺跡周辺空撮（左が北）

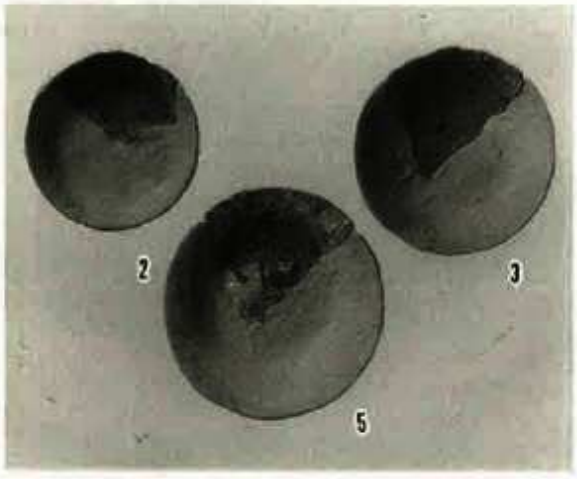
後谷墓地

作業風景

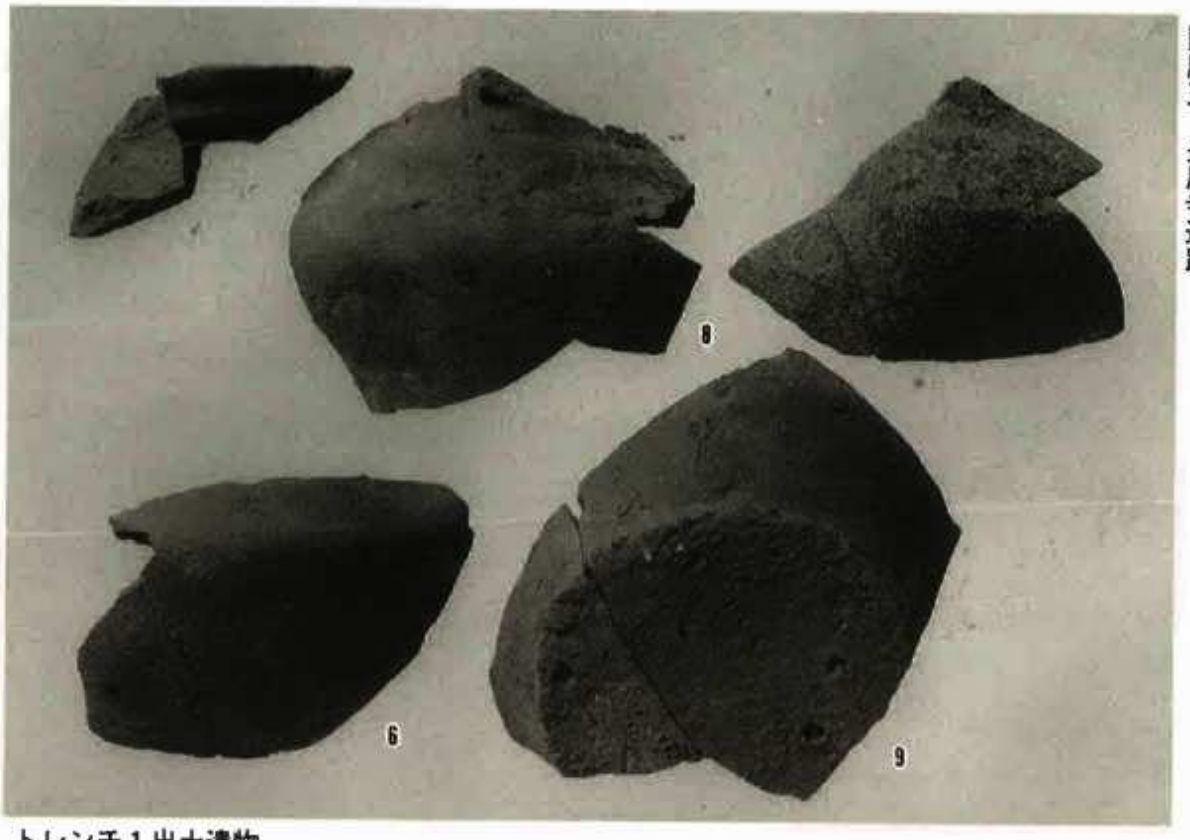
トレンチ１全景

遺構出土状況（トレンチ１）

遺物出土状況

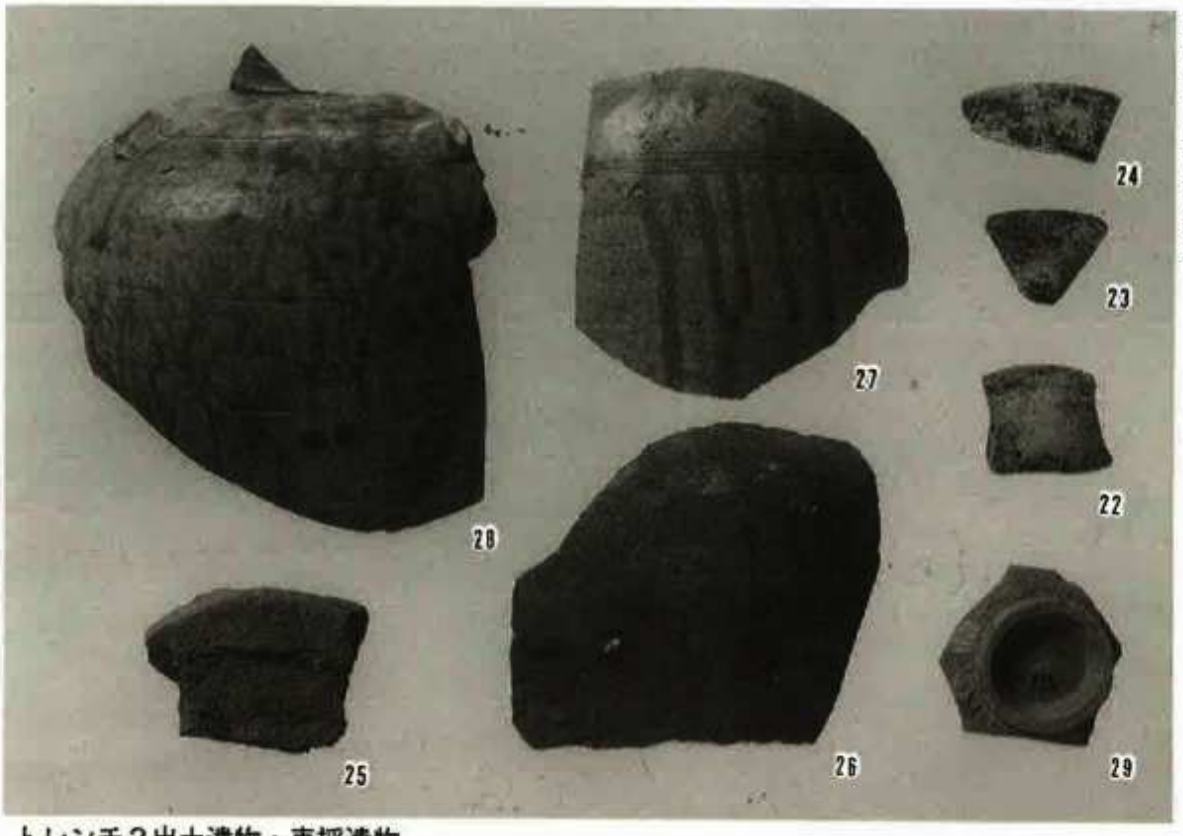


トレンチ１出土遺物

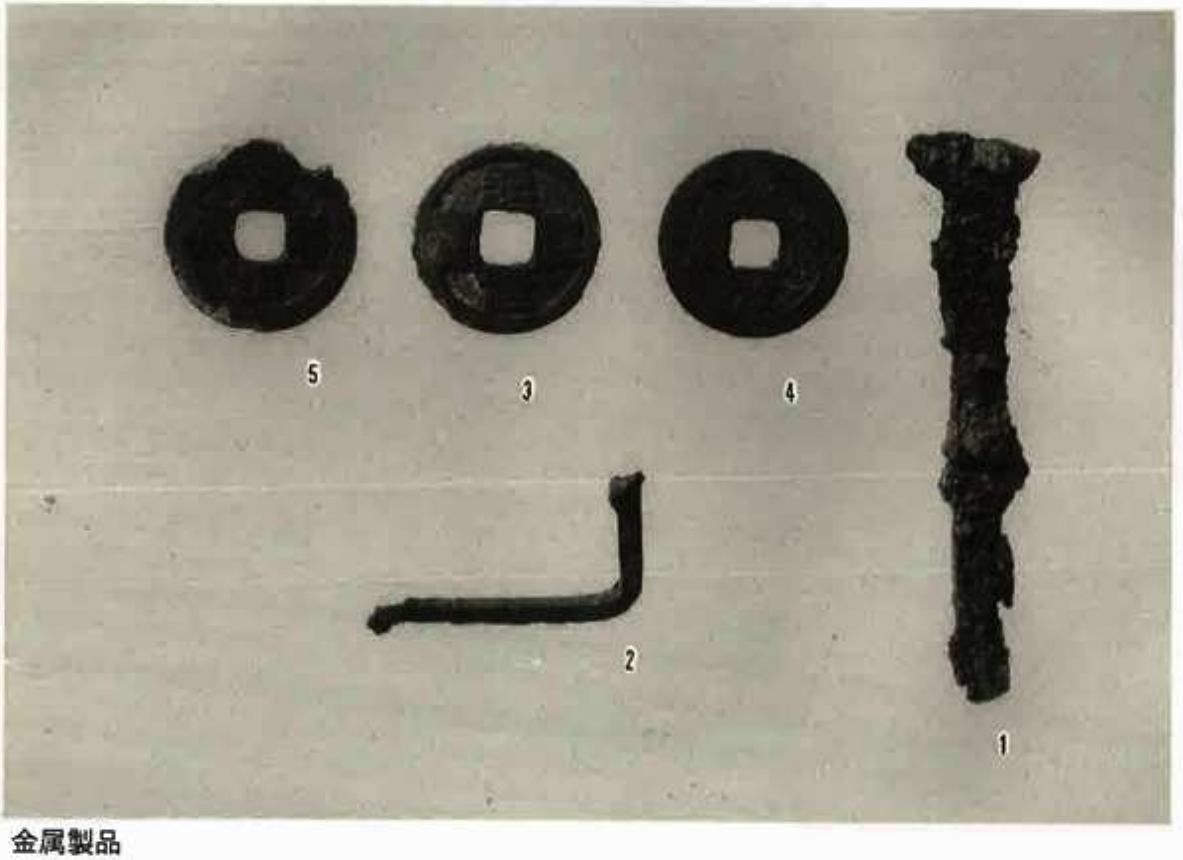


トレンチ１出土遺物

トレンチ１出土遺物



トレンチ２出土遺物・表採遺物



金属製品

出土石製品

出土石製品

図版八　石臼生産遺跡

石臼生産遺跡（曲谷集落）空撮（上が北）

出土した石臼未製品

図版九　石臼生産遺跡

（1）上面　・　（1）下面

（2）上面　・　石質（1）

参考1，2　・　参考3，4

（3）

出土遺物等

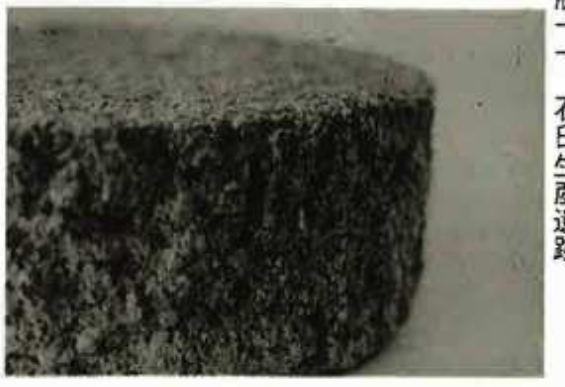
（4）　・　（5）

（6）上面　・　（7）上面

（8）上面　・　（9）上面

（10）下面

出土遺物



・供給口を下から彫りはじめる（10）

・側面を整形するノミ跡（10）

（11）上面

・上面のくぼみを彫るノミ跡（11）

（12）上面

・（13）上面

（14）下面

出土遺物

(15) 下面　・　(16) 上面

(16) 下面　・　くぼみ彫りかけで
供給口をあける (16)

下面供給口の剥離
(16)　・　参考－5　上面

参考－5　下面

出土遺物

(17) 上面　・　欠けた挽手溝 (17)

(17) 下面　・　(18) 上面

(19) 上面　・　十字状のノミ跡 (19)

(20) 下面

出土遺物

(21) 上面　・　芯棒穴 (21)

(22) 下面　・　芯棒穴 (22)

(23) 下面　・　芯棒穴 (23)

(24) 下面

出土遺物

ひび割れ（24）・（25）下面

（26）上面・（27）上面

（28）上面・（29）上面

（30）下面

出土遺物

伊吹町文化財調査報告書第 8集

伊吹町内遺跡発掘調査 II

1994年 3月

編集・発行 伊吹町教育委員会

住所 滋賀県坂田郡伊吹町春照491

電話 0749-58-1121

印 刷 垂井日之出印刷

住所 岐阜県不破郡垂井町綾戸1098-1

電話 0584-22-2140